義に對立して、アリストテレースに、より多く依據することにより、新生面を開拓しつつあるのは周知の事實である。教育界に於てもまたナトルプのプラトーン主義に對して、例へばヴィルマンの如き有爲の教育學者が、アリストテレース教育思想の意義の闡明に努力し、自らの學說上にも少からざる影響を受けてゐる。

1) πολίτης.　2) κοσμοπολίτης.　3) ἑλληνίζειν.

第四章　新希臘時代第二期(世界主義時代)の教育

第一節　希臘文化の世界化

世界主義時代　上の二章に述べた前後二期は舊希臘より新希臘への推移を含むとはいへ、何れも希臘文化が未だ世界的傳播と混化とに於てではなく、それ自らの地盤―希臘本土と希臘植民地―に於て、典型的に榮えた時期である。吾々がこの二期を併せて廣く古典時代と名づけたのはこの故である。然るにペロポンネーソス戰爭(前四三一年―四〇四年)はアテーナイの覇權を失はしめ、コリントス戰爭(前三九五年―三八七年)はコリントスを衰微せしめ、テーベイ戰爭(前三七九年―三六二年)はスパルタを敗退せしめ、つひにマケドニアの英主ピリポス二世がアテーナイとテーベイの聯合軍をカイロ-ネイアの一戰(前三三八年)に破つて以來、希臘民族の政治的獨立は失はれ、次いでアレクサンドロス大王の偉業を通じて、彼等とその全文化とは、本來の鄕土を離れて、地中海を中心とする當時の主要世界に限なく傳播した。今や希臘民族は特定の都市國家の市民[1]たることを失つて世界市民[2]となり、しかも世界を希臘化[3]することによつて世界の師となつた。吾々はそれ故にさきにも解明した如く、この希

1) the cosmopolitan period.　2) der hellenistische Zeitalter.
3) Ἀλέξανδρος.　4) κοινή.

羅教育史最後の一期間をば、世界市民時代の意味に於て世界主義時代[1]と名づけ、又史家ドロイゼンに從ひ、世界の希羅化時代の意味に於て希羅主義時代[2]とも呼ぶ。

希羅文化の世界的傳播　ホメロース詩篇への親熱によつて高貴豐饒な想念を養はれ、アリストテレースの直接指導によつて包括的な學的研究への興味と理解とを與へられたアレクサンドロス大王[3]は、名實共に拔群の英主であつた。故に大王の遠征（前三三四―三二三年）は單に軍隊の遠征、政治的勢力の勝利ではなくて、學藝の遠征であり、希羅文化の世界征服であつた。すぐれた歷史家や地理學者や天文學者や藝術家や哲學者達が大王に伴はれて行つた。かくして力と感激と知性とに充てる王師の進む所、波斯・埃及等の老大國は破壞せられて新文化建設の地盤となり、狹き鄕土に盛りを過ぎたる希羅文化は新鮮なる廣野に移植せられた。「希羅民族」と「異民族」との舊き障壁は撤去せられて、「共通の言葉[4]」を語る「世界市民」が萬里の山河を越えて握手した。吾々はこの大規模なる文化運動をば先づその主要なる中心地によつて把握し、同時にそれ等の教育的意義を考察しようと思ふ。

第二節　文化の中心地とその教育的職能

アテーナイの諸學派　世界主義時代文化の中心地として先づ顧みらるべきは、舊き傳統を

1. アレクサンドロス大王

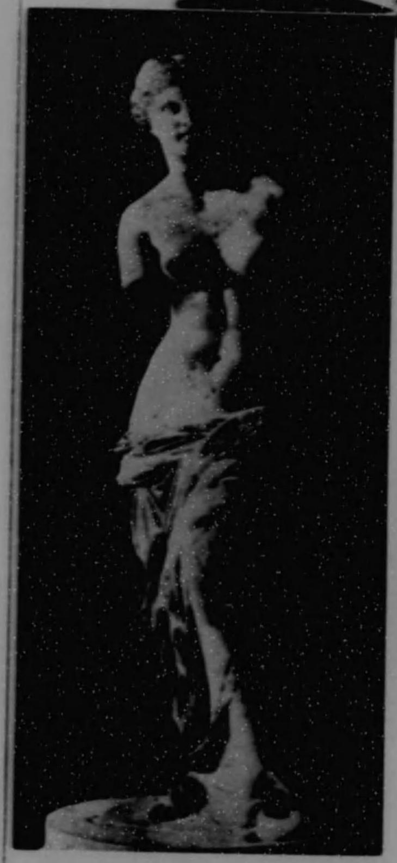
2. ファロス島の燈臺想像復原圖

3. アレクサンドレイアの平面圖

Ⅸ. 世界主義時代の文化（二）

1. ペルガモンのアクロポリス

2. ペルガモンの彫刻



3. メロスのアプロディテ

誇るアテーナイである。そこにはイソクラテースの傳統を承けたる修辭學校と、プラトーンを祖述せるアカデーメイア學派と、アリストテレースを繼承せる逍遙學派とが、共に世界の學府たる權威を有し、各地から優秀の學徒を集めて講筵を賑はせてゐた。そこに又新しくストア及びエピクーロスの兩學派が起り、舊學派に對抗して新說を唱道し、つひに世界主義時代の思想界を代表するに至つた。これ等の中、イソクラテースの修辭學校については既に述べたから、ここには他の諸學派について略述しよう。

アカデーメイア學派　アカデーメイアは、その神域とギュムナシオンとを繼續的不動產とし（曾ては反對せる）報酬受領制度の採用によつて動產を獲得し、學頭を中心に研究結社を成せる學徒を生ける力として、數百年間の命脈を保つた。（學頭の傳統は、勿論その間に斷續はあるが他の如何なる學派よりも明確に傳へられ、紀元後五二九年ユスティニアーヌス皇帝の命によるアカデーメイア解散の時まで續いてゐる。）但しその間にも學的傾向に變遷があり、通常三期に小分せられる。第一期は「古アカデミー」であつて、プラトーンの甥スペウシポス、弟子クセノクラテース、それからポレモーン、クラントール（前二者の弟子）、クラテース（ポレモーンの弟子）が約百年間に互り相繼いで學頭となり、大體祖師の學的立場を忠實に踏襲した。第二期は「中期アカデミー」であつて、その中が更に初期のアルケシラオス派と後期のカルネアデース（前一五五年羅馬に在り）の派とに分れ、大體に於て懷疑主義の思想が支配した。第三期は「新アカデミー」であつて、ラリサのフィローン（前八七年羅馬に在り）やアスカロンのアンティオコス（前七八年キケロがアテーナイでこの人に師事した）がこれを代表し、主として折衷主義の傾

向を取つた。この新アカデミー派の末なるトラシュロス（羅馬ティベリウス帝治下の人）はプラトーンの著作を整理し三十六篇を四篇づつ九卷に分けたが、この分類は今日に至るまで愛用せられてゐる。

遊逸學派　リュケイオンの遊逸學派もアカデーメイアと同樣の物質的保證と人事的制度とによつて長き學統を保つてゐたが、中でも主なる代表者は次の諸學者である。テオプラストスはレスボス島のエレボス出身で動植物學の造詣深く、又その著『性格論』は性格學的研究の古典として注目すべき名著である。彼が學頭たりし時、リュケイオンは二千人の學生を有してゐたと傳へられてゐる。エウデーモスはロドス島出身でアリストテレースの弟子中最も傑出し、數學・星學の研究に功あり、またアリストテレースの倫理學講義を出版したものとして有名な『エウデミア倫理學』がある。アリストクセノスはタレンツム出身で音樂に關する歷史的並びに理論的研究に名高い。ディカイアルコスはシケリア島のメッサナ出身で有名な博學者であり、その著『希臘の生活』は希臘の地理・歷史・道德・宗教等を內容とする文化史的逸作である。ストラトーンは小亞細亞のラムプサコス出身で自然研究の該博さに於て遊逸學派中第一であり「自然研究者」の異名を以て呼ばれた。尙この派の末なるアンドロニコスはロドス島出身で羅馬に住み、アリストテレースの著作を整理し出版したことで有名である。これより以後遊逸學派は組師の著作の校訂・註釋・拔萃・解釋等を主なる任務として保守的機能を守るに至つた。

ストア學派　ストア學派の開組はキティオン（キュプロス島に在り）のゼーノーン[1]である。彼は前三三六年頃に、富める商人の子として生れたが、難船して財を失ひ、前三一四年頃アテーナイに來て哲學を

1) Ζήνων. (340—265)

諸學者（キュニク派のクラテース、メガラ派のスティルポーン、アカデーメイア派のポレモーン等）に學び、前三〇八年にアテーナイ市內の或る「彩色せられた柱廊」[1]に於て講筵を開き「ストア學派」の組となつた。彼の眞摯嚴肅なる性格、簡素なる生活、寡欲親切なる行狀は一代の尊敬を博し、多數の門下を集めた。彼は前二六四年に自殺したが、學統は弟子クレアンテース（トロアスのアソス出身）に傳へられ、更にその弟子クリュシポス（キリキアのソロイ出身）に傳へられ、この人によつてストア學派の思想は整備せられて永く傳へられた。これ等にキオス出身のアリストーン、バビロニアのディオゲネース等が加はつて「古ストア」を形成し、主として後逸の如き倫理問題に研究を集中した。第二期は「混合思想」[2]の特色を現はし、その代表者パナイティオスはロドス出身で、初めペルガモンに於てクラテースの敎を受け、次でアテーナイに出て上記バビロニアのディオゲネースの門弟となり、又アカデーメイア中期の懷疑思想にも强く影響せられた。後に羅馬に行つて知名の政治家と交り、それによつてストア學說は羅馬に移入せられた。同じく第二期ストア學派の代表者ポセイドーニオスはシリアのアパメア出身でアテーナイに學んだ後、諸地方を遍歷し、ロドス島に居を構へてそこにストア學派を築えしめた。古代第一の博學者で特に地理・歷史の研究に偉績を遂げた人である。キケロもロドスに旅行せる時、彼に敎を受けた。第三期ストア學派は宗敎的傾向を帶びて行つた。

エピクーロス學派　エピクロース[1]學派の開組エピクロースは、前三四一年頃アッティケー州に生れたが幼にしてサモス島に伴はれ、ために通常サモス出身者とせられてゐる。十八歲の頃アテーナイに出てアカデーメイアにクセノクラテースの敎を受け、又デーモクリトスやピュローンの學說をも學んだやうである。後ミュティレーネー及びラムプサコスで哲學の講筵を開いたが、前三〇六年に再びアテーナイに來て、

1) στοὰ ποικίλη.　2) Synkretismus.　3) Ἐπίκουρος (341—270)

1) Κῆποι Ἐπικούρου.　2) ἔφηβος.

有名な庭園―エピクーロスの庭[1]―を買受け、そこに學園を開いて死(紀元前二七〇年)に至るまで靜かな研究教授生活を送つた。彼は洗煉された趣味と明朗な社交性とを有する典型的都人士であり、後述の如き上品な快樂主義思想を體現した人である。エピクーロス學派の代表者中、主なる者は、ラムプサコス出身のメートロドロス、シドン出身のプトーノーン、ガダラ(パレスティナに在り)出身のプィロデーモス等である。

アテーナイの大學　アテーナイには上述の如き諸學派が、或は傳統に據り或は新興の意氣を以て、競ひ榮えたのであるが、これ等(特に哲學四學派)を併せてアテーナイの大學と呼ばれる。これ等の學校に於ては、學頭は初め先任者の指名によつて定められたが、やがて學生または教職員(中の評議員ともいふべきもの)によつて選擧せられることとなり、更に羅馬時代に入つては、地方官若しくは皇帝が任命することとなつた。學頭の下に下級の教師や助手があつて、正科を教授したり、或は豫備的課程を擔任したりした。學生は「エプェーボス[2]」といふ組合を作つて寄宿舍に住み、そこから學校に通ふのを常としてゐた。前二〇〇年頃戰亂によつて學園が破壞せられてから、學徒は市内のギムナシオンや劇場に集まつて研究を續けた。

羅馬皇帝ウェスパシアヌス以來アテーナイの大學も國庫の支出を受けることとなり、ハドリアヌス帝やアントニウス帝も熱心にこれを支持したため、學運大いに榮え當時の羅馬人士の教養の中心地となつた。教授の方法や學生の生活等に於て中世の大學のそれと(事實上

1) Ἀλεξάνδρεια.　2) Πτολεμαῖος Σωτήρ. (r. 323—285).
3) Π. φιλαδελφός. (r. 285—247)　4) μουσεῖον.　5) βιβλιοθήκη.
6) Βρυχεῖον.　7) Σεραπεῖον.

の連續はなかつたけれども、軌を一にするものが多かつた。然し東羅馬帝國のユスティニアヌス皇帝が、アテーナイの大學をば基督教に反對することの故に閉鎖を命じた時(五二九年)を以て、この長き學的傳統は中絶したのである。(近世に於けるアカデーメイアの再興については後に述べるであらう。)

アレクサンドレイアの學府　世界主義時代文化の中心地として、アテーナイにも優つて著名なるはアレクサンドレイア[1]である。そこではプトレマイオス王家が前三三二年より前三〇年に至るまで支配し、アレクサンドロス大王の遺志を繼いで、この首都を世界文化の中心たらしめるために盡瘁した。第一代プトレマイオス・ソーテール[2]は大王に從つて遠征し、また大王歿後の紛亂を鎭めて、埃及に君臨したのであるが、その晩年は内治に專心し文敎の興隆に盡力した。第二代プトレマイオス・フィラデルフォス[3]はその長き平和の治政に於て文化の保護勸奬に主力を盡し、有名な研究施設を創建した。それは古くより存した埃及の施設に倣つたもので、一個の學園[4]と二個の圖書館[5]とから成る。學園は學藝の神ムーサの社殿の周圍に建てた研究室の一群で、そこに各方面の學者が公の給費を受けて研究に從事し、相互の切磋に資したのである。この學園に直接附屬してブリュケイオン[6]圖書館があり、更に都市の一隅にセラペイオン[7]圖書館があつて、この内外兩圖書館に希臘を始め埃及・猶太等の諸文獻が蒐集

1) Κῆποι Ἐπικούρου.　2) ἔφηβος.

有名な庭園―「エピクーロスの庭」[1]―を買受け、そこに學園を開いて死(前二七〇年)に至るまで靜かな研究教授生活を送つた。彼は洗練された趣味と明朗な社交性とを有する典型的都人士であり、後述の如き上品な快樂主義思想を體現した人である。エピクーロス學派の代表者中、主なる者は、ラムプサコス出身のメートロドロス、シドン出身のダェーノーン、ガダラ(パレスティナに在り)出身のディロデーモス等である。

アテーナイの大學　アテーナイには上述の如き諸學派が、或は傳統に據り或は新興の意氣を以て、競ひ榮えたのであるが、これ等(特に哲學四學派)を併せてアテーナイの大學と呼ばれる。これ等の學校に於ては、學頭は初め先任者の指名によつて定められたが、やがて學生または教職員(中の評議員ともいふべきもの)によつて選擧せられることとなり、更に羅馬時代に入つては、地方官若しくは皇帝が任命することとなつた。學頭の下に下級の教師や助手があつて、正科を教授したり、或は豫備的課程を擔任したりした。學生は「エフェーボス」[2]といふ組合を作つて寄宿舍に住み、そこから學校に通ふのを常としてゐた。前二〇〇年頃戰亂によつて學園が破壞せられてから、學徒は市内のギムナシオンや劇場に集まつて研究を續けた。

羅馬皇帝ウェスパシアヌス以來アテーナイの大學も國庫の支出を受けることとなり、ハドリアヌス帝やアントニウス帝も熱心にこれを支持したため、學運大いに榮え當時の羅馬人士の教養の中心地となつた。教授の方法や學生の生活等に於て中世の大學のそれと(事實上の連續はなかつたけれども)軌を一にするものが多かつた。然し東羅馬帝國のユスティニアヌス皇帝が、アテーナイの大學をば基督教に反對することの故に閉鎖を命じた時(五二九年)を以て、この長き學的傳統は中絶したのである。(近世に於けるアカデーメイアの再興については後に述べるであらう。)

1) Ἀλεξάνδρεια.　2) Πτολεμαῖος Σωτήρ. (r. 323—285).
3) Π. φιλάδελφος. (r. 285—247)　4) μουσεῖον.　5) βιβλιοθήκη.
6) Βρυχεῖον.　7) Σεραπεῖον.

アレクサンドレイアの學府　世界主義時代文化の中心地として、アテーナイにも優つて著名なるはアレクサンドレイア[1]である。そこではプトレマイオス王家が前三三二年より前三〇年に至るまで支配し、アレクサンドロス大王の遺志を繼いで、この首都を世界文化の中心たらしめるために盡瘁した。第一代プトレマイオス・ソーテール[2]は大王に從つて遠征し、また大王歿後の紛亂を鎭めて、埃及に君臨したのであるが、その晩年は内治に專心し文教の興隆に盡力した。第二代プトレマイオス・ヴィラデルフォス[3]はその長き平和の治政に於て文化の保護勸奬に主力を盡し、有名な研究施設を創建した。それは古くより存した埃及の施設に倣つたもので、一個の學園[4]と二個の圖書館[5]とから成る。學園は學藝の神ムーサの社殿の周圍に建てた研究室の一群で、そこに各方面の學者が公の給費を受けて研究に從事し、相互の切磋に資したのである。この學園に直接附屬してブリュケイオン[6]の圖書館があり、更に都市の一隅にセラペイオン[7]圖書館があつて、この内外兩圖書館に希臘を始め埃及・猶太等の諸文獻が蒐集

せられた。第三代プトレマイオス・エウエルゲテースは[1]アリストテレース著作の寫本及び猶太・埃及その他東方諸國の文獻の蒐集に功があり、第四代プトレマイオス・フィロパトール[2]は希臘の遍歷學者をしてアレクサンドレイアを訪れたる場合には必ずその所藏文獻の寫本をそこの圖書館に遺さしめた。かくして紀元後三世紀頃に於ける藏書數は兩圖書館を合して約五十三萬二千八百卷に達したとのことである。

アレクサンドレイア學府に於て發展し若くは新興した學術の主なるものは、第一にいはゆるプトレマイオス天文學であり、それによつて地球の周圍及び直徑、太陽及び月の距離、春分秋分等が知られ、近世コペルニクスの出現まで長く天文學上の通說を成して來た。この學說の唱道建設に最も功績のあつたのはニカイア出身のヒパルコス[3]である。第二に文法・文獻學の發展も注目すべく、原典批判や註解が大いに行はれ、この方面の代表者として、エラトステネース(キュレネー出身)[4]、アリストファネース(ビザンティオン出身)[5]、アリスタルコス(サモトラキア出身)[6]等の名が目立つてゐる。第三に數學及び自然科學の發達が顯著であつて、幾何學のエウクレイデース(出身地不明)[7]、物理學のアルキメーデース(シュラクーサイ出身)[8]、醫學のヘロフィロス(カルケドーン出身)[9]、エラシストラトス(ケオス島出身)[10]、ガレーノス(ペルガモン出身)[11]等の名がこれを物語つてゐる。

1) Πέργαμον. 2) Ἄτταλοι. (241—197). 3) Εὐμένης. (197—159)
4) Ἀντιόχεια. 5) Ταρσός. 6) Ῥόδος. 7) Πέλλα.

1) Π. Εὐεργέτης. (r. 247—222). 2) Π. Φιλοπάτωρ. (r. 333—205).
3) Ἵππαρχος. (160—125). 4) Ἐρατοσθένης, (276—194). 5) Ἀριστοφάνης. (333—223). 6) Ἀρίσταρχος. (225—150). 7) Εὐκλείδης. (323—283).
8) Ἀρχιμήδης. (287—211). 9). Ἡρόφιλος. (323—285) 10) Ἐρασίστρατος. (300—260). 11) Γαλήνος. (2nd cent. a. d.)

アレクサンドレイアはかくの如く殷盛なる文運を以て當代に輝き、つひに文化史上の「アレクサンドレイア時代」の名は他の諸中心地をも含めて廣く世界主義時代一般を指すに至つた。そしてこの學都は人口八十萬、世界各地から集まつた雜多の人種を擁しつつ、その上層知識階級の間に、超國家的・超民族的氣風による學究生活が營まれたのであつて、世界主義時代の學風を最もよく代表してゐる。特に基督教興起後には希臘思想と猶太教及び基督教との結合の場所となり、紀元後六四〇年に回教徒の侵入によつて壞滅するまで約千年の長きに亘つて世界文化の一大中心地となつてゐたのである。

ペルガモン其他の中心地　アレクサンドレイアに對して小亞細亞のペルガモン[1]もまた學藝の中心地であつた。ここでも國王アタロス一世[2]及びエウメネース二世[3]が、プトレマイオス王家との競爭意識から國都ペルガモンに圖書館を設け、二十萬卷の文獻を藏して學藝を奬勵した。ここではアテーナイに比較的近接してゐることから、修辭學及び美術批評が發達した。右の外更にシリアのアンティオケイア[4]、キキリアのタルソス[5]、エーゲ海中のロドス[6]、マケドニアのペラ等[7]もそれぞれ國王の保護によつて文化の淵叢となつたのである。

第三節　思想界の大勢とその教育的意義

世界主義時代の思想界　周く知られてゐる通り、この時代の思想界を代表するものは、既述のストア學派及びエピクーロス學派に懐疑派を加へた三學派である。これ等は希臘哲學史上にいはゆる「倫理時代」を形成し、その共通の目標は、國家の興亡・民族の變轉の渦中に不安と焦燥とを抱ける彼等が、人生の幸福を探求し安立の境地に住することに存した。しかもその到達し得た歸結が次に述べる如く、亡び行く希臘の運命をよく反映せる所に時代の共通の特色を示してゐる。吾々はこの特色に注意しながら、彼等の思想中特に教育的見地より重要と思はれる契機のみを略述したいと思ふ[1]。

ストア學派の思想　ストア學派は當初の間はキュニク學派の立場に結合して、專ら外面的幸福に對する無關心、有德なる賢者の「自己滿足」を道德原理としたけれども、やがてアリストテレースの心理說に依據して、しかもより强く個人精神に於ける理性の統一性と獨立性とを主張し、ここに理性による情欲の否定卽ち「無情欲」[2]の倫理を樹立するに至つた。ストア學派に取つては精神の「指導力」は理性であつて、それは單に個々の感覺刺戟を知覺に統一する機能だけでなく、感情の興奮に「同意」を與へてこれを意志活動に變化せしめる機能をも有する。この場合に感情の興奮が餘りに强くて理性の同意を强制した狀態、換言すれば精神が外界刺戟に動かされ受動的地位に立つて生じた所の狀態が「情欲」[3]であつて、それは病的な反自然的、反理性的な「心のみだれ」である。故に賢者は、たとひ外的世界の經緯をば如何とも爲し難いとしても、それによつて起された情欲に身を委せずに居ることはできるのであつて、この「無情欲」が卽ち賢者の德である。かくして賢者は自己の情欲の克服により、翻つて外界を克服することができる。卽ち外的運命の惹起する快苦は賢者もこれを感受せざるを得ないのであるが、唯快を善となさず、不快を惡となさず、要するに感情に同意を與へざることによつて、自己滿足の誇りを保つことができるのである。

1) Diogenes Laertius, VII. Zenon; IX. Pyrrhon, Timon; X. Epikouros.　2) ἀπάθεια.　3) πάθη.　4) ταραχή.

初期のストア學派はかくの如く情欲への屈服を唯一の惡とし、情欲の克服を唯一の善としたのであるが、後期のストア學派はかかる絕對的善惡の中間に相對的善惡を立てて嚴肅主義を緩和した。卽ち「望ましきもの」は善を促進する性質の故に第二次的善であり、「據ふべきもの」は善を妨害する性質の故に第二次的惡であるとし、唯「望ましきもの」と「據ふべきもの」との中間に位するもののみが善惡に對して絕對的に「無關心なるもの」であるとしたのである。この緩和は敎育上に重要なる意義を有する。何故ならば初期の嚴肅なストア思想によれば、人間は情欲を支配する賢者か情欲に屈服する愚者かの何れかであつて、その兩極の中間者は存在し得ないのであるが、緩和されたストア思想に於ては、賢者から愚者への移り行きは漸進的であつて、兩極の中間に「改善の餘地あるもの」卽ち「進みつつある者」が存在し得るからである。尤もこの場合にストア學派はかかる中間者が完全なる善に達するのは突然の轉向によると說明した所に、敎育による漸進的向上を否定したのであるが、ともかく道德的狀態の「進歩」を承認したことによつて、敎育論にまで是正展開せらるべき餘地を生じたのである。

1) παρὰ φύσιν.

上述の如きストア學派の倫理說は世界に關する形而上學的・神學的思想に支へられてゐる。彼等によれば情欲は「反自然的なるもの」[1]であり、理性は世界並びに人間の「自然」である。卽ち「自然」は第

一に創造的世界力、合目的の世界心としての「理性」であり、しかもそれは彼等に取つては同時に神であり、世界の一切を生産し形成する所の「生成的理性」[1]である。そしてこの理性こそやがて世界を合理的に秩序づける所の「法則」である。かくて古來相對立する原理とせられて來た所の「自然」(アルケー)と「法則」(ノモス)とはストア學派に於ては、それ等が共に「理性」であることによつて一に歸する。故に「自然に合致して生活する」[2]といふ彼等の原理は同時に「理性に從つて生活する」[3]ことである。情欲からの解放たる「無情欲」の原理も、情欲が理性を惑亂し世界の自然法則に背反するが故である。

かくの如き世界觀と倫理說とが國家論に結合することによつて、ストア學派の時代的特色は益〻明かになつて來る。彼等によれば個々の人間の精神はその理性に於て世界の本性と本質的に同一であるが故に、各個人は本性上共同生活をなすべきものである。この共同生活は併し彼等に於ては神をも全人類をも一つに結合する「全體的共同社會」[4]としての世界國家である。それは專ら同一の世界理性の分有の故にのみ生ずる結合であつて、それ以外の結合原理を含まざるが故に、歷史的制約や國民的階級的差別を超えた全人類の理性的國家である。アレクサンドロス大王の偉業を通じて惹起された全世界の水平運動—希臘民族と異民族との久しき障壁を撤去し、自由民と奴隸との對立をも消去し、東西の諸國を一つに融合する世界國家運動—といふ文化史的動向は個〻ストア學派の國家思想に反映し、また彼等の形而上學によつて基礎づけられたのである。しかもかかる世界國家の思想は、若し現實に世界を支配しつつある大國民によつて受取られるならば、自らの使命の誇りある自覺となるのであるが、現實の政治的勢力を失つて亡國の途上にある國民に受取られるならば、それは如何なる特定の國家形態にも政治的職責にも積極的關心を有せざる冷淡

1) λόγος σπερματικός.　2) τὸ ὁμολογουμένως φύσει ζῆν.
3) τὸ κατὰ λόγον ζῆν.　4) πολιτικὸν σύστημα.

無關心の態度として現はれるであらう。後者の場合には世界主義はそのまま個人主義である。ストア學派の國家思想が羅馬盛時の思想家—(例へばキケロ)に於ては羅馬國法の積極的基礎となつたのに對して希臘末期の思想家に於ては消極的なる個人主義となつたのはそのためである。

エピクーロス學派の思想　エピクーロスはキュレネー派の思想を承けて「快樂」[1]を最高善としたのであるが、併し瞬間的快樂よりも永續的快樂を優れるものとし、その永續的快樂をば精神の「平安」即ち「安靜なる快樂」に求めた。更にエピクーロスは快樂を最大ならしめるためには、自己の欲望とそれの遂行によつて生ずべき結果とを比較考量する所の「知見」を必要とした。この見地より彼は人間の要求を三種類に分けた。第一種は「自然に」生ずる要求即ち生存のために絶對必要であつて賢者と雖も避け得ざる要求であり、第二種は「人定的に」作り出されたもの(世俗的名譽の如き)であつて、賢者はそれの無價値を洞察し、それから脫却せねばならぬ。第三に上の二種の中間に、自然的ではあるが併し生存に必須ではない所の要求が存する。賢者は已むを得ない場合にはこれをも斷念せねばならぬが、併し成る可くはこれを享樂すべきである。エピクーロスの奬める快樂はかくして結局人間の本性に根ざしながら衣食住の如き生存必需のものにあらざる快樂である。彼はこれをば洗練されたる美的生活と、親切高雅なる交友とに求めた。要するにそれは外界の運命に煩はされず、調和平衡の取れた衣食住と心情とによつて、靜かに世界と人生とを觀照し享樂する生活であり、彼の言葉に從へば「肉體的に苦痛なく精神的に煩累なきこと」—一言にして「みだされざる默寂」[2]—である。

エピクーロス學派はかかる立場より宗教を排斥し、迷信からもの妄想をば學問によつて征服すべき

1) ἡδονή.　2) ἀταραξία.

ことを勧めた。神が人間生活や事物の運行に干渉するかの如く信ずるのは、彼等によれば嘘ふゞヨ蒙昧である。但し彼等はその標榜せる美的生活の理想を神話化するために、神々をば人間に類する巨大なもので地上の萬象に煩はされずに世界の中間(中空)に精神的共同結社を成し觀照といふ靜穏な生活を送つてゐるやうに想ひ描いた。

靜穏な精神的共同結社も本來自己滿足を求める個人的要求から生れたものであるが、この思想はエピクロス學派の國家觀に於て更に明かに現はれた。彼等に從へば國家とは個人が各自の利益を考量して「契約」[1]を結ぶことにより成立したものである。從つて國法も「共同の利益に關する合意」から生れ、しかもこの場合に、より優れた智力を有する者は勢ひ自己の利益になるやうに合意を導くが故に、結局國法は優者の利益のために制定せられるものである。行爲はそれ自體に於て正・不正があるのではなく、唯各人の利益となることが正であり、不利になることが不正である。國法に違背して罰を受けるのは不利であるが故に不正である。而して國政に缺る者はかかる不正に陷り易く不斷にかかる罰を恐れて暮す。それ故に人はできるだけ政治への關與を避くべきである。

エピクロス學派は人間の教養に關してもまた上述の如き生活理想に資するもののみを認めて他を排斥した。彼等に取つて必要なる教養は、眞理の根源規準を知るべき論理學(認識論)と、宇宙の理法を知つて神々や自然現象や死に對する迷信的恐怖を除くための自然哲學と、人生の使命を知るための倫理學とであつて、其他の諸教養は無用であり、古來希臘教育が尊重して來た音樂・數學・天文學等もこの見地から廢棄せられたのである。

1) συνθήκη.

懷疑派の思想　ストア學派の思想がキュニク派より發展し、エピクロス學派の思想がキュレーネー派に結合せる如く、懷疑派の思想はソフィステースの傳統を受けたものである。懷疑派はその思想の性質上特定の學派を形成することはできなかつたけれども、通常「初期懷疑派」の代表としてエリスの人ピュロンとその弟子ティモーン(プリオスの人、後アテーナイに住む)とが擧げられ、「中期懷疑派」としては既述の「中期アカデミー」に屬するアルケシラオスとカルネアデースとが擧げられ、「後期懷疑派」としてはアイネーシデーモス(クノッソス出身にしてアレクサンドレイアにて教授せる人)及びセクストス・エムピリクス(希臘の哲學者・醫學者にしてアレクサンドレイア及びアテーナイに住む)が擧げられる。吾々はこれ等の人々の所說を個別的に敍述する餘裕を有たないが、要するに彼等はあらゆる方面より認識上の眞僞及び實踐上の善惡に關する絶對的標準を否定して、唯それ等の「蓋然性」のみを許し、それ故に「判斷中止」[1]によつて一切の積極的斷定や去就を避け、唯便宜上慣習・法律に從ひ、かくして「無欲求」・「平靜」の狀態にあるべきことを說き、つひに一切の教育の可能性をすら否定したのである。

世界主義時代思想界の全體的特色　以上三學派は各々その標榜する根本原理—(理性と快樂と懷疑)を異にしながら、なほ共通の特色を具へてゐる。それは卽ち個人主義と消極的な禁欲主義である。アレクサンドロス大王によつて世界國家の建設が試みられたけれども、大王歿後の世界には誰一人との大抱負を繼承し實現するだけの實力を有せず、大王の部下の諸將に分割された世界の何れの國家も國家としての隆盛を示すに至らなかつた。かかる世相を背景として人々は最早祖國への關心を失ひ、ひたすらに自己一身の安慰のみを

1) ἐποχή.

念願した。ストア學派が世界觀の根柢に立つて世界國家を主張してもその本質は個人主義に外ならず、エピクーロス學派が唱へた契約說も固より個人主義から考へ出されたものであり、懷疑派に至つてはその思想の本質上國家への積極的貢獻の如きは思ひも及ばぬものであつた。かくして共通に立脚せる個人主義の地盤は、同時に禁欲主義の成果を齎らした。ストア學派は理性によつて情欲を克服し、エピクーロス學派は快樂の考量によつて情欲にみだされざる狀態に逃避し、懷疑派は善の絕對的標準を否定することによつて便宜的なる「平靜」に安住した。すべての歸する所は、進んで求めず、敢て爲さざる消極的退嬰的態度である。建國創業期より古典時代にかけての希臘民族が、祖國と同胞とに强き關心を寄せ、團結と犧牲とを高き德と仰ぎ、體育音樂の基礎的陶冶、軍事の修練、科學的研究、哲學的敎養のすべてを、單に個人としてのみならず國家の一員として强く美はしく賢く善き人たらんがために修養せることに比較して、今や實に希臘民族は救ふべからざる老衰期に入つたのである。この憂ふべき事態は、既にその傾向の萌し初めたる古典時代後期に於て、ゾークラテース・プラトーン等の經世的思想家が身命を堵し、生涯を貫いて警醒の敎說を高唱したにも拘らず、つひに挽回の效はなかつたのであるが、今や末期的病根の深刻さは、かくの如き警醒の叫びをすら爲し得ざるに至り、人々は唯衰亡の身を自ら慰めることのみに沒頭することとなつたのである。

希臘より羅馬へ　衰へ行く民族をば强き思想もこれを支へることはできない。況んや個人主義と禁欲主義とに逃避して一身の安慰を求める弱き思想は、希臘民族をひたすら滅亡の一路に誘つた。カイローネイアの戰以來マケドニアの配下に屬し、アレクサンドロス大王の歿後、希臘本土の諸國はマケドニアの羈絆を脫せんとして、アカイア同盟やエトルリア同盟の名の下に團結抗爭を試みたけれども、久しく憤らされたる小都市國家の對立的傳統と、民族の一般的老衰とは、つひにその效を空しくし、前一四六年羅馬の將軍ムムニウス[1]が、コリントスを攻略してアカイア同盟を粉碎するに及び、希臘本土は大羅馬の一屬領となつて、ここに全く希臘民族の政治的生命は絕たれた。

然しながら彼等の文化的生命は永遠である。羅馬武力の希臘征服は希臘文化の羅馬征服を容易ならしめ、捕へられたる希臘は猛き勝利者を捕へて學藝を荒れたるラティウムに持込んだ。」吾々は今や視點を西方に移して、世界史上無比の大國家羅馬の興亡を辿り、希臘文化の運命をば、羅馬敎育史の內容として見守つて行かうと思ふ。

結語　希臘敎育の全體的特質

1) Mumnius.

希臘教育史を論述し終るに際し、吾々はこの間に於ける時代の小區分と種族的・國民的特性とによる推移變遷にも拘らず、なほ全體として若干の共通なる特質を捉へることができる。そしてそれ等諸點は通常基督教文化に對立する異教文化として特色づけられるものに照應するが故に、吾々もまたこの見地から、やがて來るべき基督教教育を豫想し、それとの對照によつて、希臘教育の全體的特色を概觀したいと思ふ。（羅馬教育もこの點に關する限り異教文化の基調に立ち、唯この共通の基調の上にありながら羅馬固有の面目により希臘教育から小分せられるのであつて、この見地からまた希臘教育の敍述に於て顧慮せられる。）

第一に吾々は希臘教育の陶冶理想として、世人が自然主義・現世主義・人文主義等の名を冠する所の特色を承認しなければならぬ。人間天賦の性能を禁斷抑壓することなく、寧ろそれを肯定し、積極的に、但し調和的に、發展せしめて（自然主義）健康や富や名譽などの地上的財寶を獲得し、更に善美眞正なる價値をその知情意の上に體現して、此の世ながらの幸福を享らさんとすること（現世主義）は、―スパルタの如き例外はあるにしても―希臘的なる生活理想の一般的特徴であり、從つて希臘教育に於ける陶冶理想であつた。この事はやがて幸福の原因を人間に求め、人間自身の力によつてその理想に達することができると考へる點に於て人間本位である。人の力により人の本性を發展せしめて人の世に入らしき理想を實現し人としての最高の幸福に與らんとする思念を廣く人文主義と解し得るならば希臘的陶冶理想はまさに人文主義であると言はねばならぬ。若しまたかくの如きは「理想」といふよりも寧ろその一般妥當性・究極の課題性に於て「理念」と呼ばるべきであるとすれば、いはゆる「人文理念」こそ希臘教育の共通目標であつたのである。かかる人文主義陶冶理念は、前史時代・古典時代前期は無意識的に―（特にイオニア種族を代表とする）希臘民族の資性と傳統のままに―追求せられ、古典時代後期に於ては―特に全盛期のアテーナイを中心として―意識的に高揚せられ、政治も藝術も哲學もこの理念の下に榮えた。世界主義時代には文化の爛熟と民族の老衰とにより、反動的に消極主義・禁欲主義となり、人文理念は凋落したのであるが、それはやがて希臘民族そのものの現世的生命の衰亡に外ならなかつたが故に、翻つて希臘民族の繁榮は同時に人文主義の顯揚を以て特色づけられるのである。勿論希臘民族と雖も人間の外に神々を尊信し、現世を超えて前世を、來世を、永遠を考へないではなかつた。然しその場合の神々は、初期の素朴なる信仰に於ては頗る人間的に理解せられて善惡喜憂ともに人間に伍し、やがて洗煉深化されたる信仰に於て超人間的優越性が歸せられても、それが人間の理性（ノース）乃至精靈（プネウマ）に顯現するものとして、內在的に把握せられ、その限りに於て、やはり人間本位たることを失はなかつた。自然の性情を罪惡とし、人の力を無力とし、現世をそ

れ自體では無價値のものとして、それ等を超克し、ひたすらに超自然的、超人間的、超現世的なるものに憧憬歸依せしめんとする基督教的陶冶理想は未だ希臘教育の與り知らなかつた所である。

第二に希臘教育の人文主義は、その根柢に於て主知主義に支へられてゐた。勿論希臘民族と雖も、建國創業時代は固より古典期、衰頽期をも貫いて實踐的意志は旺盛であり、また特に審美的情操藝術的能力に於て彼等の面目は讃美せられるのであるが、それにも拘らず彼等の意志と感情とを根柢に於て支配し指導してゐたものは理論であり、知的觀照力である。彼等が「美にして善なるもの」といひ、「調和」といひ、「節度」といひ、「中庸」といひ、又、「永遠」、「常住」、「絶對」をいふ場合に、當面の徴表は藝術的、道德的乃至宗教的なる印象を與へるものでありながら、それ等の希求を成立實現せしめる所以の原理は畢竟「理性」であり、「識見」であり、「智慧」であり、「眞智」である。世界を支配する理性的原理―整然たる天體の運行や宇宙現象や數理體系や音樂の調律等―を成立せしめるロゴスが人生をも支配するとき、換言すれば人間の理性がかかるロゴスを把握して情意的なる感性を支配するとき、そこに初めて望ましき人生が得られるのである。希臘精神を、例へばオデッセウスの聰明を代表としてその原始的初發狀態より特色づけ、イオニア諸國に於て特に顯著に培はれ、つひにアテーナイ黃金期の藝術や哲學によつて最高度に顯揚せられたものは、實に透徹し洗煉された理性であり知性であつた。末期的症狀の希臘に於てすら、この知性は懷疑と逃避とに彼等を誘ふ主動力であつたのである。尤もそれ等諸相を通じて理性といひ知といふのは、必ずしも狹隘なる理論的認識のみではなく、實踐的理性をも含み、若しくは主としてこれのみを指すことすらあつたのであるが、それにも拘らず、實踐智は自然、宇宙、數理等に對する理論的認識を背景として人間生活の原理を求めるものであるから、結局は理論知に支へられてゐたのである。かくしてプラトーンやアリストテレースに於けるが如く、教科課程の最高位に理性的探求―廣義の哲學―を置くことは藝頓せる古代教育思想に共通なる特色であつた。後に述べるであらう所の、羅馬精神の特徴たる實踐的意志力と基督教精神の中核たる宗教的純情とに對立して、希臘精神を貫くものは實に聰明なる知性であつて、さればこそやがて羅馬精神も基督教精神もそれが希臘化せられることは同時に知性化せられ學問化せられることに外ならなかつたのである。

希臘教育の第三の特質はその不平等性に見出される。そしてその一つは階級的差別である。これはスパルタの如く俊嚴なるものもあり、アテーナイの如く内政の發展によつて(特に自由民相互の間に於ては)次第に緩和されたものもあつたけれども、一般に自由民と奴隷

との區別は希臘人に取つては自明の前提であつて、政治も經濟も道德もこれに基づき、教育及び教育思想が問題となる限り、それは常に自由民の教養に關してであつた。尤も希臘の奴隷は必ずしも種族的に劣等なる素質を有するものではなく、唯戰爭や經濟關係の經緯によつて、捕はれ若しくは買はれたに過ぎなかつたが故に、例へば畫僕中の或る者の如く、すぐれた人格と高度の教養とを以て自由民の子弟を教導したものもあつたけれども、ともかくそこでは教育の理想・內容・方法が――例へばアリストテレースに於て最も露骨に表明せられた如く――自由民に適はしきものとして、奴隷らしきものとは意識的に區別せられたのである。

階級別に次いで希臘教育の不平等性は男女の性別に現れた。スパルタの女子に對する國家的尊敬、アテーナイの女子に對する家庭的尊重、プラトーンの理想國家論に於ける男女平等論などは、男女の地位の輕卒なる評價を警めるに足る材料ではあるが、それにも拘らず、女子はすぐれた男子を生み育てるための方便として敬重せられたのであつて、一般的には男子の從屬的地位に置かれ、教育の制度及び理論も當面の主要對象としては專ら男子を考へてゐたのである。

更に種族的乃至國民的區別も希臘教育の不平等性の中に數へ得るであらう。希臘民族が異民族に對する自恃と偏見、同じき希臘民族內に於けるスパルタ・アテーナイ・コリントス・テーバイ等々の對立抗爭を考へるとき、吾々は希臘民族が到底世界の大國民となり得ざる素質と傳統とに拘束されてゐたことを想はねばならない。外敵と內訌とを警戒しつつ建國創業の企圖を遂行して來た諸國民が、その國家の維持發展のために國家的關心を主とせる教育を必要としたことは當然肯首せられ、この意味に於て希臘民族は教育の國家的制約といふ自然の事態を最も素朴に負うてゐたものである。それ故にまたやがて文化の爛熟、自由主義の餘弊が現はれて個人主義が擡頭して來たとき、プラトーン、アリストテレース等の大思想家は國家論と密接に結合して國民教育を力說せねばならなかつた。希臘末期の思想家は國家を超えて世界主義的即個人主義的教說を唱へたけれども、それは同時に亡び行く希臘民族の挽歌に過ぎなかつたのである。かくして希臘教育本來の面目は階級的・性的・種族的・國民的不平等性に立脚してゐた。これ等の不平等性が超克せられるためには、群小都市國家の傳統に隔されずして世界的大國家たるべき素質と實力とを有する羅馬國民が必要であり、更に進んでは全人類を同じ神の子なる同胞と考へる基督教義が必要であつて、そこに羅馬教育史及び基督教的中世教育史への要望が存するのである。

第二篇　羅馬教育史

序說　羅馬教育史の地位と時代區分

一　羅馬の文化史的並びに教育史的地位

希臘文化と羅馬　吾々は前篇に於て、希臘文化が西洋文化の根源原型核心であり、希臘教育史が凡そ教育の事實及び理論に關する典型的始源を提供してゐることを述べた。そして希臘教育史の終に於ては、希臘が羅馬によつて亡ぼされ、それにも拘らず(捕へられたる希臘が猛き勝利者を捕へて、學藝を荒れたるラティウムに持込んだ)ことを指摘した。羅馬の文化史的功績の最大なるものは實に希臘文化の繼承とその傳播とにあつたのである。

羅馬はその建國の創業の進展と共に、北はエトルーリアを介して、南は大希臘[1]即ち南伊太利の希臘植民地より、希臘文化を吸收しつつ成長した。勿論、當初は羅馬自らの發展が前景に立ち、希臘文化は微かにそれを刺戟した程度であつたけれども、後年希臘を自國の屬領とするに及んで、黄金期並びに爛熟期の希臘文化は滔々と羅馬に移入せられ、ここでは寧ろ羅馬の希臘化が時代を特色づけるに至つた。かくして羅馬人は文化的には創造者であるよりも普及家であり、發案者であるよりも實踐家であつた。彼等の特に卓越せる能力を證明する武力及び法制さへも、その始源は希臘より學び受けたものであり、その整備充實も、それによつて世界を蓋へる大版圖を開拓統制し、希臘文化繁榮の地盤を用意するに役立つた觀があるのである。人々は近世文化の黎明を文藝復興運動に見出し、この運動の本質を古代文化の再生に求める。併し顧ふ所の古代文化とは、運動の當初に於て專ら羅馬の文化であつて、希臘文化は羅馬文化の復興を介して初めて呼び出された。即ち文藝復興運動を先導せる伊太利の人文主義者達は、先づ祖國の前身たる羅馬の榮光を偲んで讃歌これを久しうし、やがて羅馬文化の更に深く遠き源流に遡つてつひに希臘文化を吸收するに至つたのである。この意味に於て羅馬は希臘文化を近代に受け渡した媒介者の地位に立つてゐる。

中世文化と羅馬　中世文化の基調を成せる基督教も、中世世界を支配する前に先づ羅馬を獲得した。即ち羅馬が當初の迫害を止めて基督教を公認し、ヘブライ語及び希臘語の聖書を羅甸語に飜譯し、又羅馬帝國内の神學者が教義の基礎づけを行ふことによつて、基督教の世界的生命は不拔に培はれた。新興ゲルマン民族はそれ故に先づ羅甸語を介して基督教化せられたのである。かくして羅馬は、その政治的勢力の强大さと、それにも增して廣く長

1) Magna Graecia.

かりし羅甸語の生命との故に、古代希臘文化のみならず中世基督教文化をも、近世歐洲民族の共通の財寶として保有し仲介し傳播したのである。

文化の仲介と普及　史家は羅馬を大なる湖に譬へ、百川これに注ぎ、百川これより流れ出たことを述べる。これに注げる百川の中、特に顯著なる主流は、上述の如く、さきには希臘文化であり、次では基督教文化である。而もこの兩文化は世界文化全體の基本潮流に數へられるものであつて、一たび羅馬に注ぎ込むことによつて世界的地盤に浸潤し、やがて羅馬の崩壞の後も、新しき生命に蘇りつつ、近世世界文化の主流を形成して來た。若し羅馬人の壯業雄圖がなかつたとしたら、輝ける希臘の學藝も、基督の聖なる教も、單に地方的・局所的文化たるに止まつたかも知れない。吾々はそれ故に重ねて羅馬人の文化史的功績をば、仲介者・普及者のそれとして讃美するのである。

二　羅馬教育史の時代區分と主要問題

羅馬の政治史並びに文化史に於ける時代區分に從つて、羅馬教育史の時代區分とその各時代に於ける主要觀點とを、吾々は次の如くに豫定したいと思ふ。

共和時代　第一期は羅馬の建國(前七五三)よりアウグストゥスの帝政時代(前三一―後一四)

1) Latinus.　2) Roma.　3) Septimontium.　4) Romulus.

の出現する迄でその大部分が共和政治時代であるから、吾々はこの期間の教育事實及び教育思想をば、共和時代の教育として叙述することとする。この時期の初め、印度歐羅巴人種の分派なる伊太利民族に屬する羅甸種族[1]はティベリス河口の羅馬[2]七つの小丘より成る都市なるが故に、七丘都市[3]とも呼ばれる。)を中心として國を建て、ロムルス[4]以下七代約二世紀半の王政を經て、やがて貴族を主とする共和政治となり、外は次第に四隣を攻略して版圖を擴め、内は貴族・庶民の抗爭を緩和して法制を整へ、かくて武力と法制とを特色とする堅固なる國家を建設した。かかる建國・創業の雄圖は羅馬人本來の質朴・剛健にして意志的・實踐的なる性格を益々錬磨して、玆に古き羅馬の國風を形成し、その雰圍氣の裡に實直・健全なる教育は行はれた。この間にも既述の如く、希臘文化は間接に學び取られたけれども、全體の時代精神は寧ろ、古風の尊重といふ保守的面目を以て特色づけられてゐた。然るに前二世紀の中葉、希臘をその屬領としてより、希臘文化と希臘的教育との直接輸入が漸く行はれ初め、後の帝政時代の文化と教育との前階を形成した。但しこの時期の希臘の感化は、より强大なる國粹思想の反撥・警戒によつて、未だ十分には羅馬人の生活及び思想に浸潤するに至らなかつたのである。かくして共和時代の教育史に於ては、建國・創業の雄圖を通じて培はれた原始羅馬的國風が、その家庭教育・學校教育及び社會教育の上に如何に素朴・質實なる反映

を示したか、並びにそれ等が、やがて萌し初めたる希臘的影響の下に如何なる變動を受けたか、又その事實が優關の人士の如何なる教育的反省(教育思想)を生ぜしめたかといふ諸點が中心問題である。

帝政時代　第二期はアウグスト゛ス帝の頃より羅馬の衰亡に至る間で、吾々はこの間の教育事實及び教育思想をば、帝政時代の教育として叙述する。アウグスト゛スの治世はアテーナイのペリクレース時代に比すべき羅馬黄金期であり、世界を蓋へる大版圖は一家の如くに統一せられ、首都羅馬は壯大・美麗の限りを盡して、世界を平和の港に繫ぐ錨(アルタールコス)となつた。而もまた浚落の素因はこの極盛の蔭に醸され、敵國・外患なき强大なる國内には、享樂者侈・淩忍の風潮が滔々として流れ充ち、所謂羅馬の榮華とその凋落とが時代の大勢を特色づけたのである。この帝政時代の教育史に於ては、かかる國風に影響せられて先づ往年の堅實なる家庭教育が如何に衰頽し、又社會が如何に教育的職能を失墜して大衆を墮落に陥ひやつたか、それにも拘らず學校教育のみは、何故に且つ如何なる方向に發達し繁榮したか、といふ諸問題が主要觀點である。ここでは吾々は、一面に於て羅馬とその全屬領とが如何に狂熱的に希臘化されて行つたかを見ると共に、他面それが如何に大羅馬の滅亡を原因づけたかを究めねばならぬ。

1) virtus.　2) vir bonus.　3) natura.

第一章　共和時代の教育

第一節　共和時代の國風と教育事實

共和時代の國風と教育の理想　共和時代を貫く羅馬國民の教育理想は、一言にして、强き意志の人、實踐の人を養成するにあつた。それはスパルタ的精神に近似しながら、而も單に軍國征戰の要求にのみ局限せずに、和戰何れの地盤にも擴大し、戰に於て强く、平和に於て統制秩序を尊重し、權利義務を恪遵し、その身と家と祖國とを堅き操守と舊き傳統とに安固ならしめることに存した。かかる心情・行爲こそ羅馬に於ける「人らしき資格」[1]としての德であり、この德を具へたる「善き人」[2]が、希臘に於ける「美しき善き人」に對して、羅馬人の本來の生活理想であり、同時に共和時代を貫く教育理想であつた。

教育の內容　かかる教育理想は當然教育內容の上に注目すべき特色を現はした。第一にそこでは、希臘の自由民が殆ど關與しなかつた經濟生活が、羅馬國民の重要なる生活內容、從つて教育內容であつた。農牧の民を奴隷としてその上に君臨した希臘自由民とは異つて、羅馬人は貴族と雖も本來ティベリス河畔の農牧業を自ら開拓せる人々であり、「自然」[3]のまま

の荒地を耕作する[1]ことによつて、耕地[2]をつくることは、實に羅馬人に於ける文化[3]の原義であり、謂はば、農耕[4]の精神が羅馬文化の精髄であつた。更にエトルーリアや大希臘等との間に通商も早く開け、羅馬人の文化は一面これを動因として促進せられた。かくして經濟生活は羅馬國民の注目すべき特色であつて、かの十二銅板法に財産上の權利義務、その防衛や相續等に就て詳細に規定してあるのを見ても、これが如何に重要なる生活内容であり、從つて教育内容でもあつたかが窺はれる。第二に羅馬はスパルタや初期のアテーナイと同樣に四隣に敵を負うて發達した國であるから、軍事が國民生活の主要内容であつたことは言ふ迄もない。羅馬本來の面目は國民皆兵であり、從つて體育及び軍事訓練は國民教育の主要内容であつた。第三に羅馬教育の主要内容は政治的生活であつた。これも希臘のそれと軌を一にせるものである。「議場[5]」と、「市場[6]」と、「演壇[7]」とは、實に羅馬の成人が青少年子弟を率ゐて絶えず出席する場所であり、彼等の若き耳目は、そこに國事が議せられ、裁判が開かれ、愛國の熱辯が揮はれるのを見聞した。そしてそれ等の事の規範準則が十二銅板に刻せられてあるのを、彼等は諳誦したのである。法律的思想と政治的訓練と辯論術とは、實に羅馬の國民教育を他の如何なる國の教育にも優つて特色づけた内容である。

土地を開墾し、自然を價値化する所の文化は、やがてかかる仕事を原初に於て開始した祖

1) colere.　2) colonia.　3) cultura.　4) agricultura.
5) comitium.　6) forum.　7) rostra.

先、若しくはかかる仕事を守り掌る神に對する、禮拜[1]となる。單に農耕に限らず、商業に軍事に家政に政治に、苟も人の價値的行動に關する限り、夫々に守神があり、夫々に宗教的儀禮法式があつて、これを禮拜し遵奉することは、原始的民族の通有性であるが、羅馬に於ても亦かかる宗教的要素が日常生活に深く結合してゐた。そして家の父は同時に家の祭司であり、母や子女は、父に從ひ父を助けて、共に祭事を營むことによつて、傳統的宗教に導入せられ、訓練せられた。かくして宗教的信仰と儀禮とは、堅實なる羅馬文化の根柢であり、同時に羅馬教育の主要内容であつて、十二銅板法もこの方面に關する條項を多分に含んでゐる。

以上の如き經濟生活・軍事生活・政治生活・宗教生活は何れも少青年が先輩壯年者の實踐に參加し、若しくはこれを親しく見聞することによつて與へられた教育内容であるが、これ等の内容を文獻に收めたものとして重要なる教科材料となつたものに十二銅板法と英雄偉人の傳記とを數へることが出來る。十二銅板法が如何なる内容と意義を有するかは、既に隨所に述べ來つた所で推知せられるであらう。英雄偉人の傳記が教育内容として重要なる役割を演じてゐたことは羅馬に於ける注目すべき事實である。プルータルコスの『英雄傳』は希臘羅馬の各方面の偉人を比較論述した列傳であつて、帝政時代の著作であるが、併しこの書に謳められるまでの材料としては、既に早くから偉傑の傳記が何等かの形態に於て、傳

1) cultus.

へられてゐたことが推定せられる。そして羅馬の青少年達は、恰も希臘に於けるホメーロス詩篇の如く、それ等の傳記に親しみ、而もホメーロスの神々に對するよりも更に親近なる關係に於て、地上に大なる足跡を遺せる人々を追慕し、これを學び倣つたものと思はれる。以上の如き理想及び內容を有する羅馬の教育は、次にそれが、如何なる場所に於て、如何なる人々により、如何にして實施せられたかを見る場合に、一層具體的に展開せられる。以下にこれを家庭、學校、社會の三方面に分けて叙述しよう。

家庭教育　建國以來共和時代を通じて、羅馬教育の最も主要なる場所は家庭であり、そして家庭教育の中心は母であつた。子女に健全なる道德的並びに宗教的基本情操を培ひ、正しき人生觀、生活態度の根柢を築いたのは母であつて、「母の膝下に教育せられること」[1]は、實に羅馬教育の常道であつたのである。その結果、婦人に對する尊敬は、基督教以前にあつては、羅馬人に於て他の如何なる國民に於けるよりも高く現れた。特に既婚の婦人を意味するマートローナ[2]といふ語は、同時に尊敬、高貴、有德といふ副次的意味を伴つてゐた。街上に於ても男子は敬意を以て夫人（マートローナ）に道を讓り、又夫人に對し、若しくは夫人の面前に於て、無作法の話をする者は罰を受けるのであつた。夫人は又その夫が會食や會議や裁判等の公共の席に出る場合はこれに隨從して、知見を廣め、その名聲、德望に於て時に匹敵することもあつた。故

1) educari in gremio matris. (Cicero)　2) matrona.

に夫婦間の相互の尊敬と信賴とは頗る强く、建國以來五百年もの間（前二三一年まで）離婚の沙汰を聞くことがなかつた程である。

次に父は子供に對して絕對の權利を有してゐた。十二銅板法の第四表たる「父權」[1]の規定によれば、父は不具、畸形の初生兒を直ちに殺す權利を有し、又子供の生涯を通じて、監禁し鞭撻し、殺害し又は賣却し得る權利を有し、公職高位に就ける後の子供に對してすらこれ等の權利を有してゐた。かかる絕對權を有する父は同時に子供の教育の主なる擔當者であつた。即ち父が家に於て、若しくは國や市區の祭壇に於て、神や祖先を祭る場合には、子供等を補助者として伴ひ、又舊き英雄や政治家の讃歌を唱へる時には子供等にも聞かせ、父が他に招かれた時にも子供等を伴つた。又耕作、播種にも子供等を參加せしめ、乘馬、水泳、拳闘、劍術等をも父が子供等に示範して練習せしめ、且つ讀書、習字、計算及び法律等生活に必須なる知能をも子供等は父から學んだ。そして又子供等は父から、元老院や民會や兵員會や戰場や陣營等に於ける有樣を語り聞かされることによつて、未來の有爲なる公民、戰士たる準備を、家庭に於て與へられた。

共和時代後半には、童僕と家庭教師とが傭はれた。即ち羅馬が伊太利半島を統一して（前二七二年）大希臘地方を併せるに及んで、希臘の奴隸若しくは希臘語及び希臘文化に通ぜる

1) patria potestas.

X. 羅馬の教育（一）

1. 子寶を誇る羅馬の母

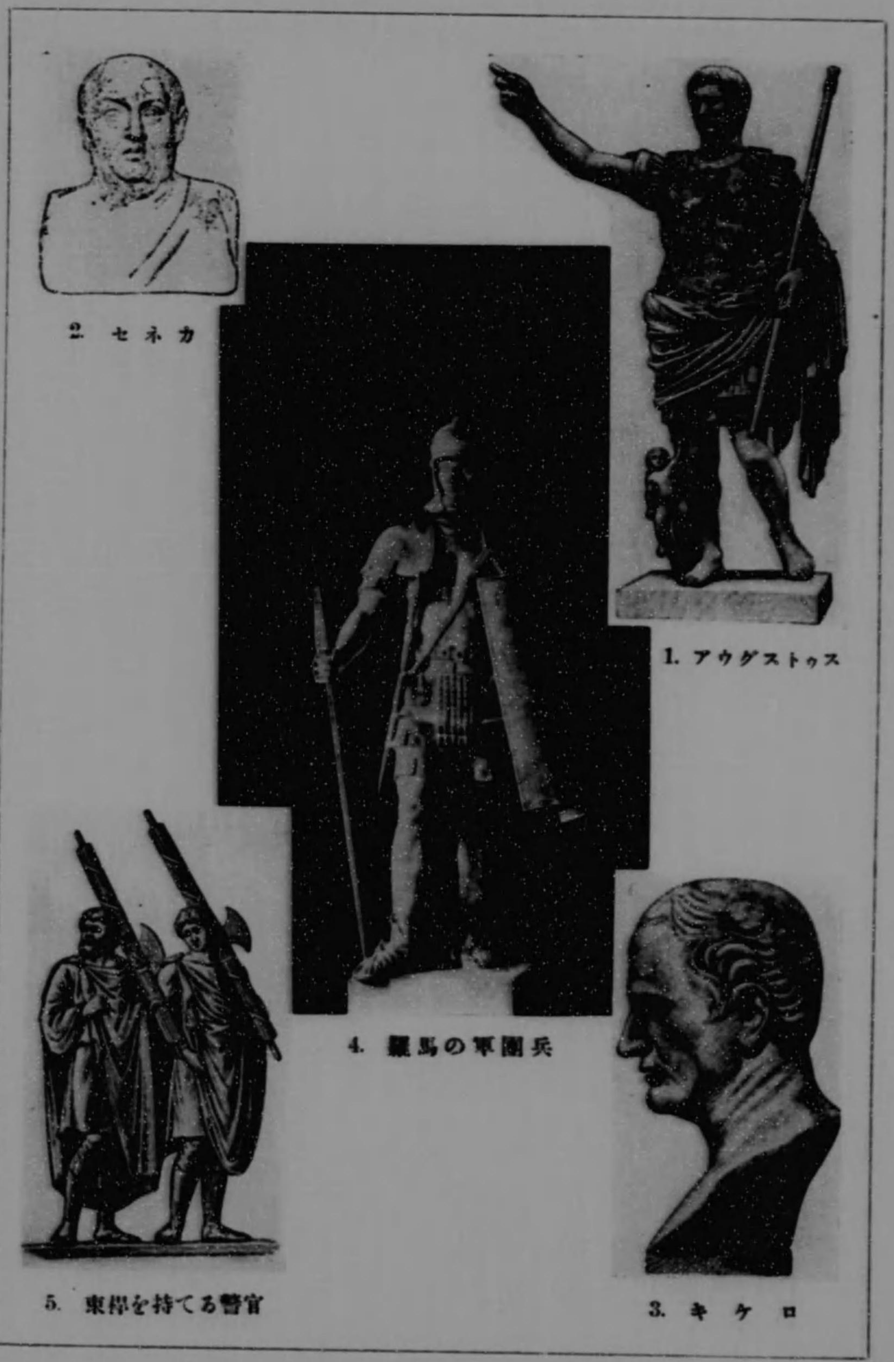
2. 初等學校に於ける少年少女

羅馬の奴隷が、童僕として、上流家庭に雇はれるに至つた。そして初期の童僕はその高き教養と純潔なる品性とを以て、家に於ても、外出先に於ても、よく兒童の言動を監督指導し、家族から尊敬と權威とを與へられてゐた。なほ上流家庭では、早くより特別の教師を聘して、兒童に初歩の教科を教授させ、希臘文化移入後は、希臘の文法教師を家に招聘することも行はれた。

學校教育　家庭教師を聘することは上流家庭のみがなし得る所であるから、一般民衆に初歩的知能を普及させるためには、學校の必要があつた。羅馬の學校は何れも私立で、而も時代の進展と共に、漸次に程度の高きものを生じ、共和時代を經て、結局初等・中等・高等の三種を有するに至つた。既に共和時代の初期、十二銅板法制定の頃から、市場の特定の小屋に、初等學校が存し、それは「ルードゥス」[1]と呼ばれた。それは本來、遊戯、競技等の語義を有し、轉じては閑暇に任せて片手間にする仕事を意味するものであつて、即ちそこで學習する讀書・習字・算數等が、羅馬の初期に於ては、生活の主要内容ではなく、從つて教育内容としても重要性を有せず、子供が閑暇を埋める遊び仕事の如くに考へられてゐたことを示してゐる。かかる初等學校は、市場や街の三叉路[2]等にある小屋の中に設けられ、後世この程度の初歩知識を、三叉路的知識[3]と呼んだ。前二五〇年頃の有名な元老院議員スプリウス・カルウィリウス[4]が學校

1) ludus, (pl. ludi.)　2) trivium.　3) trivialis scientia.
4) Spurius Carvilius.

XI. 羅馬の教育（二）



1. アウグストゥス

2. セネカ

3. キケロ

4. 羅馬の軍團兵

5. 束桿を持てる警官

を開き教授に熱中してから、この種の初等學校は益々普及して來た。

初等學校の教科內容は讀書と習字と算術とであり、十二銅板法の諳誦も讀書と結合して行はれ、これ等を教授する人を、讀書教師[1]と呼んだ。讀書の教授法は、先づ文字の名稱と順序とを、次にその形と發音とを教へ、然る後に綴字を教へた。この綴字は教へ方が頗る拙劣で修得が遲く、教師は鞭を加へて漸くこれを學ばしめた。喜劇詩人プラウトゥス[2]の皮肉な誇張によれば、兒童は綴字を誤る度毎に、その身體の皮膚を下女の上衣の樣に染められねばならなかつた。讀書に次で間もなく習字も課せられ、教師は初め兒童の手を取つて書方を教へ、次に文字の手本を與へ、更に短文の手本を與へて、模し習はしめた。習字用具としては、蠟を布いた板と鐵筆とを用ひた。羅馬人に取つて特に重んぜられた教科は算術で、そのためには既に相當年長の少年も特別の「算術教師[3]」の許に通學した。羅馬の數字は記數法が不統一であり、且つ十進法でなかつたので、筆算の外に、十進法に基く指算と算盤とが用ひられた。指算は左手の指を以て一より九までと十より九十までとを表し、右手の指を以て百より九百までと千より九千までとを表し、二萬以上は何れかの手を身體の特定の場所に觸れる身振によつて示された。この指算は東方諸國や希臘に於けると同樣に伊太利に於ても中世期まで一般に行はれ、商取引その他の日常計算に利用せられた。「算盤[4]」は、石・木材又は金屬の

1) literator. 2) Titus Maccius Plautus. (227—184 B. C.)
3) calculator. 4) abacus.

板で、これを種々に用ひて數を表した。又幾何圖形は板の上に砂を布いて鐵筆で描いた。公私共にその收支記入には計算板が用ひられた。

希臘文化の輸入と共に、初等教育の教科目としても希臘の詩人の作品が採用せられ、それを教へるために「グラマティクス」[1]若しくは「リーテラート。ス」[2]と呼ばれる「文法教師」が、先づ上流家庭の教師として、次で學校教師として現はれた。ホメーロス詩篇は羅馬に於ても永く中心的教材であつた。かく希臘の教育内容が採用されたことは、羅馬の教育が眼前直接の實利主義より高き立場にまで進んだことを意味する。やがて希臘語の教材の外に、希臘作品の羅句譯並びに羅句作品も用ひられるに至つた。即ち大希臘から羅馬に來たリヴィウス・アンドロニークスが『オデュセウス』篇を羅句語に譯してより、それは昔く羅馬の文法學校に用ひられ、又續いて各種の希臘作品の羅句譯が行はれた。カラブリアのルディアイに生れ、サルディニアから羅馬に來たエンニウス[4]もまた希臘の詩を羅句語に譯し教へた。更にペルガモンから羅馬に大使として來たクラテス[5]は前一五七年に初めて文法を羅馬に導入したと言はれてゐる。かくの如くにして、共和時代末期には、從來の初等學校の外に、より高き程度の「文法學校」が出來、そこでは希臘語及び羅句語の文法並びに希臘羅句の作品が「文法教師」によつて、教授せられたのである。

1) grammaticus. 2) literatus. 3) Livius Andronicus. (284—204 B. C.)
4) Ennius. (239—169 B. C.) 5) Crates.

文法學校の教師は、やがて同時に希臘の修辭法即ち議會や法廷に於ける論難辯護の術をも教へた。然るにその後專門の希臘修辭學教師が次第に增加し、而もそれが羅馬の國粹思想の反感を買へるものの如く、前一六一年に元老院は、時の統領をして「共和國の福利のために哲學者と修辭學者とが羅馬に居ることを許さざる旨」を告示せしめてゐる。併しながら時代の大勢は制し難く、羅馬人にして修辭學校を開く者さへも漸く現はれ、前九二年に時の監察官の警告があつたにも拘らず、時勢は有能の士をして、自己の辯護のためにも世に名聲を博するためにも、修辭學の必要なる所以を益〻痛感せしめ、特に上流子弟のこれに赴く者が次第に增加した。但しこれが整備せる學校制度として隆盛を示したのは、帝政時代に入つてからであつた。

社會教育　上述の如き家庭教育及び學校教育を受けた後、男子は公民として社會の公共生活に參加する。男子十七歳の三月十七日を「ティーローキニウム」[1]といふ。それは青年が「ティーロー」[2](新兵)として新に軍籍に入る日即ち元服の日を意味するからである。この日に、青年は家族一同から祝福せられ、母の溫情溢るる訓言を受けた後、父や親戚・友人等に伴はれて、市場に行き、長官の前で、これまで着てゐた紫の縁の外套(トガ・プライテクスタ)[3]の代りに市民の制服たる白の外套(トガ・ウィリリス)[4]を着せられ、長官の訓告を受ける。次に社殿に赴き神々に供物を獻じて國家の忠良なる市民たることを誓ふ。これ等の儀式終了後、祝宴が開かれ、その家族の親戚や知友の間に贈物が頒たれるのである。

1) tirocinium. 2) tiro.
3) toga praetexta. 4) toga virilis.

一般下層階級の青年は元服と同時に父と共に農業若しくは商業に就き、戦に召集せられない間は、その家業に從事した。上流の青年は元服後、喜き風習に從つて、各自の素質及び希望に應じ「軍人候補」[1]「政治家候補」[2]「辯論家候補」[3]となり、夫々先輩に就て實地の教導を受けた。軍人たるべき者は、身體を鍛錬し、毎日ティベリス河で水泳を習ひ、又乘馬・槍術・投擲等を練習し、その後、軍營に加はつて實戦を經驗し、軍人として實地に修練を積んだ。政治家たらんとする者は定評ある政治家に從つて、法律的並びに政治的事件の處理を手傳ひ見習つた。又法律を學ぶためには特定の法律家に私的教授を受け、先づ私法事件に關して實地に修練し、次に辯論術をも修めて公の政界に働くやうになつた。辯論家候補者は、初期に於ては特定の辯論家に從つて直接に實地の活動に參加したが、やがては特に辯論術の教師に就て學ぶこととなつた。それも初めは希臘語辯論教師に就て一定の課程を修めてゐたが、後に羅甸語辯論教師が現れるに及んでこれにも併せ就くこととなつた。辯論術は理論的學習たる講義と實地練習たる演習とに分けて修練し、前者に於ては、教師が雄辯の本質や範疇演說(例へばキケロの時代にはカトーやグラックスの演說)に就て解說し、後者に於ては、生徒をして特定の問題に關して「說得演說」と「反駁演說」とをさせた。

前二世紀の中葉、希臘本土が羅馬の屬領に歸して以來、希臘の哲學が羅馬に參入せられた。但しそれは純然たる眞理への憧憬からではなく、羅馬人本來の實踐的要求から、換言すれば辯論家・政治家として、身を修め、知見を廣き、有能練達の士となるための要具として、哲學が學ばれたのである。一方またこの時期の希臘哲學自身が、古典時代の純粹さと學的眞摯さとを失つて生活の方便化したものであつたが故に、哲學に關する限り、希臘と羅馬とは當時同じ雰圍氣の中に、彼から此へ傳播

1) tirocinium militae.　2) tirocinium fori.
3) tirocinium eloquentiae.

し盛衰して來た。即ちそこでは、哲學思潮の當初の區別は次第に曖昧化して折衷的色彩の下に採用せられた。併し中でも特に實直嚴肅なる本來の羅馬的風習に適應するものとして、ストア學派の克己節欲の哲學が最も多く學ばれた。それに次いではエピクーロス派の快樂主義道德哲學も羅馬の自由思想的・無信仰的・享樂的傾向の人々の間に相當迎へられた。又アカデーメイア及び逍遙學派の哲學も、それ等の純理的色彩の故に、僅少の餘面目な研究的・思索的態度の人々の間に行はれた。吾々はこれ等希臘・羅馬哲學それ自身の論究をば一般哲學史に讓り、教育史としては後に、當時の羅馬の教育思想家達が受けたる教愛として、これ等哲學諸派に就て再說するであらう。

因に當時は一般文化の進展と共に、女子の教愛も一般に高められ、かのカティリーナ[1]陰謀事件に參加せる女丈夫セムプローニア[2]の如きは「希臘的及び羅馬的學識を教へられたる女」として讃へられてゐる。

尙ほ希臘學徒の移入と共に書籍の蒐集、筆寫、販賣等も漸く起り、共和時代末期に於て既に、筆耕人、手記書籍・書籍販賣人・書店等が存在したことを史家は傳へてゐる。

さて以上の如く羅馬本來の教育が次第に希臘的教育に影響せられると共に、知育の方面は著しく內容と高度とを增したけれども、德育の方面は却て次第に衰頽しつつあつた。羅馬人が伊太利半島を統一した時は、同時に堅實なる道德的・宗教的傳統を失ひ初めた時であつた。即ちそこには個人主義的・利己的野心乃至は享樂的傾向が次第に蔚しかけてゐた。果してその後の羅馬は外に於て、世界的帝國の大を致しながら、內には內訌・黨爭が漸く露骨と

1) Catilina.　2) Sempronia.

なり、紛亂の度を加へつつ、共和時代の終焉に近づいて行つたのである。そしてかかる道德的頹廢もまた希臘的學藝の移入と共に、憂國の志士の反省を促さずには措かなかつた。吾吾はかくして今や共和時代末期の思想家による文化の批判、國民への誡告、即ち教育思想に就て述べなければならない。

第二節　共和時代末期の教育思想

共和時代末期に發生せる教育思想は、主として次の三人によつて代表せられてゐる。第一にカトーは舊き羅馬的精神を最も鮮明に體現し支持して新しき希臘的風潮を極力排擊し、第二にキケロは羅馬的精神の基調に立ちながらも希臘的教養を最も自由に豐富に學び採り、その人格と思想とに於てこの時代の最も輝かしき精髓を指示し、第三にワルローは前二者の中間的地位に立つて複雜なる教養と方向とを併せ含み、移り行く世相を適確に表現してゐる。これ等三人の思想家を通じて吾々は併しなほ羅馬の國風が全く爛熟の域には到らず、依然として共和時代の堅實性に支へられてゐるのを見る。そして又これ等の人々の教育思想が未だ學的體系と根據とを有せずして、唯その憂國經世の抱負主張の裡に斷片的に教育思想を藏してゐるに過ぎないことは、後の帝政時代の組織的教育思想と對比して、一般に時代の學的未熟さを暗示するものである。

一　カトー

盛運[1]　マルクス・ポルキウス・カトー[2]は、その曾孫に當るマルクス・ポルキウス・カトー・ウティケンシス[3]と區別するために、大カトー[4]と呼ばれ、又彼の監察官としての峻嚴さの故に監察官カトー[5]とも呼ばれてゐる。前二三四年に、ラティウム州内の古都トスクルムに生れサビーニ州内なる父の農場に於て育てられた。先祖に就ては全く知られてゐないけれども、彼自身の語る所によれば、父は勇敢な武人らしき人であり、祖父も屢々戰功を立て、國家から表彰せられたとのことである。羅馬人は、家柄の故ではなく自らの動功によつて名譽を博した人々をば一般に「新人[6]」と名づけることを慣習とし、カトーをも亦新人と呼んだが彼は、官職や名譽に於てこそ自分は新人であるが、それも實は遠き祖先の動功と德とに負うてゐるのだと言つてゐた。後の名は初めプリスクス[7]であつたのを、後にその才幹の故にカトーと呼ばれたのである。それは羅馬人が賢明なることをカトス[8]と呼んだことに由來してゐる。

前二一七年カトーは十七歳を以て初めて戰爭に出陣し、當時伊太利を荒し廻つてゐたハンニバルの軍と戰ひ、よく困苦缺乏に堪へて剛勇を顯はした。爾來この第二ポエニ戰役の間、屢々出征して戰功を立て、戰の閒暇にはサビーニの農場に歸つて、質朴な農耕生活に身を委ね、又附近の人々のために辯護士として無報酬で活動し辯論を修練した。

彼の近くに羅馬の勇將クーリウス・デンタートゥス[9]が曾て住んでゐた小屋があつた。彼はこの畫師を屢々訪ねて、偉人の質朴な生活に心打たれ、自らも勞働を愛し奢侈を警める念を强くした。

1) Ploutarchos, Cato.　2) Marcus Porcius Cato.　3) M. P. C. Uticensis.
4) Cato Maior.　5) Cato Censorius.　6) homo novus.
7) Priscus.　8) catus.　9) M. Curius Dentatus.

1) Fabius Maximus. 2) Nearchus. 3) L. Valerius Flaccus.
4) Scipio Africanus. 5) praetor. 6) consul. 7) Acilius Glabrio.
8) Antiochos. 9) censor.

ファビウス・マキシムス[1]が、やはり第二ポエニ戰役中に於て、タレントゥムを占領したときカトーもその下に屬して從軍したが、側ら、プタゴラス學派のネアルクス[2]に接しその教說を傾聽した。ネアルクスがプラトーンの言葉を引用して、快樂は惡への最大の誘惑であると言ひ、肉體は精神の第一の障害であつて、精神は肉體的感能から出來るだけ離脫することによりその害を免れ純化せられると說くのを聞いて、カトーは益々質素と克己とを愛するやうになつた。

カトーの農場の隣りに、知名の貴族ワレリウス・フラックスが農場を持つて居り、その人はカトーの召使達から主人の人となりを聞いて感服し、一日會食に招待してカトーのすぐれた素質を知り、羅馬に於て公的生活に入るべきことを說得した。かくしてカトーは羅馬に居を移し、先づ辯護士として知己を增し、やがてワレリウスに引立てられて次第に政界に進出して行つた。即ち前二〇四年には財務官となり、スキピオ[4]に從つてシシリー島及びアフリカに出征した。この間にカトーはスキピオの奢侈淫費をいたく憤慨し、羅馬に歸つてからこれを元老院に告發して彈劾した。更に前一九九年には造營官となり、前一九八年には長官[5]となつてサルディニアを管轄し、貪婪を旨としてよくこれを治めた。前一九五年に恩人畫友たるワレリウスと共に統領[6]となり、西班牙と戰つて大勝を博し翌年羅馬に凱旋した。尙前一九一年には統領アキリウス・グラブリオ[7]に從つて、ハンニバルの援護者アンティオコス[8]を希臘に破り、特にテルモピュライの戰勝に功を立てた。この後カトーは主として內政に活躍し、國粹的思想を持して、貴族達の間に漸く高まりつつあつた希臘的奢侈を警め、スキピオ一家の排擊には殊に力を盡した。前一八四年に、貴族側の猛烈な反對にも拘らずワレリウスと共に監察官[9]に選ばれるや、益々益々にその主義を實行し、後進の如き嚴格なる監察方針と希臘的國風の排斥

1) Delenda est Carthago. 2) Origines. 3) Praecepta ad Filium.
4) Carmen de Moribus. 5) Scriptores Rei Rusticae.
6) Cicero, Brut. 65.

とを敢てした。晩年(その歿する前年)カトーは羅馬の使臣としてカルタゴに赴いた。それはカルタゴ人とヌミディアのマシニッサ王との間の紛爭の原因を調査する目的であつたが、彼はこの時第二ポニニ戰役後のカルタゴが毫も疲弊の色を有せず、却て豐饒たる意氣を以て興隆しつつある實狀を目擊し、羅馬に對するやがての脅威を痛感した。そして急遽歸國してこれを元老院に警告し、演壇に立つ度毎に、その富强の何たるを問はず、常に「カルタゴは滅ぼされねばならない」[1]といふ極語を以て罵詈呪詛した。かくて彼は第三ポエニ戰役の空氣を國內に瀰漫せしめつつ、前一四九年八十五歲を以て羅馬に歿したのである。

カトーの著述としては、羅馬の歷史を取扱つた『由來記』[2]、その息子への教訓を書いた『童子訓』[3]並びに『道德詩』[4]、農家の生活に於ける諸方面の經營を論じた『田園生活論』[5]があり、又キケロによつて賞讚せられた百五十の演說を遺してゐる。[6] これ等の中『田園生活論』を除く外は何れも今日斷片を傳へてゐるに過ぎないけれども、吾々はそれ等の斷片を通じて、カトーが如何なる思想と態度を以て、羅馬の古き國風を鼓吹し、新來の希臘的國風を排斥したか、又その子供の教育に於て如何にそれを具體化したかを窺ふことが出來るのである。

羅馬の國粹保存と希臘的國風の排斥　プルータルコスの評傳によれば、カトーは雄辯に於て羅馬のデーモステネースと呼ばれたけれども、併し彼に就て一層讚嘆せられたのはその寡欲質朴剛健の生活態度であつた。自ら語る所によれば、彼は百ドラクメ(約四十圓)以上の價の衣服を用ひたることなく、長官や統領となつても奴隸と同樣の飲料を用ひた。魚や肉は三十ア

ス(約三十錢)だけを市場から買つたが、それも彼が肉體を强健にして軍務に役立たせたいといふ亭公の精神からであつた。曾て刺繍のついたバビロニアの禮服を人から贈られたが、彼は直ちにこれを賣却した。又その住居は何れも壁が塗つてなかつた。彼の使用した奴隷は價額千五百ドラクメを超えることなく、美しい奴隷よりも寧ろ頑强な奴隷を選び、そして彼等が老齢で用に立たなくなると、無駄な養育費を使はないで、直ちに賣却した。使ひ飼らした家畜や軍馬と雖も不用となれば無情に賣り棄てたのである。かかる生活態度はプルータルコスの批評してゐる如く、吝嗇又は冷酷とさへ思はれる程であつたが、而も彼はそれによつて國帑の支出を減ぜんとする愛國心を發揮したのである。故に治者としてのカトーは實に謹嚴恪勤そのものであつた。彼は曾て長官としてサルディニアを管轄してゐたとき、唯一人の奴隷を從へ徒歩で領内を巡察した。又常に自ら語る所によれば、彼は未明に起き出で、私事を全く放擲して、終日公事に盡瘁し、そのために反對者の怨嗟を招いたとのことである。そして又彼は、惡事を爲して倒を受けないことよりも、寧ろ善事を爲して報酬を受けないことを望み、且つ他人の過失はすべてこれを恕し、自らの過失は毫もこれを許さないと言つてゐた。併し彼が監察官として、一貴族マンリウスをば、白晝その妻の面前で妻に接吻した故を以て放逐した如き事例を見れば、他人の罪過を責めるのに、如何に峻嚴であつたかを窺ふことが出來る。彼は國民の奢侈に對して重稅を課し、又冗談に、市場を尖つた石で數きつめて怠惰な者共が寢ころぶことの出來ぬやうにせよ、などと言つて、國民の懶惰遊逸を警めた。

かくの如きは實に勤勉實直なる羅馬本來の國風を最も極端に保持し發揚したものであるが、他方カトーは希臘文化の導入が、國民の奢侈逸樂の禍根であるとし、極力希臘風の排斥のために奮鬪した。彼は希臘人の冗辯を忌み、羅馬に來た希臘人教師を排斥し、又哲學及び一般希臘文化を甚だしく嫌惡して、ソークラテースをば空論を弄び國風を破壞し國民をして國法に背かしめたものであると非難し、又イソクラテースの學校を嘲罵して、その學生は老年に至るまで政治學を學修し冥界に行つてからミノースの前でそれを論ずる積りでゐると揶揄した。かくて彼はその子を警めて、羅馬は希臘の文字に充されるときその國を失ふであらうとまで說いたのである。プルータルコスによれば、カトーは(希臘語を學び希臘語の書籍を讀んだのは晩年であるが)早くより希臘的教養を具へて居り、その演說に於て巧みにトゥキュディデースやデーモステネースを引用し、又彼の著述は希臘の物語や情調によつて修飾せられ、彼の唱道した格言や標語は希臘文學からの飜譯を多く含んでゐた。それにも拘らずカトーの思想と生活とは常に羅馬的精神によつて貫かれ、反希臘的愛國の志士として彼は史上に足跡を印

したのである。

教育の實績及び風潮　監察官として羅馬國民の教育者であつたカトーは、よき夫、よき父として、家庭教育の最も典型的な擔當者であり、治國の熱意に劣らざる顧慮と才能とを以て齊家の事に盡力した。妻や子供を毆打する男は、彼の言ふ所によれば、神聖なるものの中の最も神聖なるものに暴力を加へるのである。そして又善良なる夫は偉大なる元老よりも更に賞讃に値するものである。古のソークラテースに於て讃ふべき點は、その口やかましき妻と愚鈍なる子供等とに對して優しく接したことに存する。

かかる見解を抱けるカトーは、公事の外には何事にもまさつて息子の教育に熱中し、妻が息子に入浴させたり褻衣を着せたりする時は必ず側に附添つてゐた。妻も亦賢

自ら子供を養育し、その奴隷の子供等にも我が子と同じく乳を與へて、彼等の間に同胞の親しみを感じさせるやうにした。息子が物心つく頃になるとカトーは自ら讀書を教へた。彼にはキロンといふ立派な教師が奴隷として雇はれてゐたが、彼は子供の教育の如き貴重なる仕事を奴隷に任せるに忍びなかつた。かくて彼は讀書のみならず、法律に於ても、體育に於ても、自ら子供の教師となつた。そして槍投、武器の操作、乘馬、拳闘等を練習せしめ、寒暑に堪へる鍛錬を施し、ティベリス河の急湍渦流に泳ぐことを教へた。彼は又息子をして祖國の

1) Rem tene, verba sequentur.　2) Cornelius Front.　3) Salus.

歴史を知らしめ、偉大なる先人の感化に浴さしめんとして自ら羅馬史卽ち既述の『由來記』を書き與へた。更に希臘學藝への感染を防ぐために、羅甸語を以て羅馬的精神に基ける『童子訓』を書き、健康法、農業、辯論、軍事、法律諸般の事項を簡潔なる訓言に纏めて、子供に與へた。その訓言の多くはカトーの面目を反映する頑固偏狹なものであつたが、中には眞に傾聽すべき金言も含まれてゐた。「事柄を把握せよ、言葉はおのづから從はん[1]」といふが如きはその一例である。又すぐれたる辯論家の條件として、率直健全なる理解力、强固なる心情、迫力ある辯舌の才を擧げ、特に、善良なる人のみ眞の雄辯家たり得べきことを高調した。更に彼の『道德詩』には例へば、吝嗇及び貪慾、未だ詩なく詩人なかりし古の堅實なる時代、人生は鐵の如く磨かざれば錆を生ずるといふ譬喩などを含んでゐた。

史論地位　カトーの生活と思想とは、かくの如く謹嚴實直にして永遠の教訓を含めるものであつたから、彼の名を以て傳へられた諸々の訓言は、羅馬時代及び中世期を通じて、少青年並びに大人の讀物として廣く愛誦せられた。ハドリアヌス帝の時、羅馬國粹家肌の修辭學者にして偉大なる教育者たりしコルネーリウス・フロント[2]は、カトーの言行、功業を絶讃し、伊太利のすべての都市は彼の銅像を建つべきことを奬めた。羅馬のクィリーナーリス丘上なる國家守護の女神サルス[3]の神殿にはカトーの銅像が建てられ、次の如き文字が刻せられた。「カトーは惡

に傾き沈む羅馬國家をば、適切なる救治策、賢明なる訓練と指導とによつて、再び起上らしめた。」これは實に彼の功績を最も明確に特色づけた言葉である。

カトーはかくの如く國粋的志士として、反希臘主義者として、政治に教育に畢生の奮闘を續けた。併し彼の熱烈なる教説も滔々たる時代の大勢を挽回すること能はず、新しき希臘的國風は愈〻羅馬の人心に浸潤して行くのであつた。そしてこの大勢に反抗する代りに、よくこれに乘じこれを利用して、時代の典型的人格と思想とを錬成したのが、次に述ぶべきキケロである。

二　キケロ

生涯[1]　マルクス・トゥルリウス・キケロ[2]は前一〇六年に、ラティウム州内のアルピーヌム市の近郊に生れた。母ヘルウィアは名門の賢人として有名であるが、父方の家柄については明かに知られてゐない。キケロといふ名は「埃及豆[3]」を意味し、彼の先祖に、鼻の先が豆の發芽の如き窪みを有する人があつて、この名を得たのであらうと言はれてゐる。叔父のルキウスは雄辯家アントーニウスの友人であり、キケロ一門の中にも雄辯家があつた。キケロは弟のクイントゥスと共に教育せられたが、この二人の兄弟の聰明好學の故に、父は羅馬に居を移し、其處で良師を選んで二子の教育を託した。その師の中で特に有名なのはプンティオケイアの詩人アルキアスであつた。元老院の有力なる政客ムキウス・スカイウォラに就て法律を學んだ。前八九年に統領ポンペイウス・ストラ

1) Ploutarchos, Cicero.　2) Marcus Tullius Cicero.　3) Cicer.

ボに從つて伊太利當市と戦つたのは彼の生涯を通じて唯一回の從軍であつた。かのマリウスとスルラとの内亂の間にはキケロは何れの黨派にも屬せずして、專ら法律・哲學・辯論術の研鑽に後頭した。即ち哲學をば當時羅馬に滯在せるエピクーロス派のファイドロス、アカデーメイア派の領袖ディローン及びストア派のディオドトスに學び、辯論術をばロドスより羅馬に來た使臣モローンに就て學んだ。内亂がマリウス黨の勝利によつて平和に復するや、キケロは辯護士としてクイントゥス其他の人人のために法廷に立ち、その雄辯と正義に對する熱意とは敬の故に名聲と信望とを博した。併し間もなく前七九年に彼は希臘に渡つた。それは表面上は健康のためであつたが、事實は多分スルラの殘黨の復讐を恐れたからであらう。彼は先づアテーナイに六箇月を過し、アンティオコスに哲學を、デーメートリオスに辯論術を學び、又生涯の親友ポンポーニウス・アティクスを得た。それより小亞細亞に渡り、アドラミュティオンのクセノクレース、マグネシアのディオニュシオス、カリアのメニッポス等を訪ひ、つひにロドス島に渡つて、先師モローンの子なるアポローニオスに辯論術を學び、ポセイドーニオスに哲學を學んだ。この時アポローニオスは羅甸語を語らなかつたので、キケロに希臘語を以て演說すべきことを命じた。キケロはこの機會に自分の希臘語の缺點を矯正せられることを望んで熱心に演說した。居合せた人々はその巧みさに驚嘆して互に顔を見合せた。アポローニオスは感じて深く物思ひに沈んでゐたがキケロがこれを讀つたのでやつと口を開いて叫んだ。「キケロよ！　余は實に汝を賞讃する。だが余は希臘の運命を悲む、何故ならば吾等希臘人に殘されたる唯一の名譽が一教養と雄辯とが一汝によつて羅馬人等に奪らされるのだから。」と。キケロは希臘的教養に於て實にかくの如く卓越し、一たびは故國の政治的領域を脱つてアテーナイを墳墓の地と定めん

とする底意さへも抱いてゐたが、前七八年スルラが沒し、且つ故國の知己と希臘の愚師との熱心なる勸說があつたので、前七七年に羅馬に歸つた。回復せる健康と愈々進歩せる辯論の才能とを以て彼は公共生活に進出し、前五七年にはシシリー島に財務官として赴き、翌年羅馬に歸り、それより、造幣司、長官等の官職を經て、前六五年には統領となり、これより政界の中樞に活躍することとなつた。彼は當初より民黨と貴族黨との何れにも偏せざる立場にあつたが、統領となつた後は、庶民側の革命を防止し國家を安泰ならしめるために自らを保守的貴族黨に結合し、ポンペイウスをこの計畫に推戴せんとした。併しカイサルとクラッスとポンペイウスとが第一回三頭政治を組織して(前六〇年)元老院に對抗するや、キケロはこの三頭政治に好意を持ち得ず、從つて彼等の勢力に保護せられることも出來ずして、他方民黨の護民官クロディウスと激しき反目に陷り、身の危險を感じて前五八年に羅馬を逃亡し、マケドニアのテッサロニケ市に身を寄せて、憂悲の日を送つた。翌五七年羅馬に於ける友人達の熱心なる召喚によつて彼は歸國した。前五二年に不本意ながらキリキアの統治者として赴任することを强ひられ、任地に於て國王の如くに振舞ひ、前五〇年羅馬に歸つた。時恰もカイサルとポンペイウスとの內訌が起り、彼はポンペイウスに味方して出征したこともあつたが、併しカイサルは彼に對して好意と尊敬とを失はなかつた。そしてキケロ自身も大部分はこの內訌の渦中から身を避けて、著作に勝進した。然るに前四四年カイサルの暗殺後彼は再び政界に出てブルートゥスに味方し共和黨に屬して活躍し、後更にオクタウィアヌスに近づきアントニウスとオクタウィアヌスとの接近を防止せんとしたが成らず、彼等の間に第二回三頭政治が成立するや、キケロはその敵として處罰を受けねばならなかつた。彼は危險を避けて諸方を逃げ廻つてゐたが、つひにラティウム州の海岸なるフォルミアイ市に於て追手の兵に殺された。時に前四三年、彼は六十四歲であつた。彼の頭と手とは切られて羅馬に運ばれ、アントニウスの命によつて市場の演壇に釘付けにせられた。

後年オクタウィアヌスはキケロの子を高官に登用し、更に彼の治下に於て元老院はアントニウスの銅像を撤回し、幾多の名譽を剝奪し、その一門が「マルクス」といふ羅馬人慣用の姓を用ひることを禁止した。これは實にキケロに對する羅馬國民の好意と尊敬とを反映するものである。

キケロは羅馬第一の思想家且つ優筆家であつて、その著作は、辯論術・政治學・倫理學・形而上學・神學等の各方面に亘り、更に各種の辯論及び書翰を併せて實に活潑なるものである。それ等の中特に教育思想を窺ふに足るべき主要文獻は『國家』[1]・『法律』[2]・『至高善と至高惡』[3]・『トゥスクルムの論爭』[4]・『大カトー』[5]又は『老齡』[6]・『ライリウス又は友情』[7]・『義務』[8]・『神性』[9]・『卜占』[10]・『運命』[11]・『考案』[12]・『辯論家』[13]・『辯論家ブルートゥス』[14]・『辯論術』[15]等である。但し今日に傳はれるものは多くはこれ等各々の斷片に過ぎない。

思想の全體的特色　上述の如き生涯が明示する如く、キケロは羅馬人的性格を希臘人的教養によつて洗煉し、この兩文化の融合せられ行く時代相を躬ら體現せる者であつた。純粹の羅甸種族として生れ、羅馬風の堅實なる家庭教育を父母に受け、長じて希臘學藝の各部門を夫々專門教師に就て學び、更に希臘及び小亞細亞に遊學し、歸つて祖國の政界に生命を堵して奮鬪し、而もその間の閑暇を各種學藝の研鑽と著作とに費した彼に於ては、羅馬人的

1) De Republicae. 2) De Legibus. 3) De Finibus Bonorum et Malorum.
4) Tusculumae Disputationes. 5) Cato Maior sive De Senectute.
6) Laelius sive De Amicitia. 7) De Officiis. 8) De Natura Deorum.
9) De Divinatione. 10) De Fato. 11) De Inventione. 12) De Oratore.
13) Ad M. Brutum Orator. 14) Brutus sive De Claris Oratoribus.
15) De Partitione Oratoria.

なる實踐と希臘人的なる理論とが誠によく調和してゐた。それ故に彼は羅馬國民によつて「愛國者」「救世家」と讃へられたと共に「自らの有する一切の人間的教養特にも高等なる學問的並びに藝術的識見は希臘人に負うてゐる」[1]と告白したのである。

キケロの思想家的業績は、主として修辞學と哲學と教育思想とに求められるのであるが、これ等何れの領域に於ても上述の希臘羅馬兩要素の融合が見られる。卽ち第一に彼は羅馬第一の雄辯家・名文家として羅甸語散文修辞法の典型を遺し、今日に至るまで古典的羅甸語の代表者と仰がれてゐるのであるが、その語彙に修辞に引用句に彼は多くの希臘的要素を交へ、それによつて從來の卑俗なる羅甸語を洗煉し醇化し整頓したのである。第二に哲學者としての彼は希臘哲學の諸契機を攝取しながらこれを羅馬人的實踐的要求より折衷した。從つて哲學史は何等の創見をも彼に歸する所がないのであるが、この事は偶彼の本來の地位を語るものであり、延いては彼を有力なる一代表者とする羅馬哲學全體の折衷的にして且つ實踐的なる面目をも暗示するものと見なければならぬ。第三に彼の教育思想は、上述の修辞學者・哲學者としての彼の思想を教育の領域に具體化したものであるから、吾吾は次に項を改めてこれを叙述し、それに於て上の第一・第二の點をも窺ふことにしたいと思ふ。

1) Cicero, Ad Quintum Fratrem, I.

物の靈長であり、人の精神の最高機能は理性に存し、理性の完全なる實現が德であり、而してこの理性は注意深く發展せしめることを必要とするが故に、教育は人に於て特に重要である。人は自己を深く省みることによつて內に神的なるものを見出すであらう。これを自己に內在する神の姿と考へるとき、この貴重なる賜物を損ふが如き言行を愼まざるを得ない。換言すれば人は本來善への素質を潛在的に具へてゐるのであつて、それを教育によつて實現しきへすれば、善に導かれ幸福に到り得るのである。[1] キケロにあつては、幸福なる生活[2]が人生最高の目的でありこの幸福なる生活に到るの途は德[3]そのもので十分であり、そして「人は哲學によつて善き强き人[4](有德の人)とせられる。[5]」ここに彼が「哲學」と言ふのは理性の啓培に外ならぬが故に、理性の教育こそ人を有德卽幸福に到らしめる所以であつて、この思想はまさしく希臘哲學を貫く根本原理である。

キケロは併し教育を以て單に個人の幸福の途とのみ考へることとなく、それが同時に國家のためであると考へてゐた。「吾人は青年を敎へ導くことより更に大なる若しくは更によき奉仕を國家になし得るであらうか」特にも現時の道德的頹廢の故に迷路に陷らんとする我國の青年達を引摩め正しき道に向はしめんが爲に異常の努力を要する時に當つては、「教

1) Cicero, De Legibus, I.　2) beata vita.　3) virtus.
4) vir bonus et fortis.　5) Cicero, De Devinatione, II.

育は一層重大なる報國の途である)。勿論この學問(哲學)に向ふ者は少數に過ぎないかも知れぬ。併し少數でも結構だ。その人々の努力は國家に絶大なる影響を與へるであらうから。[1]」キケロが哲學に關する著作に精進したのは實にかかる教育報國の意圖に基くものであつて、これはプラトーン・アリストテレース等の希臘哲人の先蹤に倣へるものである。而も羅甸語を以て書いたのは、彼の告白によれば、羅馬人が希臘語の哲學書から離れて哲學を修め得んがためであつて、ここに彼の國粋思想が現れてゐるのである。

さてすべての人々に共通に必要なことは、早くより善への萌芽を助長し、惡の根源たる感能的享樂を斷つことであつて、そのために、最も重要な教科は宗教である。神への敬虔なる心情を培ひ、迷信を根絶して、よき傳統的信仰を國家のために維持しなければならぬ、といふのがキケロの見解である。

よき傳統的信仰の保持を主張したキケロは又羅馬の古き國法にも絶大の尊敬を拂つてゐた。「若し何人かが法律の資源を求めるならば、十二銅板法の唯一冊の書籍は、あらゆる哲學者の藏書にも優つて、權威と効益とを有するに相違ない。」彼はかく絶讃して、リ"クールゴスやドラコーンやソロ"ンの法制に比べてそれが如何にすぐれてゐるかを說き、羅馬の先輩が法制的識見に於て希臘人その他のあらゆる國民にも優つてゐたことを誇り、法律の學修は辯

1) Cicero, op. cit.

論家たらんとする者の必須の要件であることを指摘してゐる。[1] 吾々はここにもキケロの國粋的思想を見るのである。

キケロは又兒童の心的發達について詳密に觀察し、これを前提として教育の任務を說いてゐる。即ち彼は先づ動物發達に一瞥を與へた後、人類の發達に推論し、初生兒は極めて弱く殆ど精神を有せず、やがて僅かの力が生ずると手足と感覺とを練習し初め、立つことや手を動かすことを努め、又自分の養育者を認知する。それから他の兒童等と交ることを喜び、遊戯を好み、物語を聞きたがる。又自分が餘計に持つてゐるものを他人に與へて喜び、家の内に見出す物事に好奇心を抱き、考へたり學んだりすることを始め、會ふ人々の名前を知りたがる。仲間と競爭しては勝利を誇り敗北に落膽する。そしてかかる發達の各段階に於てあらゆる德への素質が見出され、その素質は格別の教授を要せずして、德の微少なる模範によつて喚醒まされ、この内在的な種子がやがて德の芽を發し花を開くのである。即ち人は生れながらにして活動・勤勉・寛大・親切等の本能を有し、又認識・思慮・勇氣の素質並びにそれへの反對に對する嫌惡を具へてゐる。これ等の先天的能力よりして哲學者の理性の光も點ぜられ、この光を精神的な導きとして進むとき、本然の目的に到達する。併し人が未熟で知的に幼稚な間は、吾人の本然の力は霞に蔽はれて明かでなく、長ずるに從つてそれを自覺

1) Cicero, De Oratore, I.

し、且つそれ自らに於ては未だ不完全であつて教育により更に發展させねばならぬことを知るに至るのである。[1]」故に吾人は、アポーロンの『吾等自らを知れ』[2]といふ言葉を實現するために、吾人の心身の諸能力を知りそれ等の全き實現に努力しなければならぬ。この全き自我の實現にこそ「至高善」[3]は存する。そして自我の完成は諸能力各々を完成することに外ならぬのであるが、但し肉體の完成は精神の完成の基礎としてのみ必要であつて、精神の價値に對する肉體の價値は太陽に對する星の如くに微々たるものである。[4] 因にキケロは希臘的體育をば全く非難し、その道德的弊害を好んで指摘してゐる。

キケロは又兒童に對する環境の重大性を考へ、環境の力によつて、正しき用語や思想の高貴なる發現さへも制約せられることを說いた。又賞罰の注意を述べてすべての罰は、言葉によつてであれ行動によつてであれ、何等の侮辱を含むべきではなく、又それは罪過に適應し、且つ同一の場合には同一の衡平さを以てなさるべきこと、又怒を以て罰することは中庸を失ひ易きが故に假令叱責の場合にも怒や不機嫌を混ずべきでないこと、そして叱責されたる者は、吾々叱責者が一層の苦痛と不快とを自ら忍びつつも彼のために敢て叱責したのであることを知らねばならぬことと等を指示してゐる。[5]

キケロは更に生徒に對して、その教師及び學校に感謝を捧ぐべきことを勸めてゐる。「吾

1) Cicero, De Finibus. V.
2) Noscere nosmet ipsos.
3) summun bonum.
4) Cicero, De Finibus, V.
5) Cicero, De Officiis, I.

人の中、立派な教育を受けたる者にして、その教育者、その教授者、指導者に對し、又その精神を培ひ養はれたる無心の場所に對して、內心深く感謝の思ひ出を有たざる者があり得ようか。[1]」その感謝の念は特に國家に對する獻身的な愛によつて表現されねばならぬ。「換言すれば人は國家のために教育せらるべく、祖國が吾々國民を生み教育するのは、吾々が何等祖國への奉仕をなさずして自己の安逸を求め世上の煩累から逃避して安靜に暮すためではなく、寧ろ精神と才幹と識見との最大多數を祖國の利益のために要求し、その剩餘だけを吾々個人の私用に供せしめるためである。それ故に吾人は國家を益するに足る學藝を學ばねばならぬ、それが智の最大の仕事であり、德の最大の顯現最高の活動であるから。[2]」

キケロは名譽心をば教育の主要動力として尊重し、それを善への本質的動因と考へた。國家はその法制に於て、國民が惡徒の恐怖によつてよりも寧ろ名譽心によつて惡から遠ざかるやうに工夫しなければならぬ。既に兒童に於て、その遊戲は人間性を示現するのであるが、名譽心は最も有力有効に働いてゐる。この心情はあらゆる手段を以て涵養促進せらるべく、而も單に青少年期に於てのみならず、成人期に於ても、善への最も强き刺戟であり、惡に對する最も忠實なる防禦者である。[3]

キケロは羅馬の思想家中特に教育に於ける個性の尊重を力說した人である。而も彼に

1) Cicero, Pro Plancio, 33.
2) Cicero, De Republicae, I.
3) Cicero, De Republicae, V.

よれば、子弟は各自が、自らの素質を内省吟味し、自己の長短の最も厳しき裁判官とならねばならぬ。この事は少青年期にあつては就中重要である。蓋しこの時期は模倣性に富み、又師長の尊重する所に傾き赴くからである。[1]

最後にキケロによれば、青年期の最大の危險は性慾及び感能的傾向に存するが故に、教育者はこの點には特に注意を拂はねばならぬ。そして享樂に對しては心身を武裝せしむべく、そのためにはあらゆる軟教育を排して硬教育を施し、心身の勞作をすすめ、本然の羞恥心・名譽心を涵養すべきである。假令青年が勞苦の休養として享樂を求める場合にもその度を過さぬやうに注意し、且つ常に禮儀を守り、他人の批評を眼中に置かねばならぬ。[2]

辯論家教育論　以上はキケロに於ける一般的教育思想の要點であるが、彼は辯論家の養成に就ては特に論を成してゐる。辯論家は羅馬に於ては、論客・政客として法廷や議場に活躍する人である外に、教師であり著作家であり牧師でもあつて、一般國民の齊しく憧憬せる理想人であり、キケロの言へる如く、「羅馬が世界の大國家となり平和が齎らされたる後には、功名の野心ある青年にして、辯論術の達成に一切の努力を傾けんことを考へざる者は殆どなきに至つた。」特にキケロにあつては、眞の辯論家は即ち眞の有德者であるが故に、彼の辯論家教育論は一般教育思想を特に羅馬の當時の國情に照して具體化せるものと解し得べ

1) Cicero, De Officiis, I.　2) Cicero, op. cit.　3) Cicero, De Oratore, I.

く、從つて羅馬的なる教育の理想と内容と方法とを見る上に頗る重要性を有するものである。

キケロによれば、將來の辯論家に必要なるものは、先天的なる素質及び才幹と基本的教養とである。就中主たる條件は豐富なる素質である。「青年がその音聲・容姿・動作其他の性質に於て辯論家たるに適してゐさへすれば彼が多少性急な又餘りに熱烈過ぎる口調・話し振りを有つてゐても、余は敢て彼を拒まない。余は豐富な精神力を感じさせるやうな、……そして多少それを剪り詰める餘地のある樣な青年を好むのであるから。そして余は青年が同時にすぐれた善良な人である場合にのみ、辯論術の修養に熱中すべきことを勸め、若し如何に努力しても中等程度の力しか發揮し得ない青年に對しては寧ろ方向を他に轉ぜんことを望むのである。」

第二に併し、先天的なる素質及び才幹を有する者も、その準備時代に於て普く基本的教養を積むことが必要である。何故ならば有爲の辯論家たるべき者は、辯證論者の鋭さ、哲學者の豐富な知識、詩人の表現法、法律家の記憶力、名俳優の音聲・身振等を具へてゐなければならぬからである。そして辯論家たるべき者は不斷に辯舌そのものを練習する必要がある。「人はよく語ることによつて、よき語り手となり、わるく語ることによつて、必ずわるき語り手

となる。」故にキケロは、即席演說をも尊重はしたが、併し十分に準備して演壇に立つことの方が一層よいとした。特に筆に書くことをば、內容を精細に知り、修辭を周到にし、用語を適確巧妙ならしめること等のために最も有益なる準備として奬めた。尙キケロは希臘の名詩・卓論を學んだり、それ等を羅甸語に譯したりすることが、辯論術の修練に有効であることも告白してゐる。

次に辯論家はその語るべき內容に就て知識を有たねばならぬ。「知識なくしては如何に流暢なる言葉も空虛であり滑稽である。」との見地よりキケロは辯論家が、歷史を學び特に羅馬古來の法制や慣習に通曉すべきこと、哲學の各部門に亙つての知識、特に實踐哲學即ち人間生活に關する知識を有すべきことを說いてゐる。併し哲學者の有する知識の外に、辯論家は人間のあら゛ゆる性情とそれを動かす原因とに關する知識を必要とする。換言すれば辯論家は單に自らが知識を有するのみでなく、その知識を他人に向つて有効に働かしめねばならぬが故に、人間の感情や理解力を知り、且つ憤怒や悲哀や憎惡等を起さしめ又それ等を反對の心情に轉ぜしむべき原因を知らねばならぬ。勿論これ等の知識は哲學者も有するものであり、其他あら゛ゆる知識に於て哲學者と辯論家とは異なる筈はないのであるが、唯その知識を得る目的が兩者に於て異なるのである。即ち哲學者は自己一身の閑暇を樂しく過すために、知識を追求し、辯論家は人を感化感動せしめ、國家を益するために知識を獲得し活用するのである。キケロのこの見解は、希臘末期の哲學者と本來の羅馬人的面目との對比をよく指示せるものである。

かくて結局辯論家の本領は知識を具へて且つそれを表現する修練を積むことである。ソークラテースが「すべての人は自ら知れる事に關しては雄辯家である。」と言つたが、キケロによればこの言葉は未だ眞を盡して居らない。勿論知識は必須條件ではあるが、併しそれを表現する言葉を如何に整へ磨くべきかを知らなければ、眞の雄辯家になり得ないのである。ソークラテースの言葉は、空虛なる辯論を弄ぶ當時の所謂ソフィステース達への警告であるが、キケロの批評は偶々ソフィステース的雄辯家とキケロ的雄辯家との相違を指示してゐる。

因にキケロは辯論家の基本的修養として前述の如く歷史や哲學を勸めながら、政治學に對しては、青年がこれに關與することに反對した。即ち青年が政界の動きに心を動かされ、徒らに功名榮達に憧れて精神を損ふことを憂れた彼は、政治學をば、既に十分圓熟せる精神と性格とを前提とする學科と考へ、それは賢人大市民にして殆ど神的なる人の仕事であるとしてゐる。[1]

1) Cicero, Republicae, I.

は、その後紀元第一世紀にはクインティリアーヌスによつて繼承せられ、第四世紀にはラクタンティウス、第十二世紀にはサリスベリー、第十四世紀にはペトラルカ、第十六世紀にはエラスムスによつて夫々復活顯揚せられた。殊にペトラルカやエラスムスを機緣とする人文主義運動の進展は勢の赴く所つひに十五六世紀の教育的關心をして專らキケロの模倣に集中せしめ、所謂キケロ主義を現出せしめるに到つた。キケロの教育史上に於ける重要性は、かくして爾後の教育史を通じて屢々想起せられるであらう。

三　ワルロ

生涯　マルクス・テレンティウス・ワルロ[1]は紀一一六年にサビーニ州の古都レアーチに生れた。初め羅馬の文法教師アイリウス・スティロに就て學び、後はアカデーメイアの哲學者アンティオコスを師とした。これ等の師は何れもキケロの師でもあり、キケロとワルロとは友人であつた。ワルロは海軍の司令官として戰功があり、又ポンペイウスの副官として西班牙に出征したが、カイサルがポンペイウスを亡ぼすに及んで、彼は部下の軍をカイサルに讓り、自らは希臘に渡つて暫時滯在し、後カイサルに許されて、書籍の蒐集整理の監督者として使はれた。この後彼は隱居して文筆に親んでゐたが、やがて第二回三頭政治の出現と共に彼の生命は危險に瀕したので暫時逃亡して身を隱し、後オクタウィアヌスに保護せられ、財産の大部分も回收することを得たが、その活潑なる著書は略ど悉く滅に歸した。晩年は平安の中に研究を續け、紀二八年八十九歲を以て歿した。

1) Marcus Terentius Varro.

彼は羅馬第一の博學者と言はれ、その著書も七十四部六百二十卷に上つたと言はれてゐるが、今日その一部の傳はれるものの中で主なるものは『田園生活論』[1]、『羅甸語論』[2]、『學科論』[3]、『兒童教育論』[4]、『風刺詩』[5]等である。

教育思想　ワルロは或る意味に於てカトーとキケロを綜合せるが如き地位に立つてゐる。即ち一方に彼はカトーの如き謹嚴率直なる性格を以て古の良風時代を慕ひ、あらゆる方面に眞の羅馬的なるものを求めながら、他方にはキケロの如く希臘の學藝を愛好し、希臘に關する博學多識をその著述に於て實證した。カトーが監察官として又著作家として當代の道德的頹廢と戰つた如く、ワルロは鋭き風刺を以て當代の弊風を酷評し、その改善に努力した。彼の『風刺詩』は實に古の羅馬の質朴敬虔なる國風の讃美と當代の墮落の攻擊とに充たされ、又婦人の間にまで浸潤せる虛榮奢侈の大勢に對立して、田園生活の單純さと善美さとがそこに描かれてゐる。

兒童教育に關する著書『兒童教育論』は、嚴肅愼重な教育家が、硬軟中庸の立場に立つて述べた教育思想を盛り、又環境や交友が兒童に與へる影響に就ての警告、女子に對する裁縫の勸奬等を含んでゐる。學校の教授科目に就ては、『學科論』九卷に九自由科即ち文法・辨證法・修辭學・幾何學・算術・天文學・音樂・醫學・建築學の各々に亙つて百科全書的に述べてあり、どれは中

1) De Re Rustica.　2) De Lingua Latina.　3) Disciplina.
4) Catus de Liberis Educandis.　5) Saturae.

世期に續出したこの種の著働の原型となつた。ワルロその人が假令羅馬人的性格を保持したとしても、これ等の學科目を學校の教科とすることに於て、時代の大勢は既に羅馬の希臘化に向つて滔々と進みつつあつたことを窺ひ得るであらう。

1) Julius Caesar (100—44 B. C.)　2) Octavianus.　3) Rex.
4) Dictator.　5) Imperator.　6) Augustus.　7) P. Vergilius Maro.
8) Q. Horatius.　9) P. Ovidius Naso.

第二章　帝政時代の教育

第一節　帝政時代の國風と教育事實

アウグストゥスの治世と羅馬黄金時代　ユーリウス・カイサル[1]の偉業を繼ぎ、その歿後の紛亂を平定したオクタヴィアーヌス[2]は、既に長く共和政治の誇りに慣れて來た羅馬の民心を洞察して、自らは國王[3]とか獨裁官[4]とかの稱號を避けて、唯軍の總帥たるイムペラートル[5]の名のみを用ひてゐたが、上下の信望と全政權とは事實上その手に獨占せられ、元老院は從來神々に對してのみ獻ぜられたアウグストゥス[6]（尊嚴者）の尊號を彼に奉つた。これより羅馬は、外形上共和政體を繼續しながら、實質的には帝政となり、西羅馬帝國の滅亡まで約五百年間、史家の所謂羅馬帝政時代（前三一—後四七六）を現出するに至つたのである。

アウグストゥスの治世（前三一—後一四）はアチーナイのペリクレース時代に比すべき羅馬黄金期であつて、これまで外戰内亂に費された國民の關心と精力とは、今や平和生活の醇化向上に向けられ、文運旋ひ起つて、羅馬文化は頂點に達した。アウグストゥス自らは、その親臣の將相マイケーナースと共に、大いに文藝を保護勸奬し、詩人ウェルギリウス・ホラーティウス[7]・オウィディウス[8]・

史家リーウィウス[1]等は何れもこの時期に擡出した。蓋し共和政治の實質的滅亡を惜く人士はその警慎を文藝に於て晴さんとし、一方アウグストゥス帝はそれが自己への反感を轉向せしめるに便利であることを知つて、益々文運を促進したのである。帝はまた當時漸く勃興しつつあつた圖書蒐集の熱に乘じて、オクタウィアム圖書館及びパラーティーナ圖書館を建設した。更に又帝は首都羅馬の美化に盡力し、寺院や劇場や浴場をば、世界に跨がる大版圖の各地より集めたる大理石や黄金を以て飾ゆきばかりに美裝せしめた。かくて、その承けたる瓦の羅馬を大理石の都市として遺した」といふ帝の豪語は決して單なる豪語ではなく、又セネカが世界を一家の如くに考へる當代の人々の感懷を述べ、プルータルコスが羅馬を紅、世界を平和の港に繫ぐ鎖と名づけたのも至當の表現であつた。

圖風の頽廢と教育の大勢　アウグストゥス以後約二百年間は、所謂五賢帝即ちネルウァ、トラヤヌス、ハドリヤヌス、アントニウス・ピウス、マルクス・アウレリウスの如き名君が相繼ぎ、外征に内治に偉績を擧げて、羅馬帝政の極盛期を示した。而もまた沒落の素因はこの極盛の蔭に醸されつつあつた。即ち今や敵國・外患なき强大なる國内には享樂者侈・殘忍の風潮が滔々として流れ充ち、そこでは家庭教育が先づ頽廢して、不品行・自由結婚・離婚が一般に行はれ、父母の惡感化は子女の童心を汚損し、童僕及び家庭教師は阿諛・利慾のみを念として教育の誠心熱意を缺き、かくて羅馬的なる情意の陶冶に久しき地盤となり來れる家庭教育がつひに崩壞したのである。更に社會の大衆は低劣なる快樂に陶醉し、猛獸や劍客の爭鬪殺戮が日夜觀衆を狂喜させ、跳大なる版圖に信仰は雖然と入亂れ、世界を家とする人々に個人主義的傾向は益々浸潤して、社會は今や往年の堅實なる教育的機能を全く失墜した。この間にあつて唯學校教育のみは歷代帝王の積極的保護勵奬により頗る發達したけれども、それさへも知育を主とせるものであつて、この主知的傾向が閑、愛へ行く國運を反映してゐたのである。かくの如きは圖風の大勢であると同時に國民教育そのものの大勢であつて、吾々は次にこの教育的趨勢を以、家庭教育、社會教育及び學校教育の各方面に亙つて稍、詳細に敍述しなければならぬ。

家庭教育の頽廢　帝政時代の道德的頽廢は先づ家庭生活の破壞に於て現はれた。そして家庭の中心たる母親達は往時のマートローナの威嚴を棄てて今や家政と育兒とを奴隷の手に放任し、自らは美粧と興行見物と戀愛とに熱中した。古來の嚴肅な宗教的結婚式は稀になつて、自由結婚が普く行はれ、不義と離婚とは日常の茶飯事となつてしまつた。中には二十度も結婚した婦人があつたと傳へられてゐる。勿論婦人の墮落は反面に於て男子の墮落をも意味するものであり、兩親のかかる頽廢的生活が子女に與へた惡感化に就ては殆ど

1) T. Livius Patavinus.

想像に餘りある。更に又童僕及び家庭教師の腐敗も子女の童心を汚損する主要原因であつた。彼等は唯報酬のみを念頭に置いて、子供にも主人にも甘言と阿諛と卑屈とを以て仕へ、純眞なる好學心と眞摯なる教育熱とは彼等の態度の何處にも見出されなかつたのである。

社會風教の頽廢　帝政時代の羅馬社會の墮落を證明する第一の事象は流血の慘事に狂喜する殘忍の風潮であつた。羅馬人に取つては、人間が或は人間と戰ひ或は猛獸と鬪つて死んで行くのを觀ることが最大の快樂であつたのである。アウグストゥス帝の時既に劍客の鬪技が流行し、帝は一日に百二十人以上の人間が相鬪ふことを禁止したが、それも無效であり、トラヤヌス帝は一萬人の奴隷を鬪技場に上らしめた。猛獸を相手とする鬪技にも、ポンペイウスの時既に六百頭の獅子が、アウグストゥス帝の時四百二十頭の豹、二十頭の象が使用せられ、ティトゥス帝は一日に五千頭の猛獸を殺した。而も觀客は人間よりも猛獸の方に聲援し、人間の流血を最も好んだ。貧しい男が鬪士の鮮やかな一擊の下に殺され、その屍體が運び去られて行くのを觀衆は亂舞して見送り、又死に瀕して生命を乞うてゐる男に對し、觀客席の一婦人は寶石に飾られた腕を差し伸ばして、その乞を拒絶し、彼が殺さるべきことを命じた。時には又三十隻の船を海上に戰はせて觀衆がこれを狂喜し、その戰の愈〻激しくその犧牲の愈〻多數なるに從つて大衆は益〻陶醉したのである。

かくの如き殘忍なる享樂と結合して奢侈浪費の風潮が昂じて行つた。例へば辯論家ホルテンシウスはその庭の樹木に葡萄酒を注がせ、皇帝ウィテルリウスは毎日四回の大饗宴を催し、而もその第二回目以後は(當時の風習に從つて)嘔吐劑をも用意して置いた。

更に帝政時代の宗教も決して健全なものではなく、世界を併呑した大帝國は渾沌雜然たる信仰をも併せ取らねばならなかつた。かくて羅馬在來の國民的信仰の外に希臘の神々を始めとして、埃及のイーシス・セラーピス、フェニキアのベール・アスタルテ、斯波のミトラス、猶太のエホバ等の諸神が信仰せられ、皇帝セウェルスの如きは、自邸の禮拜堂にあらゆる宗教の開祖を合祀し、從つて例へば、希臘の神オルフェウスやピタゴラス派の哲人アポローニオスがアブラハムや基督と共に祀られるといふ奇觀を現出した。かかる信仰の混亂時代にあつて、有識階級の人士は、或はそれ等の統一的把握に惱み、或は端的に信仰一般に背を向け、無智の民衆は信仰の矛盾をも意に介せず、迷信との區別をも顧慮することなく、唯自己に好都合なる考へ方に於て雜然たる信仰をその儘に受容れた。この淺薄安逸なる態度が堅實なる道德生活の保障となり得ざることは自明であつて、羅馬の信仰の混亂はそのまま國風の類廢の結果でもあり原因でもあつたのである。

1) C. Asinius Pollio.

圖書館の設置　以上の如き家庭教育の破壞、社會風教の頽廢によつて情意の陶冶が衰へ行くことに反比例して、人々は知識による救濟を求め、知育のみは異常の進展を齎らした。その現れとして先づ見るべきは圖書館の發達である。既にカイサル及びアウグストゥスの親友たりしアシニウス・ポルリオ[1]は、カイサルの意圖を承けて、アウェンティーヌス丘上なる自由の女神リーベルタスの社殿に圖書館を創設し、希臘及び羅甸の文獻を蒐集した。既述のアウグスト。スのオクタウィア及びパラーティナ兩圖書館はこの例に倣へるものである。更にトラヤヌス帝はウルピア圖書館を、コンスタンティーヌス大帝はユーリア圖書館を建立し、紀元第四世紀には羅馬市内だけでも二十八の公立圖書館が出來た。これ等は一面歴代皇帝の好學心に因ると共に、又政策的意味も含んでゐた。それほど國民一般の知識欲は增進し、私人も有産者は圖書館を設けて自己の氣品を誇る風があつた。かくて圖書館は、宮殿に於ても別莊に於ても浴場に於ても、その主なる裝飾施設となつたのである。

教育制度の整備　國民知育の勃興は教育機關の設備改善と教師の地位の向上とを促し、歴代の帝王はこの點に關しても亦積極的に盡力した。即ち先づウェスパシアーヌス帝は教師の生活條件の改善に意を用ひ、羅甸語及び希臘語の修辭學校教師に對し年々國庫補助金を給した。又トラヤヌス帝は貧兒の教育に留意し、且つ屬領に於ける學校教育の發達に盡力

1) Athenaeum.　2) Auditoria.

した。ハドリアヌス帝は自らも學者であつたが、アテナイウム[1]といふ高等程度の學園をば、ユピテルの社殿カピトーリウムに起し、修辭學者や詩人をして其處に講演教授せしめた。そして任を終へた老學者には恩給を與へ租稅を免除した。次でアントニウス・ピウス帝もアウディトリア[2]と稱する宮廷學校を建てて子弟の教育を圖り、又全國の修辭教師及び哲學教師に恩給と名譽の地位とを與へた。マルクス・アウレリウス帝も亦當時圖庫の窮乏にも拘らず、アテナイの哲學學校の教師並びに修辭學校教師に對する恩給を定めた。アレクサンデル・セウェルス帝は更に羅馬に修辭學・文法・醫學・數學・機械學・建築學の寄附講座を新設し、且つ貧學生に對する奬學費を規定した。ディオクレティアーヌス帝は三〇一年の布告により全國教員の俸給を統制して授業料の昂騰を防止した。つひにコンスタンティーヌス大帝は、從前より行はれてゐた教員の特權、即ち公役免除・裁判特例・國庫給受領の三特權を確立するに至つた。

教師の資格檢定制度　教師の資格檢定制度も亦右の諸制度と並行して發達した。即ち從來は前任者が後任者を推擧することに一任してあつたのを、マルクス・アウレリウス帝の時初めて最も卓越せる人々より成れる檢定委員會に於て教師候補者を嚴重に試驗することとなつた。然るにこの制度もやがて衰へて教師の資質が低下したので、ユリアーヌス帝は再び教員檢定制度を布告した。その檢定規定によれば、教師たるべきものは、先づその品性に於て、第二にその辯舌

に於て、卓越してゐなければならぬ。自分は自ら各町村に出張して親しく各人に接する事能はざるが故に敢に令して告げるのであるが、教鞭を執らんとする者は輕率にこの職に身を委ねることなく、官廳の認可を受け、第一流の人々の委員會の承認を經ることを要する。」これを以て見ても、教師の資質の吟味を重要視した當時の教育的關心を覗ひ得るのである。

初等教育及び中等教育　初等學校の內容は共和時代と同じく讀み書き及び計算であつた。希臘語の教科書として『學習會話』[1]があり、教師又は優等生がこれを範讀し他の生徒がそれに倣つて讀んだものと思はれる。又速記も帝政時代には普く行はれ、そのために特別の「速記者」に就て學んだ。中等學校の內容は共和時代よりも遙かに廣汎になつた。タインティリアーヌスによれば、中等教師たる「文法教師」の職分は、先づ「正しく話すことの知能」と「詩の解說」とを授け、次に各種の普通學科を教へることであつた。教材として最も多く用ひられたのはホメーロスの詩で、それはすべての解釋及び批評の出發點であり、文法の基礎であり、學校生活そのものの諸方面もそれに結合して說かれた。ホメーロスに次いではウェルギリウスの作品が用ひられ、ギケローの作品も亦行はれた。補助學科として神話が教へられる事も益〻盛になり、それはやがて歷史教授の前階でもあつた。即ちストラボ[2]の言へる如く年少兒童は神話によつて好奇心・知識欲を開發せしめられ、長じては現實の物語(歷史)を學ぶのが至當とせられた

1) Colloquia Scholastica.　2) Strabo. (54 B. C.—24 A. D.)

のである。而して神話の教科書としてヒーギーヌス[1]の作と傳へられてゐる『物語本』[2]が廣く行はれ、歷史の教科書としては希臘の學者デキシッポス[3]の史書が多く用ひられた。ハドリアヌス帝の時フロールス[4]が羅馬建國よりアウグストゥスに至る迄の羅馬史を書いたが、その簡潔さと修辭の巧みさとによつて、中世期に至るまでも愛讀せられた。又東羅馬帝國のウァレンス帝の治下に於てエウトロピウス[5]が羅馬建國よりウァレンス帝に至るまでの羅馬史綱要を十卷に著述したものは最も多く使用せられた。更に史實の記憶に便するため詩の形に叙述することも行はれ、詩人アウソニウス[6]がエラガバルス帝に至るまでの歷代帝王の歷史を六脚韻の詩に詠じたのはこのためであつた。尙地理教授に於ては、第三世紀の地理學者ソリーヌス[7]の著作『事物備忘錄』[8]が最も多く用ひられた。

教授方法に關して先づ注目すべきは、教科書の普及の未だ十分ならざりし時代に於て、教師が自ら「筆記」を作り、これを生徒に諳誦せしめることである。次に直觀教授の重要性も既に知られ、神話や歷史地理の內容を繪畫に示すことが行はれた。ホメーロスの詩の教授にテオドーロス[9]の『イリアスの圖繪』[10]が用ひられ、歷史書に戰爭の圖とそれを說明する希臘文字とが並べ記されてゐたことの如きは、その例である。地理教授に地圖を用ひることも行はれ既にアグリッパ[11]が世界地圖の作製を準備し、アウグストゥスがこれを完成せしめたが、この大地

1) C. Julius Hyginus, (64 A. D.)　2) Fabularum Liber.
3) Herennius Dexippos. (210—273)　4) Florus.　5) Eutropius.
6) Ausonius. (310—390)　7) C. Julinus Solinus.
8) Collectanea Rerum Memorabilium.　9) Theodoros.
10) Tabulo Iliaca.　11) M. Vipsanius Agrippa. (63—12 B. C.)

圖に倣つて、學校用の部分的地圖が多數に作られた。羅馬帝國内の各屬領の自然及び人事を記した『旅行地圖』も行はれた。

教養階級の資格としての希臘語の重要性は帝政時代に入つて益々加はり、ディンティリアーヌスの如きは、後述の如く、羅甸語に先立つて希臘語を教授すべきことを說いた。この希臘語及び羅甸語の教科としての文法の外に音樂・幾何・算術・天文・修辭學・辨證法を加へた七科が所謂「七自由科[1]」として、高等教育の豫備課程たる中等教科に確立したのもこの時代である。

因に當時の羅甸文法書にして後世長く行はれたものは、羅馬のドナートゥス[2]の文法書[3]と、コンスタンティノープルのプリスキアーヌス[4]の文法教授書[5]とである。

高等教育　七自由科による豫備的教養を獲得せる者は進んで高等教育を受けたのであるが、將來政界に活躍せんとする青年は先づ修辭學校に學んだ。修辭學校の教授は理論的及び實際的の兩面に分れてゐた。理論的方面に於ては、修辭教師が或は教科書により或は講義筆記によつて辨論術の理論を講述した。そして講述内容は希臘並びに羅馬の有名なる詩人・歴史家・哲學者・辨論家等の作品に結合して行はれた。次に實際的方面に於ては、先づ文筆による表現を練習させ、その題材も初めは傳說・物語(例へばロームルスが狼から哺乳せられた話など)に就てそれの反駁と證明とを行はしめ、やがて偉人を讃歎し低劣なる人物を非難する論文や、人物の比較論評を試みさせた。更に多數の學生が德や不德の「共通の題目」に就て論述することが行はれ、最後に個々の具體的問題(例へば都會と田舍と何れが住みよきか、軍人と法律家と何れが好ましきか等)に關する論文が練習せられた。次に口述の演習も易より難に漸進的に課せられ、初めは或る事件に關して人を諫止し若しくは勸奬するための「說得演說」が練習させられ、更に或る事件に關する彈劾及び辨護の「論爭」が修練させられた。而して辨論術の最高の段階は「即席演說」であつた。是等各種の演說は學生に行はせると共に、教師自らも實演して模範を示したのである。

修辭學校は併しながら、一面には時代精神の墮落と共に辨論の形式のみが尊重されて内容が閑却せられたことにより、他面には功利名聲を目的として諸國を遍歴するソフィステースの辯論家の横行によつて、紀元第二三世紀頃より次第に墮落して行つた。

修辭學校の課程を修了したる者は更に哲學學校で學んだ。その教科目は論理學・辨證法・數學・物理學等を含んでゐたが、就中主要なるは倫理學であり、そしてストア學派の思想が最も優勢であつた。併し概して帝政時代の哲學には何等の獨創はなく、折衷的通俗哲學の特色を帶びてゐた。プラトーンの傳統を繼げるアカデーメイア學派も、アリストテレースの衣鉢を承けたる逍遥學派も、傳承的古典の註解傳達以外には何等の新機軸も出さなかつた。但し

1) septem artes liberales. 2) Donatus. (360) 3) Ars Grammatica. 4) Priscianns. 5) Institutio de Arte Grammatica.

哲學學校及び哲學者に對する外的條件は、歴代帝王の保護政策と有志者の好意とによつて大いに惠まれてゐた。即ち學校や講座が增設寄附されたものが多く、個人としても優遇された學者が少くなつた。

修辭學や哲學が希臘よりの輸入傳承に過ぎなかつたのに對して、法律學だけは羅馬人の天才によつて獨自の發展を遂げた。共和時代には法律學は修辭學よりも地位が低く政治や裁判に就ての有力な活躍者は辯論家であつたが、帝政時代に入つてはその位置を顚倒して法律家が辯論家の上に立ち法律學の專門的修養は今や有爲の人物の必須の資格となつて來た。ここに學としての法律學の發達が促されたのである。アウグストゥス帝の下に、アンティスティウス・ラベオ[1]は公法及び私法に關し、アティウス・カピト[2]は私法に關して、夫々權威となつてその發達に貢獻し、この兩權威はやがて羅馬に法律の二大學派を起らしめた。即ちカピトの學派は概往の法律・判例に忠實なる歴史派となり、ラベオの學派は法律の一般概念に從つて現存の法律の進歩を圖る純理派となつた。かくして法律學者は立法・司法・行政上の重要職分を以て國事に參劃することとなり、且つ彼等の間に法律の整理編纂の事、法律の教育を發揮に施す事が行はれるに至つた。ハドリアヌス帝の治下に於て、サルウィウス・ユリアヌス[3]が試みた『法令集[4]』は法律整理の一例である。法律教育は普通の自由科は勿論歴史及

1) M. Antistius Labeo. 2) C. Ateius Capito. 3) Salvius Julianus.
4) Edictum Perpetum,

び哲學の素養をも必須の前提としてその上に行はれ、その教授方法は一般向の講義と狹き範圍の學生に對する體系的教授とに分けて行はれた。一般向の講義は特に興味ある法律問題を取扱ふことを主とし、體系的教授は指定の教科書に就ての講述及び討論から成つてゐた。この場合の教科書としては、入門的講義たる『通論』、法律問題を中心にして述べられたる『問題書』、各種の法律學說を分類し系統づけたる『體系書』等があり、ガーイウス[1]の『通論』の如きは就中有名なものであつた。後に東羅馬帝國のユスティニアヌス帝が、トリボニアヌス[2]以下十六人の法學者を委員とし六年の歲月を費して完成せる羅馬法四部即ち(一)古來の法規中現に效力を有するものを集めたる法令集[3](二)大法律家の著書を拔萃せる集成[4](三)初學者のための法律通論[5](四)帝の代に新に發布せられたる新法律集[6]は實に上述の如き法律學及び法律教育勃興の成果であり、これこそは羅馬國民最大の文化的業績となつたのである。

因みに醫學は羅馬に於てはその地位極めて低く、トラレスの人テッサルス[7]が僅か半年にして醫學を修了し、程度の最も低い弟子を集めてそれを教授してゐた例を見ても、當時の醫學の學的地位を覗ふことが出來る。ガレーヌス[8]に至つて醫學は大いに進歩し整頓せられ、その影響は頗る廣かつたが、それでもなほ醫學を專門とする高等程度の學校はつひに設立せられなかつた。

1) Gaius (110—180) 2) Tribonianus. 3) Codex. 4) Pandecta.
5) Institutiones. 6) Novelles. 7) Thessalus. (54)
8) Galenus. (130—200)

帝政時代の學術の中心地は羅馬・アテーナイ・コンスタンティノープルが主であつたが、その他アフリカ・小亞細亞・歐羅巴の各地に學術の淵叢が傳播した。高等教育の學校として特に主要なる地位にあつたのは、羅馬及びアテーナイの大學であつて、各地からの學生がそこに雲集し、それ等の學生に就ては、鄕國を離れる時の手續、在學地に於ける宿所、日常の起居動作等に亘つて詳細嚴格なる規定が作られるに至つた。

要するに帝政時代の教育は、家庭教育と社會教育との頽廢の中に獨り學校教育のみが、而も知育を偏重せる內容に於て大いに發達した。これは實に崩れ行く世相の反映として、又衰へ行く國家の表徵として、歷史に繰返される事象である。かかる教育事實に對して、然らば、當時の思想家達は如何なる反省批判を向けたであらうか。これが即ち次節に述べんとする帝政時代の教育思想である。

第二節　帝政時代の教育思想

一　セネカ

生涯　ルキウス・アンナイウス・セネカ[1]は前四年頃西班牙のコルドバに知名の辯論家の子として生れた。勤きセネカは兩親に伴はれて羅馬に移り、薄弱の身體にも拘らず熱心に辯論術及び哲學

1) Lucius Annaeus Seneca.

を修め、特にストア派の哲學に強く影響せられた。長じて辯護士となり大いに聲名を博した。クラウディウス一世の治世第一年に、彼が帝の姪なるユーリアと親しくしてゐたのを、皇后メッサリナが嫉妬したため彼はコルシカに追放せられた。併し八年の後、帝の他の姪なるアグリピーナが皇后となるに及んで、セネカは再び召還せられ、長官の職に擧げられ、又皇后の先夫の子なるドミティウス(後のネロ皇帝)の師傅として優遇せられた。紀元後五四年クラディウス帝が歿してネロ帝が即位するや、セネカは帝の不德の性行を抑制することに實獻したと共に、他面また自己の地位を利用して其大なる富を致した。併しネロ帝は母アグリッピーナを殺して(この事にはセネカも加擔し且つこれを支持し是認する書翰を草して元老院に提供せしめてゐる)後益〻亂行に陷り、やがてセネカの存在を厭ひ、その富力を羨望した。彼の庭園や別邸は帝のそれを凌ぎ、彼の雄辯は帝を壓倒し、彼が帝の乘馬や歌の不器用を嘲罵したことは帝の大なる反感を誘發した。帝に親びる側近者達はつひに帝に奏めてセネカを斥けんことを圖つた。セネカは身の危險を感じ、自ら引退を乞ひ、その全財產を帝に獻ぜんことを申出た。帝は併し流石に過去の恩義に心を責められ、財產の提供を却下し、愛護と尊敬とを裝つて、セネカを引退せしめた。セネカは爾來簡素寂寥の生活を送り、病を口實として(事實また喘息を患つてゐたが)羅馬にも殆ど出ることなく、專ら研學に身を委ねた。然るに六五年のピーソの陰謀は、ネロ帝にセネカ處刑の口實を與へた。即ちこの陰謀に對するセネカの關與は頗る不明であつたにも拘らず、帝は護民官の一人を遣はして死を宣告せしめた。セネカは妻や友人達の同情の涙に包まれながら、哲人らしき從容たる靈度を以て、臂と脚との動脈を切開して、ここに七十年の生涯を自ら斷つた。

セネカはアウグスト、ス時代以後の羅馬に於ける第一の思想家・文筆家であり、その豊富なる内容と卓抜なる見識とは、所謂羅馬帝国時代[1]百二十四篇に収められてゐる。彼の教育思想も亦この中から取出し得るのである。

教育思想　セネカの根本思想は、理性による感性の支配に徳と幸福との本質を見出すストア哲学に基つてゐる。人間の理性は神性の顕現であり、神的精神の一部であり、神が人の身に宿れるものである。人はこの神への近似性の故に、地上の生活から高く向上し得べく、又この点に各人の尊厳が認められる。併し理性に対立して、人にはまた反理性的衝動としての感性が働き、この感性との争闘にこそ最大の道徳的課題が存する。而も単に感性の抑制といふが如き緩漫なる程度によつてではなく、寧ろ感性の撲滅によつてのみ、人は眞の徳と幸福とに到ることが出来る。哲学は實にこの争闘の指導者である。自己の罪過と闘はんがためには先づ罪過を知らねばならぬ。彼に依は「罪過を知るは幸福の始である」といふエピクーロスの言葉を引用して、これは實に至當の言であるとし、[2]自己の罪過に対する認識と苛責とよりして、徳への憧憬を生じ、幸福に導かるべきことを説いてゐる。而してそれをなさしめるのが哲学であつて、「哲学(といふ薬は、精神の健康に有效であると同時に又甘美なるものである。[3]」

1) Epistulae Morales. 2) Seneca, op. cit. XXVIII. 3) Seneca, op. cit L.

かかる見地はまたセネカをして人間一般に対する普遍的なる愛の教説を抱かしめた。「階級貴賤に拘らず、すべての人々を愛し、その人間性を尊敬し、その罪過を憐むべきことは、セネカの道徳論の最も尊かしき頂点であり彼が基督教的教説に由来するのであらう。」[1]

上述の根本思想はやがてセネカの教育本質観を規定してゐる。彼によれば教育は、情欲の克服によつて理性の支配を促進し道徳生活に貢献する限りに於てのみ價値を有する。而して人間は本性上悪に傾いてゐるが故に、この意味の教育は愈〻必要である。人は精神に病を以てこの世に生れ、教育者はこの病を治する醫者である。「何人に對しても善き心が悪き心に先立つて現れることはない。」而も徳は決して教へられ得ざるものではなく、「一たび吾々に善が植えられるや、それは永久の所有となる。[1]」故に教育者は、宛も病弱の身に對する醫者の如く、先づ出來るだけ優しき言葉を以て子弟の心情を治療し、忠告によつて徳に向はしめ不徳から離れしめねばならぬ。然る後に漸次に、厳格なる訓誡・叱責・懲罰に訴ふべきである。賢き懲罰は外科醫の器具の如く、吾人を益せんがために吾人を苦しめるものである。

セネカは又子弟の個性に適應せる教育方法を主張し、練習による習慣の養成を高調し、特に理論的教説よりも具體的示範を重視した。「教説による道は長く、模範による道は短く且

1) Seneca, op. cit. L.

つ有效である。」彼は尙當時の教育者が徒らに外面的非實用的なる知的教授に偏し、博學者、街學者をつくりつつあるのを慨嘆して、「吾人は生活のためではなくて學校のために學んでゐるのである。[1]」と非難し、「これより後、學校のためではなくて生活のために學ばれねばならぬ。[2]」といふことが教授の標語となつた。セネカはかく教授に於ても道德教育を終局の目的として、どの見地より教科目をも考へ、德への知見を得るための哲學と、神の攝理を知るための自然研究とを有益なる教科として推奬した。彼はまた多藝散漫を戒め、醫者を度々變へては傷は癒え難く、植物を屢移しては强壯に育て得ないと說き、更に書籍の多過ぎることも精神を害ふものとして、懷感ある少數の書籍を精讀すべきことを勸めた。最後になほ、セネカは教師に對する忘恩を强く戒めた。「彼によればすぐれたる知識、高貴なる教養を吾人に與へてくれる教師の價値は、吾人がそれに對して支拂ふ報酬よりも遙かに高價であつて、吾人は教師の骨折には報い得てもその教へる內容には報いることが出來ず、教師の勞働には報酬を支拂ひ得てもその賞歎に對しては支拂ふことが出來ない。故に吾人は教師をば、親しき友や愛する眷屬と共に、永く尊敬しなければならない。」セネカは師弟の情誼をかくも貴く美しく考へてゐたにも拘らず、曾ての門弟たりしネロ皇帝から、恩に報ゆるに仇を以てする非道の仕打を受けた。彼の教說はこの皮肉なる運命を通じて愈〻痛烈に感ぜられるのである。

1) Non vitae sed scholae discimus.
2) Non scholae sed vitae discendum.

1) Buttler, The Institutio Oratoria of Quintilian. Introduction. (The Loeb Classical Library)
2) Marcus Fabius Quintilianus. 3) De Causis Corruptae Eloquentiae.
4) Institutio Oratoria.

二　クインティリアーヌス

生涯[1]　マルクス・ファビウス・クインティリアーヌス[2]は、紀元後三五年頃西班牙のカラグリスに生れた。父は羅馬で活躍した可なり知名の修辭學者であり、クインティリアーヌスは若い頃から教育のために羅馬に送られた。彼は自分の教育が終ると故國へ歸つて修辭學を敎へたが、やがて羅馬に出て公立修辭學校教師として數年の成功を遂げ、彼の門下には小プリーニウスや、皇帝ドミティアーヌスの姪ドミティルラの二人の孫等があつた。彼はこの皇帝によつて勅章を授けられ、又「執政官相當官」の稱號を賜はつた。法廷に於て辯護士として成功した證跡も彼の著作の中に一再ならず發見せられる。二十年間の教職生活は彼に羅馬第一の修辭學教師の光榮を與へたけれども、家庭の彼は早くから不幸であつた。即ち妻は僅か十九歲の時二兒を遺して歿し、又二兒の中次男は五歲にして歿し、唯一の望をかけてゐた長男すらも十歲にして歿した。かくて晩年の彼は漸く憂悲に堪へずして公職を退き、著述に從事しつつ、紀元第一世紀の終頃に歿した。

彼の著述には『辯論術衰頹の原因[3]』『辯論教授論[4]』及び妻を歿して告發されたナイウィウス・アルビニアーヌスの辯護論がある。この中最も主要なるは『辯論教授論』である。

辯論教授論の價値とその影響　クインティリアーヌスの大著『辯論教授論』は辯論家の養成を論じたもので、彼が二十年間の體驗を二箇年餘りの述作によつて大成したものである。彼の

自覺によれば、既に希臘及び羅馬の先輩達がこの問題に就て多くの著述を遺してゐるのに、更に格別の新創なき新著を企てることは大いに躊躇したのであるが、而も友人達の勸說もだし難く、且つ又希臘羅馬の先輩は、辯論家養成の事をば、基礎的教養を積める者の上になさるべき領域として、その華やかなる上層建築のみを論究したのに對し、彼は人目を蔽かざる基礎工事が十分に築かれなければならぬとの見地から、將來の辯論家をばその幼時より論述したのである。

更にクィンティリアーヌスによれば、完全なる辯論家は同時に、善き人でなければならず、從つて單に辯論上の特殊な才能に優れてゐるだけでなく、人間として、私的生活にも、公的活動にも、あらゆる美點を有する者でなければならぬ。換言すれば從來哲學の領域として考究された倫理學上の諸德や諸々の知識は辯論家の智德として玆に論ぜらるべきであり、キケロ、が既に明示せる如く、哲學と修辭學とは理論的にも實踐的にも結合せらるべく、すぐれたる人は同時に哲人と辯論家との兩性質を兼備すべきである。

クィンティリアーヌスの辯論家養成論は、上述の見地よりして、教育過程としては幼時の基礎的陶冶より所謂辯論術の最高段階までを貫き、その內容としては當時の學藝の殆ど全領域を含めるものであつて、恰も希臘に於けるプラトーン教育論の如く、玆では羅馬に於ける最も體系的なる教育論が建設せられたのである。彼はかかる根本的立場を闡明せる「序說」に於て、同時に全體の構成を次の如くに豫示してゐる。即ち第一卷は修辭學教師の手に移される前の基礎教育を論じ、第二卷は修辭學校の基礎的課程及び辯論術の本質を取扱ふ。第三卷より第七卷までは題材の發見と構想とを問題とし、第八卷より第十一卷までは演示法その他のものを述べ、その中に記憶法と表現法とを含ませる。最後に第十二卷は完全なる辯論家の具ふべき諸條件を總括する。

右の十二卷中第二卷以後の論述は當時の辯論術そのものの特殊條件に制約せられて必ずしも永遠的意義を有し得ないのであるが、第一卷の基礎的教育論は、普く教育論一般の諸契機を含み、今日なほ傾聽に値する內容である。故に本書に於ては主としてこの第一卷の要旨を敍述したいと思ふ。

教育教育　先づ父はその子供に就て教育の可能性を確信し前途の希望を抱かねばならぬ。何よりも先づ子供の乳母が品性のすぐれた人で正雅な言葉を話すことが必要である。子供が最初に耳にし最初に模倣せんとするのは乳母の言葉であり、而も最初の印象は最も深刻で、わけても强き印象ほど執拗に殘る。故に後年忘れねばならないやうな言葉を嬰兒の中に慣れさせてはならぬ。

兩親に關して言へば、單に父だけでなく母もまた高き教養を有することが望ましい。又、不幸にして兩親が高き教養を受け得なかつたとしても、その故に子供の教育を怠るべきではなく、却て益々注意して教育すべきである。

子供の交友に就ても乳母と同樣なことが要求せられ、更に童僕は十分の教育を受けた者たることを要し、若し然らずんば、少くとも自らの無學を自覺せる者たることを要する。乳母、朋友及び童僕が若し上述の如き資格を具へてゐない場合には、少くとも話し方の知識ある人が子供に附いてゐて、乳母、朋友、童僕等が子供の面前で誤つた言葉を使つたならば直ちにそれを訂正し子供の癖にならぬやうにしなければならぬ。

家庭に於ける言語教授は羅甸語よりも希臘語を先に始むべきである。蓋し羅甸語は日常生活の中に自ら修得せられ且つ又羅甸語は希臘語に由來するからである。併し希臘語を始めてから間もなく羅甸語教授をも始め、やがて兩語平行して教へられるのが望ましい。

子供は如何なる時期にも教育から離されて置いてはならぬ。道德教育の可能なる幼兒に言語教授の不可能な筈はなく、言語修得の基礎條件たる記憶力は幼時に於て特に強いのであるから出來るだけ早く言語教授を始めた方がよい。但し幼兒に對して强制的方法は禁物である。寧ろ興味本位で遊戯的に學ばしめねばならぬ。時には朋友との間に羨望の心や競爭心を起させて刺戟し、又褒賞を與へて激勵することが必要である。

學校教育の長所　乳母の手から離れて益々修學に熱中する時期になると、子供を家庭で私的に教育すべきか、學校に送つて公の教師に託すべきかが問題となる。クィンティリアーヌスは學校教育の長所を主張し、學校の存在理由を力說してゐる。彼によれば學校教育に反對する人々の論據は第一に道德的に最も危險な時期にある少年を大勢の中に出すことは品性陶冶の上に望ましくないこと、第二に學校に於ては教師の注意が特定の生徒に偏して普く行屆き得ないといふことに存する。彼はこれに對して、第一に道德的弊害は家庭教育にも存することを主張して、父母や童僕の非教育的態度を指摘し、第二に學校教育と雖も、良教師がその力に適するだけの人數を收容しさへすれば個別的注意も行亙り得ることを述べ、學校一般を拒絶することと、優良なる學校を選擇することを混同してはならぬと說いてゐる。かく世論を反駁して、學校教育を推奬し、將來辯論家たるべき者は幼時より共同生活に慣れる必要があり、學校生活は生徒をして自らの力を知らしめ、永く變らぬ友情を培ひ、そこでは學友の學ぶ所を自らも學ぶことが出來、學友の受ける賞罰によつて自らも教へられ、競爭心が(それ自身では惡德であるとしても)美德のために利用せられ、特に兒童は教師や童僕や父母の教へよりも學友の刺戟に動かされるものであることを指摘してゐる。かくの如

く學校教育を支持し基礎づけてゐる所に、吾々は當代第一の公立學校教師としてのクィンティリアーヌスの面目を想望すると共に、家庭と社會とが教育的職能を失墜して學校教育のみが獨り繁榮した當時の大勢を覗ふことが出來る。

兒童の個性とその取扱方　クィンティリアーヌスは教師の第一の任務として、兒童各自の特殊な性質能力を知り、それに適應せる教育を行ふべきことを力說してゐる。彼によれば兒童の優劣を知るべき主要徵表は記憶力と模倣力とであるが、その他兒童の特性は或は強緩し、或は剛情であり、或は恐怖によつて改善される者も姿態する者もあり、或は絲々の永續的努力を可とする者も急激の集中的努力を可とする者もある。これ等の傾向を熟知して、叱責・賞讃等を適宜に行ひ、兒童の名譽心を利用するなどして、巧みに教育せねばならぬ。併しながら兒童は休養によつて氣力を新鮮ならしめることが必要である。又遊戲は彼等の本性であり、且つ彼等の性行を如實に發露し、品性陶冶にも有效であるから大いに教育的價値がある。但し無制限の保養は怠惰の習慣をつけるが故に慎まねばならぬ。

最後にクィンティリアーヌスによれば稼穡の罰は有害無益である。第一にそれは餘りに酷い罰で叙說にのみ適はしいものである。第二に叱責のみでは無效なほど低劣な者に鞭を加へても、それは益、鞭に堪へる剛情を養ふだけである。第三に教師が完全な訓育者であるならば、かかる罰は絶對に必要がない筈である。

かくの如き教說の中に吾々は、古代教育者に稀なる兒童心理への洞察とその重要觀とを讀すると共に、古の羅馬の嚴格なる訓育は既に忘れられて、新希臘時代の自由主義がクィンティリアーヌスの教育方針の中にも取容れられてゐるのを感ずるのである。

文法教師の資格と辯論術の基礎教科　修辭學の基礎課程としての文學的教養を擔當する教師は所謂文法教師であるが、クィンティリアーヌスはこの教師の具ふべき資格として、話す力と詩を解釋する力、作文の能力、朗讀法、批評力を擧げてゐる。更に詩の外に、各方面の文藝作品を讀んで、內容と語彙とを共に豐富にすべきである。その上音樂の素養を積んで韻律のことを會得し、天文學を修め、哲學を學んで、それ等に立脚せる諸家の作品を理解し得ることが、教師として必須の資格である。最後に雄辯そのものが辯論教師に必要なるは言ふ迄もない。クィンティリアーヌスはその見地より、文法教師が文法上の事項に精通せねばならぬとて、希臘語羅甸語の發音、綴字、文法等に就て詳細なる例を擧示してゐる。

文法教師の資格として擧げられる諸點はやがてその教師によつて教へらるべき辯論基礎教科の內容を示すものである。故にクィンティリアーヌスは辯論修養の要件として、正確なる言語、優雅なる言語、發音法、外國語、古語、新語、語源、典據、慣用語、綴字法、朗讀法等に就て論じてゐ

る。又讀物としては單に辯論の見地だけでなく、道德的見地よりも選擇標準を立て、ホメーロス、ウェルギリウス等を初め、悲劇・抒情詩等の作家を擧げ、他面に於て哀歌殊に色情的悲歌の類を避くべきことを說いてゐる。そして作文の材料としてもアイソポスの物語を改作することを奬めてゐる。

右の文學的修養の外に、希臘人が「普通敎科」として擧げた諸敎科も亦辯論術の基礎陶冶のために推奬せられる。その主なるものは第一に音樂であつて、それによつて辯論に必要なる言葉の配置・聲の抑揚調律、表情身振等を學ぶことが出來る。但し情弱淫猥な音樂は鼓でも斥けられて、勇渾莊重なものが奬められる。第二に幾何學はそれによつて知力を錬磨し論證の圖式的展開を敎へる點に於て辯論術の基礎となる。第三に天文學も、宇宙の秩序・宿命を知り、又天體の不思議を解明して恐怖を除くこと等のために、辯論家に必要な基礎的修養である。

最後にクィンティリアーヌスは舞臺俳優からも聲色・態度・身振等の學ぶべき點の多いことを說き、又この限りに於て、體育の價値をも認めた。但し彼はかくして身振・態度を學ぶことをば、兒童期以上には亙らぬやうに、且つ又兒童期と雖もこの事に餘りに多くの時間を費さぬやうにと附言してゐる。

多くの敎科の學習可能性　以上の如く多くの必須敎科を列擧したことに就て、世上にはこれは、兒童の精神を混亂疲勞せしめ、時間數も不足するとて反對する者がある。併しクィンティリアーヌスによれば、人間は同時に多くの事をなし得べき敏活さと融通性とを有つてゐる。例へば琴を彈唱する人は歌曲を諳誦しつつ、調子や抑揚にも注意を拂ひ、右手を以て特定の弦を彈き左手を以て他の弦を抑へたり弛めたりし、而も足踏を以て時間を測つてゐるのである。或は辯論家が突然辯護に立つた時の如き、一事を語りつつある間に、次の事を考へ、而も言葉の選擇・調律・身振その他百般のことに心身を働かせてゐるのではないか。加之多くの仕事も交替して行へば氣分を新鮮にし活力を回復する。故に敎科と敎師とを適宜に交替して學習させれば却て多くの事を有効に學ばせ得るのである。幼少時代ほど疲勞に堪へ得る時期はなく、又兒童は實に陶冶性・模倣性・受容性に富み短期間に多くの事を容易に學び得るのである。

史的地位　以上はクィンティリアーヌスの『辯論敎授論』第一卷の要旨である。彼は第二卷以後に於て修辭學敎師固有の領域に入り、詳細なる論議を展開させてゐるのであるが、彼の敎育論の價値は既に上述の一般的基礎的敎育論だけでも十分に確保せられてゐる。蓋し辯論術そのものに就ては希臘以來多くの研究が行はれて來たから、クィンティリアーヌスの浩瀚な

1) Perrin, Plutarch's Lives, Introduction. (The Loeb Classical Library.)
2) πλούταρχος

る著述は獨創よりも寧ろ獨裁と集成とに特色を有するものであり、又辯論家養成の事に關しても近くキケロが卓越せる論述を遺してゐるが故に、クインティリアーヌスの功績は、既述の如く、これを教育の全體系を通じての考察に擴充し、戰中その基礎的段階に於て周到なる檢討を行つた點に存するからである。そこでは實に二十年間の教育體驗と兒童の心理や家庭、社會の實情に關する鋭く深き洞察とが結合してゐる。而も記憶と模倣とを基礎とする多數の教科の注入的教授、學校教育の支持と讃美等、當時の羅馬教育の主知主義的、學校中心的大勢をよく反映してゐると思はれる。中世の僧庵學校や本山學校の教科目及び教授法には後の示せる原則を踏襲せるものが多く、又近世初期の人文主義教育も彼の影響を多分に受けてゐた。遂らく言語教授の領域に限つても、彼の所說には今日なほ傾聽すべき契機が少くないであらう。

三　プルータルコス

生涯[1]　プルータルコス[2]は紀元後五〇年頃ボイオティア州のカイローネイア市の名門の家に生れた。彼はティモクセナといふ賢婦人を妻とし男一女を擧げたが、その中二男一女を早生せしめ、早く家を去つてアテーナイに遊學した。彼が愛妻を慰めるために送つた書翰は、妻の貞淑謙讓なる面目と彼の溫情とをよく反映し、後年モンテーニュはこれを類似の境遇にある自分の妻に送つたと言はれ

1) Βίοι παράλληλοι.　2) Ἠθικά
3) Westawey, The Educational Theory of Plutarch.

てゐる。アテーナイに出たプルータルコスは約二箇年をその地の大學に過し、哲學の外に修辭學、數學、醫學等をも修めたと思はれる。彼の師は埃及出身の追懷學派の哲人アンモーニオスであり、その師弟關係は長く美しき友情として續いた。修學を了へた彼は故郷カイローネイアに歸り、高官に就き、又その著作によつて名聲を博した。彼は又屢〻旅行し、羅馬にも三回位は行つたやうである。それは一面は政治的使節としてであつたが、他面には世界の都に於て學術を講じ且つ『英雄傳』の資料を蒐集せんとする動機にも基いてゐた。彼は羅甸語を學ばなかつたと告白してゐるが、全然これを知らなかつたとは思はれない。羅馬に於ける彼は公の學校は開かなかつたがその講筵が大いに成功し、そこで羅馬の知名の人士と親交を得た。（トラヤヌス帝の教師となつたとの說もあるがそれは疑はしい。）彼の旅行は伊太利・埃及・小亞細亞・希臘の各地に試みられ、特にデルフォイに於ては重要な神職に就いたこともあつた。その殘したのは紀元後一二〇年頃であつたらうと思はれる。

プルータルコスの著作として最も有名なるは所謂『英雄傳』[1]である。それは希臘及び羅馬の偉人四十六人を選び、希臘側と羅馬側とから各一人を取つて二人づつの組を作り、比較評論的にその傳記を書いたものである。歷史的記錄といふよりも寧ろ倫理的教訓書としての面目がそこには強くもこれは後の誹謗の原稿を他の人が整理したものであり、その意味に於て僞作といふ通說が承認せらるべきであるとしても、彼の後に於ける思想の特色を忠實に表現せるものとして、重要文獻たる價値を失はない。

倫理學論[2]　プルータルコスの教育思想の根柢は、第一に哲學と神學との結合せるものにより

り、第二に心理學によつて支へられてゐる。先づ彼に於ては哲學の究極は神學であり、兩者は不可分に結合してゐた。而してこの意味の根本思想は彼が最も多く傳承せるプラトーン思想を中心としてピタゴラス派やアリストテレースやストア派の哲學並びに神話や世俗的信仰等を融合せるものである。彼は一神教的人格的神觀に立ち、神はその創れる世界に就て合理的に配慮する理性、萬物を美しく秩序づける意志であり、神はそれ故にあらゆる善の原因であると考へた。この善の原理に對立させて彼はまた惡の原理が世界に存し、それが自然界にも人心の中にも惡を生ぜしめるとした。（この見解はプラトーンが『法律』篇に述べた世俗的信仰を繼承せるものであらう。）この兩原理の對立に於て併し彼は神の善が優位なるものと考へ、それ故に人は結局德と敬虔とを顯現し得るものとした。この教說は後述の心理說との聯關に於て一層具體的に展開する。そして教育の仕事は實にこの超人間的なる神の力（終局の善の顯現）に支へられ、その永遠の意圖に參畫してゐるのである。

プルータルコスはまたプラトーンを承けて神と人間との中間者にダイモーンを立て、それは神意を人間に解し傳へる作用と考へた。自らデルプヽイの神官となつた彼としてこの教說を抱いたことも亦當然と言はねばならぬ。

彼は上の如き根本思想を持して普く諸地方の信仰を眺め、他の諸國民の信仰も本來同一の普遍的眞理を夫々地方的形態に現したものに過ぎないと考へ、この點に於て例へば埃及の信仰も希臘の宗教と調和し且つそれに寄與する所があると考へてゐた。その廣汎なる旅行と博學多識と本來の穩健なる態度と折衷的傾向とが、彼をしてかかる結論に到達せしめたことも容易に肯かれる所である。

上の哲學的宗教的思想に關聯しつつ、彼の教育思想に一層直接的なる基礎を與へるものはその心理說である。彼はプラトーンの所說を承けて、精神をば理性と情欲との二方面より、（この情欲が更に氣概と欲望とより）成るとした。理性は神性に連なり、情欲は肉體に根ざす。而して德と幸福とは、情欲を根絶せる、無情欲に存するのではなくて、情欲を理性によつて統制せる、よき情欲に存する。更に言へば、理性は外的實在の科學的哲學的探求に向へる理論理性と人間の情欲の統制に向へる實踐理性卽ち思慮とに分れるのであるが、この實踐理性が情欲の過度を制して中庸を得しめる所に、よき情欲としての德が成立するのである。情欲が理性に統制せられて習慣となる所に人の道德的發展は存するのであるが、この習慣化は不斷の奮鬪過程によつて行はれ、德への精進を怠ることは直ちに惡への退轉である。而して若き時は肉體的精力が旺盛なるため肉體に根ざせる情欲が優つてゐるから、教育を最も必要とする時期である。老年に到るに從ひ理性の支配が優勢となるけれども、それはな

ぼ決して完結するものではないから、教育は生涯を通じて重要性を失はない。但し教育は被教育者をして單なる受動的地位に立たしめることなく、出來る丈け自發的に活動せしめ、結局は全き自律の人たらしむべきである。「よき教師はよき醫師の如く自らを不用ならしめることによつて、その仕事の效果を實證するのである。」

さて上述の如き哲學・神學・心理學及び教育の根本思想に立脚してプルータルコスの教育思想そのものを更に立入つて展開するに當り、吾々は第一に身體の訓練、第二に情欲の訓練、第三に實踐理性の訓練、第四に實踐理性より理論理性への轉移、第五に理論理性の訓練といふ順序で彼の教育思想を體系的に叙述したいと思ふ。

身體の訓練　プルータルコスの體育論は、前述の根本思想に於ける中庸の態に基いて、何よりも先づ過度の飲食の警戒に出發してゐる。彼はソークラテースの言葉として傳へられた信條に從つて、飢えざれば食せず渴せざれば飲まざることを奬めてゐる。そして又ティモテオスがプラトーンと共に饗宴に列した翌日に「プラトーンと食事を共にした人々は決して翌日それを後悔することがない」と言つたその言葉を常に念頭に置くべきことを說いてゐる。彼はまた夢によつて身體の內的異常を知るべきこと、常に病氣に就ての知識を得るやうに心掛くべきこと、談話や朗讀は力めて高聲に すべきこと、肉食を成る可く避け、酒には適當の水を混ずべきこと等をも勸めてゐる。

プルータルコスによれば、健康は有益なる仕事への勤勉と睡眠や樂奏の適度なる休養とによつて得られる。學者は研究に熱中して身體の注意を怠り勝であるが、かくてはつひに精神までも病體と共に衰ふ外はないから、プラトーンの忠告の如く、心身を共に修練し、健康なる身體こそ活潑なる精神の基底であることを忘れぬやうにすべきである。この心身相關の教說は、ユウェナーリス[1]の「望ましきものは健全なる身體に於ける健全なる精神[2]」といふ格言によつて代表せられてゐた羅馬人一般の見解を表現してゐるだけでなく、心身兩面の調和に就の哲人の苦心的要求を求めた希臘人的見解に基いてゐるのである。以上はプルータルコスの衛生論であるが、彼は體育技に就ては僅かに言及してゐるに過ぎない。卽ち拳闘・角力・定の價値を認め、スパルタ人のこの點に於ける優越を讚してゐる。但し彼は職業的競技が一時的に異常の體力を示しても全體としては有害であり、精神的には生涯を昏迷夢死せしめることを論じて、プラトーンと共にこれを排してゐる。

性情の訓練　プルータルコスは社交的性格の人であり、人間性情の調和を能く敏感に感知し、性情の訓練に就て多くの適切なる論策を遺してゐる。その第一は「怒の抑制」である。卽ち「怒」の有害なるを述べ、それが習慣となり易きことを警告して、發現の初期に於て理性によつてこれを防ぐべき事を奬めてゐる。そして顰や顏色や動作に現すことによつて怒は益々昂ずるが故に、勉めて沈默し、若し耐へ切れぬ場合にはその場を去り又は身を隱せと敎へてゐる。彼によれば怒を言動に現はすのは婦女子や老人や病人の常であつて立派な男子のなすべき事ではない。怒を統制する修練は奴隸を不當に虐待せぬ修養によつて得られる。又餘り高慢なもの(失つて直立たしくなる程のものゝ)を所有せぬこと、その修する人々を餘り高く見積らぬこと(それが低劣なるとき怒を生じ易いから)等は怒を防止するに大切な心得である。怒に次で有害な性情は、他人の缺點の穿鑿癖

1) Juvenalis. (60—130)
2) Optandum est, ut sit mens sana in corpore sano.

發を好む所の「好奇心」である。若し缺陷の補發が愉快であるならば何よりも先づ自己に向つてこれを行へ。然るに人々は自己の缺點を放任して好んで他人の私的暗黒面を知りたがるのである。かかる好奇心をば轉向させて有益なる研究、例へば自然科學や歴史に注ぐがよい。それから又他人が自分に關して何を言ふかに就ても好奇心を働かせてはならぬ。第三に彼は「臆病」をも亦謹慎の過度なるものとして警めてゐる。心ならずも人に同意したり、保證に立つたり、不適當な人を家庭教師に雇つたりするのは皆臆病の故である。人々はこれが曾て己れに惹起した損害を想起しつつ、やはり初期の中にこの缺點を矯正しなければならぬ。第四に「饒舌」に關しても彼は多くの史的事例を擧げてその弊害を示し、そして理性の批判を先づこれに加へ、然る後沈默寡言を修練すべきことを勸めてゐる。「語つて後悔したことは屢々あるが、默つてゐて後悔したことは決してない」といふシモーニデスの言葉を常に想ひ起せとは彼の教である。第五に「富の欲望」に就ても彼はそれが働くことなき欲望であることを具體的に說明し、その滿足が本來他人に對して相對的に得られる種類のものであつて、哲學や科學の研究が齎らす所の孤獨にしてなほ得らるべき滿足に比して低劣であることを述べてゐる。かくして最後に「精神の平靜」を論ずることによつて彼の性情調練論は結括せられる。即ち理性が情欲を統御することによつて、人生の最も幸福なる狀態と眞の快樂とが得らるべきことを彼は力說してゐるのである。そして理性は情欲の過度を制して中庸を得しめる所にその使命を有する。「何事に於ても度を過す勿れ」といふデルフォイの神の教こそ性情調練の根本原則である。

實踐理性の調練　身體の調練と性情の調練とに次で、理性の調練が問題となるのであるが、その中でも先づ自己の生活態度行狀そのものを統制する所の實踐理性に就て考察せられる。そして實踐理性の調練に資すべき各種の教科に立入る前に、吾々はプルタルコスから、一般に子弟が學校に於て教師より教を受ける時の態度に關する注意を聽くことが出來る。彼によれば聽覺は他の諸感覺に比して一層理性に關係が深く、德に到るの門戸である。教說を聽いたことのない人は耕されぬ野であつて雜草の茂延に委ねる外はない。語ることにもまして大切なことは聽くことの修養である。教室に入つた子弟は講義最中に心を亂したり中坐したりすることなく、假令質疑なる講義でも靜り忍心を舒めて聽かねばならぬ。疑問があれば、終つてから適度に質すがよい。講義の揚足を取ることは多くは虛榮や野心や嫉妬に因るものであつて、かかる性情を以てしては理性に領聽することは不可能である。講義に對する滿足と不滿足との原因を深く考究して自らを警め育てよ。破壞的批評はいつでも建設的批評よりも容易である。又聽講者の外面的態度擧止も講義の完了に對して大いに責任がある。謙正な委勢を取り講演者を注視し、自己の退屈さや先入見を披らすやうな表情を慎み、講席との私語を避けねばならぬ。子弟は講義の當初の筆帳に詳細なることとなく、よく質しよく考へて、自ら進むことを努むべきである。教へられたることを骨子基底として、その上に自ら細部を補ひ飾めつつ、それを發展せしめ完成せしめねばならぬ。かくの如きことが凡そ聽講者の心得である。要するによく聽きよく受けて而して自らこれを仕上げるのが學習の要諦であり、それが理性の調練の先行條件である。理性はかかる態度によつて多くの材料を收得し、それに働きかけることによつて善を實現して行く。故に「善く聽くことは善く生きることの初めである。」

上の如き一般的注意を前提として、プルータルコスは青少年子弟が文學を如何に學ぶべきかに就て論じてゐる。彼は自ら希臘の大詩人達の作品を著く而も熱烈に研究し、ホメーロス、ヘーレオドス、トキュディデース等の作品に關しては、內容的にも形式的にも驚歎なる論評を行つてゐる。併し彼は結局は道德的見地からのみ文學を讃め、そこに生活への指針を求めんとしたものであつて、古の希臘人の誇るべき特徵たりし文學そのものの藝術的評價は今や彼に於ては、そして又彼の時代の人々に於ては、見ることが出來ないのである。

實證理性より理論理性への轉移　實證理性の訓練のための教科から純乎たる理論理性の訓練の教科に移る途中に、プルータルコスは、自然科學と音樂と數學及び天文學を置いてゐる。彼は既にアリストクレースによつて示された歸納的研究法を繼承し、又大プリニウス[1]の『自然研究[2]』によつて代表せられた當代の自然研究熱に悉もくは影響せられて、自ら該博なる自然科學的知識を修得した。尤も大プリニウスがヴェスウィウス火山の爆發について研究中その犧牲となつて斃れたやうな實地踏査的研究はプルータルコスの試みなかつた所であるが、それにも拘らず古來の學者の研究を博く參考し、科學者的批評眼を以てそれ等を集成した功績は大いに賞讃せられねばならぬ。先人の學說の比較對立に於て長はしきものに際會し、去就を決し難き時には、輕率にその何れかに加擔するよりも寧ろ「判斷中止」を行ふべきことを勸めたことの如きは、勿論懷疑派の影響ではあるが、同時に科學者的操守として尊敬に値する態度であもう。教科課程に於ける自然科學の地位は、プルータルコスによれば、それが哲學(後に於ては同時に神學)の基礎たる點に存する。宇宙・自然に關する知識なしには、神とか運命とか循理とかの哲學的・神學的原理を理解することが出來ないからである。

1) C. Plinius Secundus. (23—79)　2) Historia Naturalis.

音樂に關するプルータルコスの見解は、古代希臘人特にプラトーンの思想を承け、且つ當代の羅馬の音樂の衰害に對する警告を含んでゐる。卽ち彼は當代の音樂が宴會や劇場にのみ用ひられ、徒らに煽情的機能のみを發揮させられてゐるのを不當とし、古代希臘人がそれを神々の祭祀と少青年の教育とに用ひた場合の健全なる意義を復活せしめんことを思念した。換言すれば彼に於ては、音樂は何よりも先づ道德的機能の故に尊重せられ、人々の情歡を統制して調和と節度とを齎らすために價値ありとせられ、又かかる使命を果すべき歌曲のみが是認せられたのである。そして又音樂に於ける調和は同時に全宇宙の一例へば天體に見るが如き調和であつて、ここにも音樂より神の循理に通ずる意があり、音樂が哲學・神學への前階として占める地位も肯かれるのである。但しプラトーンに於けるが如き人と人との調和、從つて國家の存立向上に對する音樂の使命は、プルータルコスの氣付かざりし點であり、そこに吾々は彼の思想の個人主義的基調の一表徵を見るのである。

音樂と密接に結合してゐるものは數學と天文學とである。プルータルコスはこの數學及び天文學に關しても、一面はピュタゴラス派の神話的思想を繼承し、他面にはプラトーンに於けるこれ等の教育的意義を十分に重要視した。卽ち彼にあつても亦、數學の示す數關係の法則と秩序と調和とは、そのまま音樂に於けるそれであり、又天體の運行に於けるそれであつて、それが人々の精神に節度を與へ、思索を修練し、同時に哲學への直接の基底となり前階となるのである。

理論理性の訓練　教科課程の最高に位するものは純粹に理論的・觀照的なる教科としての哲學であり、同時にそれは人を神に近ならしめる修練としての神學である。プルータルコスはこの點に

關しても頗るプラトーン的であつて、假令プラトーンの如く人の生涯を「死の修練」とし死によつてのみ初めて完全に神と合一し得るときまでは說かなかつたにしても、理性が肉體やそれに根ざす情欲から解放されて、純粹に觀照的理性となることによつてのみ神に接し得ると說いた。

史的地位　以上に吾々はプルータルコスの教育思想をば、從來の教育史家が取扱つた程度よりも一段の强い關心を以て論究した。想ふにそれは古代教育史の最後を充たすに適はしい試みであらう。彼こそは希臘の人でありながら、同時に羅馬大帝國の民であり、その廣汎なる教養と教說には希臘哲學の基調の上に羅馬的色彩が加味せられて居り、その教育說も從つて希臘的なるものの羅馬化を最もよく表現し、この點に於て彼は希臘羅馬の內面的融合を特色とする古代末期の教育思想を典型的に代表してゐるのである。彼は就中プラトーンを繼承する所が多かつたけれども、併し例へば、哲學を最高教科とするその教育論は、プラトーンの如く理想國家の支配者としての哲人よりも寧ろ自己一身の統制と安慰とを求める哲人を描いてゐる點に於て個人主義的色彩を帶び、又藝術的教養の地位と意義とを考へるに當つて、餘りに狹隘なる道德主義に陷つてゐる。そしてこれ等の特色こそ希臘末期の世界主義時代の思想界の大勢であり、且つそのまま羅馬末期の思想界の基調であつて、プルータルコスも亦この時代色を脫し得なかつたのである。

要するにプルータルコスは新しき時代に先驅する豫言者ではなくて、舊き時代を繼承し折衷し總結せしめる類型の人であつた。吾々は彼の浩瀚なる『英雄傳』と多方面なる『倫理書』に於て、希臘及び羅馬の偉大なる、人々と思想とが集成せられてゐるのを見る。それは實にそこから振返つて古代を眺めるために極めて廣く便利な足場ではあるが、來るべき中世を照す光は全くそれとは別途の方向に求めねばならないのである。

結語　羅馬教育の全體的特質

羅馬の教育が希臘の教育と共に異教文化の基調に立ち、その限りに於て基督教の教育と根本的に對立してゐることは、既に希臘教育の全體的特質を述べるに當つて言及した。この共通の異教的地盤に立ちながらも、なほ羅馬教育を希臘教育から區別する全體的特質は、何よりも羅馬國民の大國民的風格であり、そしてこの風格を支へてゐる彼等の生活及び思想の特徵は實踐主義・常識主義である。ティベリス河畔の小邑から歐羅巴・亞細亞・亞弗利加に跨る大帝國にまで發展した古今無比の政治的偉業は、曾て希臘民族の拔群の素質の中になほ缺如してゐた宏大なる包容性と統御力との成果であつて、この性格・實力こそは所謂大國民的風格に外ならない。

希臘民族が群小都市國家に執着して狹隘なる地盤に覇權を爭ひ、平時にはそのロマンチックな眼光を高らかに馳せて閑暇を純眞なる知識愛や藝術的修飾に過してゐた間に、羅馬人は不斷に脚下を凝視して歩一歩現實の足場を世界的に擴大し、つひにその目的を達してやがて精神的教養を先進希臘民族に仰ぐに當つても、そこには甘美なロマンティシズムの色彩は甚だ稀薄であつた。希臘の豐富なる學藝を移入し、特に未曾有の殷盛を示せる學校教育の課程中にそれを組織化した羅馬人が、それにも拘らず飽迄も實踐的要求を貫いて、克己自制の道德哲學や政界雄飛の辯論術に最大の關心を寄せ、他面また希臘民族に見られなかつた法律學集成の偉業を果したことの如きは、何れも羅馬國民の性格を表示するものであり、その場合に羅馬思想家の說いた所は、如何にも經驗世故に裏付けられた堅牢な常識である。教育思想として述べられた所も、曾てのソークラテース的科學性を知る吾々に取つては、ストチレース的科學性を知る吾々に取つては、餘りにも凡庸にして日常的な、而も何等非難反駁の餘地なき健全至當の教說である。

唯かかる堅牢の思想が國民大衆に共有せられた期間にのみ羅馬勃興の歷史があり、それが少數の思想家によつて力說せられた時は既に羅馬國風は衰敗墮落の一路を辿つてゐた。ここでも思想は最早朽ち倒れる大木に對して何等の支柱ともなり得なかつた。「一日にして成らざりし羅馬」が常に人生に於ける堅忍精進の必要を敎へると共に、羅馬の榮華と、羅馬の衰亡とはまた永く人の世の哀なさとを象徵する。而もこの榮枯盛衰の感懷そのものが既に甚だ凡庸であり世俗的である。この凡俗を超えて、神の國の永遠の榮えに人の靈性を導くものは實ふ迄もなく希臘羅馬的なる古代教育と端的に對立する所の基督教的中世期の教育である。基督教の興起は古代に屬し、羅馬の歷史は基督教初期の發展を含むのであるが、その偉大なる實力と教育的成果とは中世期に見出されるが故に、吾々は基督教に關する論述のすべてを次篇の中世教育史に讓らうと思ふ。

第三篇　中世教育史

序說　中世教育史の地位と時代區分

一　中世期の文化史的並びに教育史的地位

中世の基督教的方面　中世文化の根幹は基督教である。基督教から生み出された諸々の文化形態は言ふまでもなく、基督教とは別に、乃至はそれに對抗して起つた文化も、多かれ少かれ基督教の影響を受け、その限りに於て中世的なる特色を負はされてゐる。而して基督教文化は希臘羅馬の異教文化と相對して西洋文化の二大潮流の一つであるが故に、吾々は古代より中世に移るとともによつて、西洋文化の全く新しき一契機を迎へる。基督教によつて西洋人の生活理想と生活樣式とは根本的に影響せられ、後に古代精神が復興したり、近世の新文化が加はつたりしても、彼等西洋人は、或は思想感情の根柢に於て、或は少くとも生活擧止の外形に於て、到底基督教の制約を離脫し得ざる狀態に立到つた。この至大なる影響を西洋文化の中に根强く植付けたのが卽ち基督教の教育的職能であつて、中世教育史はそれ故に何よりも先づ基督教の教化史である。

中世の世俗的方面　第二に併し中世期の人々は、基督教の影響下にありながら、世俗的教養をも要求し獲得して、やがての近世文化及び近世教育に對する前衛的職能を果した。卽ち素朴新鮮にして强勁たる精力に充ちる新興ゲルマン民族は歐洲の天地を席卷し、基督教によつて教化洗煉せられつつも、彼等自らの要求による新文化を着々建設して行つた。中世に於ける世俗的教育の發達はこのゲルマン民族向上史であつて、そこには近代教育形態に直接の前身となれる幾多の理想と內容と施設方法とが生み出されたのである。

かくして吾々は中世教育史をば、一面基督教教化史の追究によつて本來の中世的なる面目として取扱ふと共に、他面世俗的教育の發達史を辿つて近世への前階として取扱はねばならぬ。基督教的なるものと近世的なるものとの相卽不離の段階―そこに中世の文化並びに教育の史的地位が存するのである。

二　中世教育史の時代區分と主要問題

基督教教育　上述の事情により吾々の中世教育史は、基督教的要素と世俗的要素とを常に相關聯せしめながらも、取扱の便宜上その前半(第一世紀より十一世紀の終頃まで)をば第一

期として主として基督教の教化史を述べ、その後半（時期は重なるが九世紀頃より十四世紀頃まで）を第二期として主として世俗的教育の發達史を述べる。而して基督教教化史の前提として又中世期全體の基調として、吾々は先づ原始基督教が本來如何なる陶冶理想を有し、基督その人が如何なる教育者的面目を具へてゐたかを究めねばならぬ。この問題は年代的には古代に屬し、羅馬帝國の勢力下に行はれたものであるが、吾々はこれを中世的面目の內面的發端として、中世教育史劈頭の主要問題とする。かかる出發點に次いで基督教の教育制度の發達の中に、問答學校、僧庵學校、本山學校等が教育事實として取上げられ、更に教父哲學及びスコラ哲學が特にその教育的與機に着眼せられることにより教育史の領域として取扱はれる。

世俗的教育　第二に世俗的教育の主要問題としては、先づ新興ゲルマン民族の教化策として、カール大帝を中心とする教育事業を叙し、次に封建制度と共に整頓した騎士の教育を論じ、更に上流知識階級の研學機關としての大學の勃興並びに都市の發達に伴ふ庶民階級の普通教育制度の創設を述べねばならぬ。勿論これ等の諸項はその生起興隆の年代に於て互に重複し、その事柄自身の間に密接なる關係を有するのであるが、取扱の便宜上各項に分つて檢討するのである。

第一章　基督教の教育

第一節　原始基督教と教育

一　イエスと原始基督教

原始基督教　ここに原始基督教とは、イエスとその直弟子たる使徒達並びに使徒達の教を受けて第二代指導者となつた人々の間に行はれた信仰を意味する。カトリック教會の成立と教父哲學の組織とによつて、基督教は第二期の發達段階に入るのであるが、それに至るまでの第一期が即ち原始基督教であり、年代的にはイエスの活動開始（紀元二十五六年頃）から第二世紀の初頃（紀元百三四十年頃）までを劃する。使徒達とその教を受けた指導者達とが信じ說き行つた所は、結局イエスから受けた印象と感激と教訓とに基くのであるから、原始基督教の核心はイエスその人にあらねばならぬ。イエスが如何なる人であり、何を語り、何を爲したのであるか。それを弟子達が、如何に感得し、如何に解釋し、如何に擴充し宣傳して行つたか。これを見ることが原始基督教の研究である。

イエス研究の史料　イエス研究の史料として第一に挙げらるべきは言ふまでもなく『新約聖書』である。現行新約聖書二十七卷は、第四世紀末頃に(カルタゴ會議に於て)經典的聖書[1]として公認され教會に採られたものである。この外に幾多の經典外聖書[2]が存し、それも問題の性質に應じて重要な史料價値を有するけれども、一般に教會の正統信仰に於てイエスを如何に見て來たかを知るためには經典的聖書即ち現行新約聖書が史料となる。

新約聖書の中でもイエスの生涯・言行を記錄することを意圖して著された四書マタイ傳・マルコ傳・ルカ傳・ヨハネ傳は「よき音ずれ」の意味で「福音書[3]」と呼ばれ、その中のまた最初の三書はその記事が殆ど並行して居り、内容構成・用語の上に極めて多くの一致點を有し、相互に比較して研究せらるべきものであるから「共觀福音書[4]」と呼ばれる。それが特にイエス研究の根本史料である。

新約聖書は舊約聖書を前提として成立してゐる。舊約といふ名稱は新約の概念の發生と共に基督教徒によつて唱へられたものである。イエスの出現以前に神がユダヤ民族に對して與へた契約が舊約である。即ち神はその選民たるユダヤ民族に對し、アブラハム、モーセ、ダビデ、其他の預

舊約聖書(三九)	創世記よりエブラ書まで	(一七)……歴史
	エステル記より雅歌まで	(一五)……詩
	内 イザヤ書よりマラキ書まで	(一七)……預言
	イザヤ書よりダニエル書まで(五)	
	ホゼア書よりマラキ書まで	(一二)

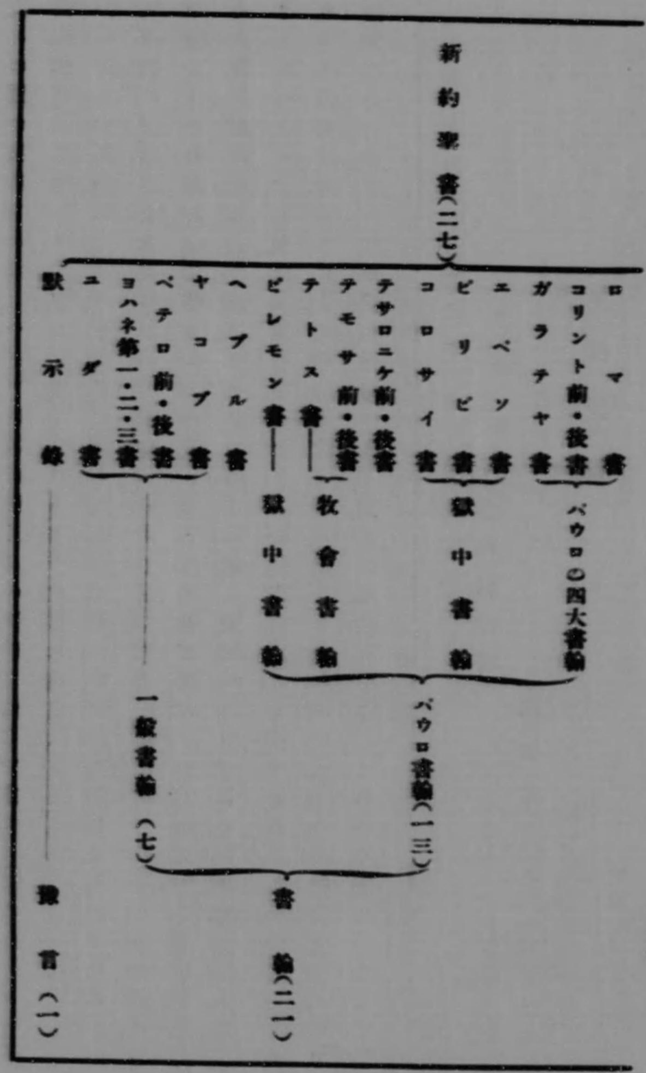
1) Canonical Books　2) Apocrypha.　3) Εὐαγγέλιον.
4) Synoptic Gospels.

言者達を通じて度々契約をなし、若し彼等が神の言葉、特にモーセを通じて與へられた律法を遵守するならば、彼等は永遠の王國を與へられるであらうと約した。殊に一人の救世主が出現して、彼等ユダヤ民族を救ひ、永遠の幸福に入らしむべきことを豫言した。舊約聖書三十九卷は創世記の始よりマラキ書の終に至るまで畢竟この救世主來臨を豫想せる律法と豫言の書であり、神とユダヤ民族との間の契約である。ユダヤ民族は堅くこの契約を信じて來た。これがユダヤ教である。故に舊約聖書は本來ユダヤ經の經典であり、ユダヤ民族の聖書である。

これに對して新約はイエスを通じて神と人類との間に結ばれた新しき契約である。ルカ傳によれば「晩餐の後、酒杯をも同樣にして(晩餐にパンを取つて弟子達に與へたと同樣に酒杯をも與へて)、言ひ給ふ。この酒杯は、我等のために流さるる所の我が血によつて成立する新しき契約[1]なり」と[2]。即ちその時、酒杯に盛られた酒はイエスの血―人類の贖罪のために十字架に流される血―の象徴であり、それによつて人類は救濟を得べきことの約束が神との間に結ばれたのである。換言すればイエスの出現によつて舊き契約は更改せられた。今や人々はモーセの律法を守る代りに、イエスを信ずることによつて永遠の生命に入り得ることになつた。イエスの教は、かくして基督教徒

マタイ傳	共觀福音書	福音書
マルコ傳		
ルカ傳		
ヨハネ傳		
使徒行傳		歴史(五)

1) ἡ καινὴ διαθήκη.　2) Luk. XXII. 20.



に取っては、新しき契約である。故にやがてイエスの言行を記錄した聖書を「新約」と呼び、ユダヤ教の經典を「舊約」と呼ぶことになった。

かく舊約と新約とはイエスの出現を割して對立し、ユダヤ民族の信仰と基督教徒の信仰との對立を表はすわけであるが、それにも拘らず、この兩聖書は內面的關係を保って一つに結ばれ、共に基

Ⅻ. イエスの面影

1. マリヤとイエス

2. 少年イエス

3. 處刑前に繞れるイエス

4. 復活せるイエス

1) Matth. V. 17.　2) Ἰησοῦς.　3) Ieshua.　4) Iehoshua.
5) Χριστός　6) Messiach.

基督教の聖典とせられてゐる。それは、基督教徒の所見によれば、舊約の律法と預言とは、イエスによつて破棄せられたのではなく、却てその眞意義を實現せられたからである。「われ、律法又は預言者を破棄せんがために來れりと思ふ勿れ。破棄せんとて來れるにあらず、却て成就せんがためなり。」[1]とイエスは宣告した。新約聖書の著作を貫く主要動機の一つは、舊約が新約によつて如何に的確に充たされたかを示すことにあつたのである。かくの如くにして本來ユダヤ教の經典である筈の舊約聖書が新約聖書の光に照り返されて、新しき生命に蘇り、結局基督教徒に取つてはこの兩書が根本經典となつたわけである。

イエスの生涯　イエスとはギリシヤ語にてイエスース[2]、ヘブル語のエシュア[3]又はエホシュア[4]に當り、「神は救ひ給ふ」の義で「救世主」を意味する。キリストは、ギリシヤ語にてクリストス[5]、ラテン語にてクリストス[6]「香油を注がれたる者」の義。ユダヤでは祭司・王・豫言者はその職責に當り頭から香油を注がれて聖寵を表せられた。イエスは弟子から香油を注がれた者として尊敬せられたのである。ヘブル語のメシヤもギリシヤ語のクリストスと同義である。

さてイエス・キリストは、マタイ、ルカの名によつて傳へられた所によれば、ユダヤ人の祖先アブラハムから四十二代目に當り、母マリヤがナザレ町の大工ヨセフと許婚の間にあるとき、聖靈を宿して生んだ子である。時は紀元前五年乃至七年頃と推定せられる。ヨセフとマリヤとが故郷ナザレから戸籍登錄のためベツレヘムへ行き、番合に窮して馬舍に泊つたとき、イエスが生れたのである。當時羅馬の屬領たりしユダヤは羅馬の太守ピラトの下に王ヘロデが支配してゐたが、ヘロデはイエスが古來の豫言に當れる救世主たることを學者達から聽いたので、これを怖れて幼し嬰さ

んとした。ヨセフとマリヤはイエスを伴つてエジプトに逃れ、ヘロデの死後、ガリラヤ地方に住き、ナザレに住んだ。それらすべての去就は聖靈の指示に從つて行はれた。イエス三十歳の頃、從兄に當るヨハネが先づ現れ、荒野に叫んで天國の近づけることを告げ、人々に悔改めを勸めて、ヨルダン川に於て洗禮を施し、イエスの來るべき準備をした。イエスは先づヨハネの洗禮を受けその際神の「愛し子」[1]であるとの啓示があり、次いで荒野に於ける四十日間の斷食試煉を經て、金ガリラヤ湖畔から宗教的活動を開始し、やがてエルサレムにも上り、傳統的勢力と戰ひつつ、説くべき熱力を以て信徒を獲得した。イエスの活動は、(一)天國即ち神の支配が迫つてゐるとの「よき音づれ」を宣べ傳へること、その差迫つた天國に備へるため此の世に於ける心構へを改め修行精進すべきことを教へること、(三)神の子イエスの力を示し、それを信ずる者に信仰の偉力を證すべき樣々の奇蹟を行ひ、特に病を治療すること、の三方面から成立つてゐた。

羅馬政權の壓力下に惱んでゐたユダヤ民族は、その信ずる神エホバがメシヤ(救世主)を遣はして政治的解放を行はしむべきことを期待してゐたのであるが、そのメシヤと目せられたイエスが、羅馬からの政治的解放の代りに靈的解放を使命としたことは大いなる失望であつた。又ユダヤの民族宗教たるユダヤ教を司つてゐた僧侶や、古來の律法主義の下に民衆の尊敬を集めてゐたパリサイ人達の學者や、其他ユダヤの既成勢力階級は、イエスが律法の形式を無視して民衆に教へ、大節に多くの信徒を獲得しつつある事實に對し嫉妬憎惡を抱き、民衆を煽動し、羅馬官憲に訴へて、つひに十字架にかけてしまつた。時に凡そ三十三歳。弟子達の熱烈な思慕は、イエスが死後三日にして復活したのを見たといひ、イエスの靈が永生を得たことを確信して、傳道布教に盡力

1) ἀγαπητός.　2) Jehovah.

し、かくして同志同信相集つて教會を結成し、所信を掲め教義を立て、益信徒を獲得して、つひに世界的宗教に發達するに至つたのである。

二　イエスの陶冶理想

イエスは何を教へ、人々を如何なる境地に導かんとしたか。これがイエスの陶冶理想の問題であるが、吾々はこれを便宜上、積極的部面と消極的部面とに分けて考へたい。積極的部面とはイエスが進んでこれを爲せと教へた內容であり、消極的部面とは、これに拘はるな、これを棄てよと教へた內容である。積極的部面は、更に分れて、(而も互に密接に關聯して)神への愛と隣人への愛との兩面となるであらう。消極的部面としては、舊來のユダヤ的因襲の排擊に始まり、進んでは從來の人類一般が憧れ求めてゐた地上的なるものの一切の棄却が教へられる。

神への愛　基督教がその發生の地盤としたユダヤには如何なる神觀が行はれてゐたか。舊約を通じてユダヤ民族の信じてゐた神エホバは、唯一の神であつたが、これを信ずる者の心情態度に於て、又これを信ずる者の範圍に於て、基督教の神と異つてゐた。エホバは人々を愛するよりも寧ろ支配する神であり、人々がその威嚴に怖れて身を慎み、その救濟を得る

たためには、律法を一點一畫の過誤もなく遵奉せねばならぬ所の嚴厳にして畏怖すべき神であつた。そしてエホバはイスラエル人(ここではユダヤ民族と同義)のみを選民とし、その救濟を豫約した所の民族的信仰の對象であつて、全人類を洩れなく包容する普遍的一神ではなかつたのである。

上述の如き先行神觀に對して、イエスの神觀は如何なるものであつたか。先づ一神觀については、イスラエル人卽ちユダヤ民族の神觀をそのまゝに繼承してゐる。「すべての誡命の中にて第一の誡命は如何なるものなりや」と質問する學者の一人に對し、イエスは「イスラエルよ、聽け、主なる我等の神は唯一の主なり。汝心を盡し力を盡し主なる汝の神エホバを愛すべし[1]」といふ舊約の誡命をそのまゝに(但しエホバといふ語を除いて)示し、これが第一の誡命である[2]と答へてゐる。唯一の神が同時に善きものであり、萬能であるといふことも、舊約に於けるエホバ觀の中に含まれてゐる神觀であつて、格別新しいものではない。イエスの神觀の新要素は寧ろ、神をば全人類を平等普遍に愛するものと見ること、而もそれを直接にはイエス自身の父、間接には使徒達並びに全人類の父と見ることに存する。ユダヤの既成勢力―エルサレムの宮を中心として利權を獨占してゐる徒輩―を斷乎逐ひ散らして「我が家はすべての民の祈りの家と稱へらるべし、と記されたるにあらずや[3]。」と敎へるイエ

1) Deut. VI. 4, 5.　2) Mark. XII. 28. Matth. XXII. 37.
3) Mark. XI. 17.

スの神は、すべての人類が、ユダヤの一部特權階級を仲介とせずして(唯イエスのみを仲介として)ひとしく禮拜すべき神である。民族內部の階級的・職業的・性的等々の差別を超越するのみならず、あらゆる民族の差別をも超越して、神は萬民の神である。かかる神はその愛に於て絕對無限であり、平等普遍であり、福音書の用語に從へば、完全なるものである。「その日を惡人にも善人にも照し、また雨を正しき者にも不正なる者にも降らせ給ふ[1]。」のがイエスの神である。絕對無限、平等普遍の愛とは、併しながら、量的、機械的等分を意味するのではない。相手の具體的事情に卽しその必要に應じて惜みなく施す愛である。故に神の愛を體現するイエスの愛は、弱き者、罪ある者の上に、一層多く注がれる。「健かなる者は醫者を要せず、唯病める者これを要す。……我は正しき者を招かんとて來れるにあらず、罪人を招かんがために來れり[2]。」とイエスはいふのである。

かくの如き神觀―普遍的なる愛の神としての神觀―は後パウロの特に强調した所である。イエス以前の律法拘束期を去り、イエスによつて神への信仰に入つた以上は、今やすべての人類は無差別の一體であるとパウロは敎へた。「汝等すべてはキリスト・イエスへの信仰の故に神の子なり。キリストによつてバプティスマを受けたる汝等は、キリストを着たるなり。(キリストの精神にまで成長したのである。) 今やユダヤ人もなく、ギリシ人もなく、奴隸もなく主人なく、男もなく女もなし。汝等はすべてはキリスト・イエスに於て一體なるが故なり[3]。」パウロのかかる普遍主義を檢討し、進

1) Matth. V. 45.　2) Matth. IX 12, 13, Luk. V. 31, 32.
3) Galat. III. 26—28.

んでカトリック教會の成立を說くことは原始基督教の範圍を逸脫するものとして、ここでは差控へねばならぬけれども、共觀福音書に於けるイエスの神觀がこの方向を指示してゐることは至當に肯定せられる。

イエスの神觀の第二の特質はその父性觀に存する。舊約にも斷片的にはエホバ父性觀が記されてゐるが、新約に於てはこれが根本的立場として貫かれてゐる。ここでは神は、或はイエスの父として、或は全人類の父として、或は使徒達の父として、語られて居る。神の父性は基督教的神觀の一大特質であり、殊に教育的意義の深いものである。子に對する父としてこそ、神は絕對普遍の愛を注ぐのであり、父に對する子としてこそ人々は神に絕對歸依することができるのである。そしてかかる父子關係がやがて教育的には師弟關係の原型である。子はまことの父に於て神を觀るのであるが、師は父性を體現してこそ、その弟子をして神への道に進ませ得るのである。「眞の基督教徒」と讃へられたペスタロッチーがいみじくも體現した如く、「親心」こそ教育愛の本質であり、弟子によつて「父」と呼ばれることほどまことの「師」たる資格を證するものはない。イエスは直接には弟子達によつて「師」と呼ばれてゐるが、やがては全人類の師であり、而も父なる神が子なるイエス及び全人類に示し給ふ父性愛を、イエス自らが體現したことによつて、イエスを信ずる者に取つては、師に通ずる道が父に通じ神に通じてゐたのである。

神と人との關係が父と子との關係であるならば、人が神を愛することは、子が父に對する態度でなければならぬ。それは絕對の信頼であり、純眞にして謙虛な隨順であり、而も正しきものを目ざしての生長精進である。「心を盡し精神を盡し思を盡し力を盡して、主なる汝の神を愛すべし」といふ第一の誡命は、唯、神への愛の最大最高程度を示すために、別言すれば「内なるすべて」を捧げての絕對歸依を示すために、これらの語を用ひたのであらう。それにしても「愛せよ」といふ語によつて、人が神に對する心情を現はしたことは特に注目せられねばならぬ。この愛はまた神が人に對する心情でもある。イエスが「ヨハネの洗禮を受けて水から上つた時、天が裂け、聖靈が鳩の如く彼の上に降るのを見た。そして天から、汝は我が愛し子なり」との聲が起つた。かくして愛(アガペー[1])は神と人、人と神とを相互に結びつける心情と見られるのである。同じ關係を福音書は人が神を「信ずる」[2]、「受容れる」[3]といふ語でも表はしてゐる。要するに神がその全き愛を以て人を愛し、人が全き歸依を以て神に歸依するのが神人の關係である。

それにしても神への愛即ち絕對歸依に生きることが基督教徒の信仰生活であり、それが如何に偉大なる力を有するかを民衆に敎へることがイエスに取つて重要な仕事であつた。

1) ἀγαπή.　2) πιστεύω.　3) δέχομαι.

「信ずる者には凡ての事爲し得らるるなり。」[1]「誠に汝等に告ぐ、人若しこの山に『移りて海に入れ』と言ふとも、その言ふ所必ず成るべしと信じて心に疑はずばその如く成るべし。この故に汝等に告ぐ、凡て祈りて願ふ事は既に得たりと信ぜよ、然らば得べし。」[2] イエスはかく教へて、悪鬼につかれた者や、盲聾唖者や、中風病患者や其他種々の病人等を治癒せしめた。この種の病人は、神を信じ、神の愛を體現せるイエスを信じ、その力により救はれたと信ずることによつて、忽ち悪鬼を離れ、眼を開き、耳は聞え、言葉を發し、手足が動くやうになるのである。但しこれらは信ずる者の自發的信仰によつて示された奇蹟であり、奇蹟を條件として信仰を拘かせたのではない。奇蹟の成否を檢してから信仰への去就を決せんとするが如き態度は悪魔の誘惑としてイエスの斷乎排撃した所である。[3] 又これらの奇蹟を如何に説明すべきかについての殆ど果しなき聖書學上の論爭に今は觸れずに置かう。唯、人々は信仰によつて心に新しき力を與へられ、世と己れとを見る態度が一變したであらうことは容易に推察せられる。信仰といふ最深最奥の主觀的なるものの力は唯信仰によつて體驗する他はないのである。

さて信仰生活に最も必要なものは純情と謙虚と精進とである。「心の清き者」が神を見、心の貧しき者」が天國を得るとの教は、純眞に謙虚に唯ひたぶるに神を信ずることの尊さを示

1) Mark. IX. 23,　2) Mark. XI. 23, 24, Matth. XXI. 21.
3) Matth. IV. 3—7. Luk. IV. 2—12.

したものである。而も純眞謙虚とは單なる空虚ではなく、却つて熱烈に義を求め、神の教に精進することである。「義に飢え渇く者」こそ眞の幸福に至り得るのである。アウグスティヌスによれば、「清き心」[1]とは、單純なる心[2]であり、ひたすら神に歸依する心である。「貧しき心」とは己れの貧窮を知り、自ら悔む所なくして、專ら義を求める心である。「義に飢え渇く」ことは、心の貧しき者にのみ可能である。吾々は既にソークラテースに於ける無智の自覺が眞智への發足點であり、プラトーンに於ける貧窮がイデアへのエローースの源泉であつたことを知つてゐる。イエスは同じ事態をば神の國を對象として教へたものと解せられるのである。

ふくの知き純情と謙虚と精進とを、イエスは子供と婦人とに見出し、從つて大人よりも子供、男よりも女が、イエスによつて最讃へられてゐる。主なる父が、神の國に關する事どもを、世の智者達には隱して嬰兒に顯し給へることは、イエスの深く感謝する所である。「まことに汝等に告ぐ。若し改悔心ばせを改めて幼兒の如くなるにあらずんば天國に入るを得じ。幼兒の如く自らを卑くする者こそ、天國に於て、よりすぐれたる者なり。また我が名のために、かくの如き一人の幼兒を受容るる者は我を受容るるなり。されど我を信ずる此の小さき者の一人を躓かする者は、寧ろ大なる磨臼を頸に懸けられて海の底に沈めらるるに如かず」と彼は教へてゐる。[3]

女子を尊重する思想は結婚の神聖觀や離婚の否定等にも現れてゐるが、一般に個者者に於ける女子は信仰厚き者としてイエスに讃へられてゐる。イエスの衣に觸れたばかりで、その驚信の故に

1) mundum cor.　2) simplex cor.　3) Matth. XVIII. 1—6.

病を癒せられた女がある。又最後の日の近づけるイエスに高價なる香油を注いで葬りの備をなせる女をイエスは激賞して「全世界の何處にても福音の傳へらるる處には、この女の爲せしことが思ひ出さるべし」[1]と言つてゐる。イエス處刑の時、泣悲める心を以て、その有樣を見守つてゐた人達の中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフの母のマリヤ、サロメといふ三人の女も交つてゐた。これらの女達は、イエスがガリラヤにゐた頃から附き隨つてかしづきイエスと共にエルサルムに上つて來たのである。又イエスの死後その身を清めんとして香油を持つて墓に行つたのも上の三人の女達であつた。[2] 要するにイエスと女性との關係は頗る親密であつて、男性がイエスと爭つたり、イエスを裏切つたりするのに對して、女性は常に純的に純眞にイエスを信じ、イエスを感嘆させてゐるのである。この意味に於てイエスが女性尊重者であつたことは事實である。この事實の裏面を低劣卑俗に解釋して、イエスと女性との間に不倫の關係を推定する人々の立場に吾々は勿論加擔しない。信仰生活に於てイエスの求めた態度は如何なるものであつたかを念頭に置いて個々書を見るとき、女性を愛重するイエスの言行の中に、女性こそ幼兒と共に、神への絶對歸依に於てすぐれてゐることを認めざるを得ないのである。

鄰人への愛　第一の誡命が神への愛であるのに對して、第二の誡命は鄰人への愛である。「汝自らの如く汝の隣人を愛すべし」とはモーセ十誡の第二部對人關係の誡命として舊約聖書に記されてゐるが、イエスはこれをば、神への愛と同等に、しかも結局一つに歸するものとして重視してゐる。「第二は是なり」[3]と言ひながら、「第二もまた、これと(第一と)等しし」[4]と斷定して、

1) Mark. XIV. 9. Matth. XXVI. 13.　2) Mark. XVI. 1.
3) Mark. XII. 31.　4) Matth. XXII. 39.

「この二つの誡命とそ、すべての律法と豫言者との據る所なり」[1]と結んでゐるのである。イスラエルの民が遵奉して來た數多くの誡命は、イエスによれば、愛を以てその精髓とするものであり、そして神を愛することと隣人を愛することとは二にして一なるものである。蓋し唯一の神を父と戴く者は互に同胞であり、その父に歸依する心を以て同胞と結合することが當然だからである。

隣人愛は如何にあるべきかについて、イエスは父なる神が子たる人類を愛し給ふ所の完全なる愛を模範とすべきことを敎へてゐる。「汝等の天の父の全きが如く汝等も全くあれ」[2]といふのが彼の敎である。この場合に完全なる愛とは、あらゆる望ましき點を完備した愛でなければならぬわけであるが、特に普遍的で且つ絶對的であるべきことが共觀福音書の强調する所である。先づ普遍的隣人愛とは、民族別や其他の差別を超越して、神の意志を實踐するすべての人々を隣人とする立場である。モーセの誡律に於ける隣人とはエホバの選民たるイスラエルの同胞に限られて居り、たとへ「汝等と共に居る他國の人をば、汝等の中に生れたる者の如くし、己れの如くこれを愛すべし」[3]といふ場合でも、他國の人とはイスラエルに來てエホバの信者となつてゐた所の異邦人改宗者を指してゐたのであるが、イエスにあつては、神の愛を模範とし民族の區別を超越して躍ねく人に憐憫を施す者が隣人である。

1) Matth. XXII. 40.　2) Matth. V. 48.　3) Lev. XIX. 34.

1) Luk. X, 25—37.　2) Mattth. V. 38—48.

強盗に遭つて衣を剝がれ傷を負はされ半死半生の狀態で路上に棄てられた人をば、放任して行き過ぎたユダヤ教の祭司、またその祭司の職を貴重しながら同じく行き過ぎて顧みなかつたレビ人などは、その遭難者と同族でありながらも隣人ではなく、これに反して親切に救護し介抱した所のサマリヤ人は、異民族でありながら眞の隣人である。[1]

次に絶對的隣人愛とは、「目には目を、齒には齒を」といふが如き相對的・條件附の隣人愛ではなくて、相手の如何に拘らず、無條件もこれを愛することである。己れを愛する者を愛するといふのは稅吏と雖も爲す所であり、兄弟なるが故に安否を問ふが如きは異邦人と雖も爲す所であつて、決して完全なる愛ではない。相手が惡人であつてもこれに抵抗することなく、右の頰を打つ者には左をも向け、下衣を取らんとする者には上衣をも取らせ、一里の同行を强ひる者には二里を同行し、總じて己れの敵を愛し、己を責むる者のために祈るといふのが絶對的隣人愛である。天の父はその日を惡しき者の上にも善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給ふのであるから、その全き愛に倣つて隣人愛も無條件の完全なる愛でなければならぬといふのがイエスの教である。[2] 單に己れを害する者にも無抵抗に且つ愛を注がねばならぬのみならず、自らが人のために善を施す場合にも報酬を期待しそれを條件としてはならない。「汝等得る事あらんと思ひて人に貸すとも何の喜す

1) Luk. VI. 34—36.

べき事あらん。罪人と雖も均しきものを受けんとて罪人に貸すなり。汝等は敵を愛し善を爲し、何をも求めずして貸せ。」「至高の者(即ち神)は惡を知らぬ者、惡しき者に對しても慈ある者なり。汝等の父の慈悲なる如く汝等も慈悲なれ。」といふのがイエスの說く所である。[1]

形式的因襲の排擊　神への愛と隣人への愛とは、イエスが人々に說き奬めた積極的部面であるが、これに對してイエスは從來の人々が盲目的に墨守してゐた律法の形式的部面を排擊し、又從來の人々が憧れ求めてゐた地上的なる諸々の幸福榮譽を棄却すべきことを敎へた。これ等が謂はばイエスの消極的敎說である。消極的といふ言葉は弱く響くけれども、實はその內奥に强い主張を含み、眞の宗敎的意義に於ける積極性を指示してゐる。律法の形式的因襲を排擊することは却て律法の眞精神を充實完成する所以であり、地上的なる幸福榮譽を棄却することは、天國に於ける至上の淨福榮光—宗敎的意義に於ける眞生命の發揮—を得んがためである。「われは律法また預言者を破らんがために來れりと思ふなかれ。破らんがために來らず、却て成就せんがためなり。誠に汝等に告ぐ。天地の過ぎ行かぬ中に、律法の一點一畫も廢ることなく悉く全うせらるべし。この故に若しこれらのいと小さき誡命の一つを破り、且つその如く人に敎ふる者は天國にていと小さき者と稱へられ、これを行ひ且つ人に敎ふる者は天國にて大いなる者と稱へられん。われ汝等に告ぐ。汝等の

義學者・パリサイ人に勝らずば天國に入ることを能はず。[1]」學者・パリサイ人等の民衆に教へた所は律法の形式的墨守であり、イエスの教へた所はその精神的實質的遂行であつて、これが遙かに義に於て優越するのである。然しながらかくの如きは學者・パリサイ人等を代表とするユダヤの既成勢力に取つては、重大なる脅威であり、怖るべき革新であつた。既成勢力は律法を唯一の權威としその形式的遵奉を民衆に强ひることによつて、自らの地位權益を擁護してゐたのであるが、かかる形式を脱して、良心を權威とし、ひたすらにまことの信仰を實かんとするイエスの立場は、既成勢力から見れば許し難き獨斷であり、社會秩序の破壞であつたに相違ない。しかもイエスに取つては、新しき酒をば舊き革囊に盛るに忍びず[2]、新しき實質は舊き形式を棄てて、清新自由なる生活を要求せねばならなかつた。そこに新舊勢力の衝突が起るのは當然である。「地に平和を投ぜんがためにではなく却つて劍を投ぜんがために[3]、即ち爭鬪を與へんがために[4]」イエスは來たのである。イエスに就く者と就かざる者との間に爭鬪は起らざるを得ない。「父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、姑は嫁に、嫁は姑に、分れ爭ひ[5]」かくして舊勢力と新勢力との衝突、舊世代と新世代との紛爭は起り、新しきものを導くイエスは革新者として世の嵐に立向ふこととなつたのである。十字架の受難も、信徒の殉教も、必然の出來事として覺悟せられねばならない。しかもかうした爭鬪はイエ

1) Matth. V. 17—20.　2) Luk. V. 36.　3) Matth. X. 34.
4) Luk. XII. 51.　5) Luk. XII. 53.

スの主張する絶對普遍の人愛究極の平和主義と矛盾するものではなく、寧ろ爭鬪を過渡期の一時的必然として、やがては全人類の同信同行の同胞愛が——そして地上に汎ねき平和が——期待せられてゐる。「いと高き處には、榮光、神にあれ。地には平和、主の悅び給ふ人にあれ。」ことに基督教の平和主義は極めて明的に明示せられてゐる。宗教に於ては戰は常に平和のための戰である。

律法の形式的墨守よりその眞精神の完成へと向つたイエスの教説は、福音書が屢所に記してゐるが、ここには特に顯著な若干の事例を擧げよう。安息日は窮屈な禁令の日であつて、パリサイ人等はこの日に爲すべからざる行爲について詳細な規定を設け、その墨守を强制してゐた。然るにイエスが例、安息日に麥畑を過つた時、弟子は飢ゑて麥の穗を摘み食ひ始めたのを、パリサイ人は非難した。イエスはダビデとその伴へる人々とが飢ゑし時、祭壇のパンを食つて、しかも罪なかりしの例を指摘して「安息日は人のために設けられ、人は安息日のために設けられず。されば人の子は安息日にも主たるなり」と斷定してゐる。安息日に病を醫することもまた禁ぜられてゐたのであるが、イエスは會堂に於て、片手のなえた人を醫した。パリサイ人の詰問に對して、イエスは「安息日に善を爲すと惡を爲すと、生命を救ふと殺すと、いづれかよき」と反問し、「汝等のうち一匹の羊をもてる者あらんに、若し安息日に穴に陷らば、これを取りあげぬか。人は羊よりも優ることいかばかりぞ。されば安息日に善を爲すはよし」と宣言してゐる。要するに神の業績を偲ばせ神への信仰を助け神の眞の實體を顯さんために設けられた安息日が、無爲怠惰の形式を具へて人々を信仰と善行と

1) Luk. II. 14.　2) I. Samuel. XXI. 3—6.　2) Matth. XII. 1—8.
4) Mark. III. 4. Luk. VI. 9.　5) Mark. XII. 11. 12.

から紡げるといふ因縁は、イエスの忍び難い所であり、彼は既成勢力の反感を買ひ身の危險を招くことをも辭せずして、この因襲の排撃を斷行したのである。

取稅人たるレビ(又の名マタイ)を召してその家に到り、食卓につき、多くの取稅人・罪人等と食事を共にしたことも、パリサイ人や學者達に取っては許し難き非行であつた。然るにイエスによれば「健やかなる者は醫者を要せず、唯病める者これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて來れり」[1]といふのである。斷食といふ形式もまたイエスの最守し得ざる因襲であつた。ヨハネの弟子とパリサイ人とは舊慣を守つて毎週二度の斷食を行つてゐたのに、イエスの弟子は自由な態度を取つて斷食をしなかつたのが人々の詰問を招いた。然るにイエスによれば、斷食の可否は時と場合とによるのであつて、例へば婚禮の際に「新郎の友達、新郎と倶に居る間は斷食し得べきか。新郎と倶に居る間は斷食するを得ず。されど新郎を取らるる日來らん、その日には斷食せん」といふのである。蓋しイエスは弟子達の新郎であり、イエスと共に在る間は弟子達は斷食を要せず、イエスが十字架に釘づけられる日こそ悲しみ充ちて弟子達の斷食すべき時であるとの寓意である。舊い酒を新しい革囊に盛つてはならぬといふ有名な歌もここで語られるのである。[2] 律法の破壞を企てずして却てその精神の完成を意圖するイエスに取つては、舊約の弊害を單に外面的、文字的に解せずして、その意味を解し、その意味に徹して實踐することが必要であつた。例へばモーセ十誡の第六條に「汝殺すなかれ」[3]とあるけれども、イエスに於ては、これは文字通り殺人を戒めたものに止まらずして、兄弟を倒罵し嘲笑することはこれを殺すと同樣の罪であり、それ故に、何を措いても先づ兄弟と和解することが「殺すなかれ」の戒律の眞精神である。[4] 又モーセ十誡の第七

1) Mark. II. 13. Matth. IX. 9.　2) Mark. II. 18. Math. IX. 1.
3) Exod. XX. 13. Deut. V. 17.　4) Matth. V. 21—26.

條に「汝姦淫するなかれ」[1]とあるけれども、イエスによれば、これは文字通りの姦淫を戒めるだけでなく、もつと精神的に、心情の內奥に立入つて反省せねばならぬ誡律であつて、「すべて色情を懷きて女を見る者は既に心の中に姦淫したるなり」[2]とイエスは宣するのである。離婚に關しても一片の離婚狀の形式を以て輕々にこれを行ふことができない。モーセは離婚狀を書いて妻を出すことを許したけれども、イエスは創世記の教へる所に從つて神は「開闢の初より人を男と女とに造り給へり」。故に人はその父母を離れて二人のもの一體となるべし。されば、もはや二人にあらず、一體なり。この故に神の合はせ給ふものは人これを離すべからず」として、結婚の神聖を說き、「凡そ妻を出して他を娶る者は、その妻に對して姦淫を行ふなり。また妻もし夫を棄てて他に嫁がば姦淫を行ふなり」[3]と斷言してゐる。それらの事例によつて明かな如く、イエスは舊約所載の律法をば、その文字面と外形とに於てではなく、その本來の眞精神に於て把握し、その眞精神の徹底を期したのであつて、律法の完成とはまさにこれを指すのである。

地上的なるものの滅却　イエスの教は、天國即ち神の支配の近きを豫想して、ひたすらそれに備へしめることを趣旨とする。神への愛も、隣人への愛も、律法の眞精神の貫徹も、目ざす所は天國に於ける淨福榮光のためである。故に從來の人々の憧れ求めたものとは反對の方向に基督者の關心は向はねばならぬ。「汝等悔い改めよ、天國は近づけり。」と言ふ場合に同じく、悔い改めが洗禮者ヨハネにあつては、過去の罪過の後悔を意味したのに對して、イエスにあつては、舊きものから新しきものへの轉換、即ち心構への根本的變革を意味した。これ

1) Exod. XX. 14. Deut. V. 18.　2) Matth. V. 28.
3) Deut. XXIV. 1—3.　4) Gen. II. 21—24.　5) Mark. X. 4—12.

まで仰ぎ尊ばれたものが價値を失ひ、これまで忌み嫌はれたものが重要性を得て來る。それはまさしく價値顚倒である。廣く見れば聖書全體がこの價値顚倒を敎へてゐるわけであるが、吾々は併し中でも特に注目すべき事項に關して、イエスが何を棄てさせ、何を重んぜしめたかを檢討したいと思ふ。

先づ一般に外的なるものを棄てて內的なるものを重んじ、部分よりも全體を尊重したことが注目せられねばならぬ。「若し汝の手汝を躓かせばこれを切り去れ、不具にて生命に入るは、兩手を具つて地獄の火に往くよりも勝るなり。若し汝の足汝を躓かせばこれを切り去れ。跛足にて生命に入るは、兩足を具て地獄の火に落込むよりも勝るなり。若し汝の眼汝を躓かせばこれを拔き出せ。片眼にて神の國に入るは、兩眼を具て地獄の火に投入れらるるよりも勝るなり。」[1] 靈的生命は肉的生命よりも內面的であり、眼きとは卽ち靈的生命の毀損、精神的墮落を意味するのである。しかも肉的生命ですら衣服の如きものに比すれば一層內面的である。「生命は食よりも優り身體は衣服よりも優れり。」[2] 要するに衣服よりも身體を、身體の一部よりも全身の生命を、全身の生命よりも靈的生命を尊重せよといふのがイエスの敎である。この事は一般に衣食についての思慮ひを棄却せよといふ次の敎說とも關聯する。

衣食についての關心は地上的生活の不安に基因し、この不安からの解放を求めて人々の關心するのは富の蓄積である。然るにこの富こそイエスに取つては先づ棄却すべき罪惡である。「汝等神とマンモンとに仕ふること能はず。」[3] 富々の性を實證しても富を棄て得ない限り神の國に

1) Mark. IX 43—47. Matth. XVIII. 8. 9.
2) Matth. VI. 25. Luk. XII. 23.　3) Matth. VI. 24.

入ることはできない。「富める者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通る方が容易なり。」[1] 多く財を蓄ふるものであり、眞實の生命たる精神のことに關心するのが、永遠に朽ちず失はれざる天國に財を蓄ふる所以である。[2]

かくの如く物的財寶を棄却せよといふのは、それを無用として滅滅せよといふのではない。「汝等の天の父は見てこれ等の物の汝等に必要なるを知り給ふ。」「汝等先づ神の國と神の義とを求めよ、然らば見てこれ等の物は汝等に加へらるべし。」まことに播かず刈らず倉に納めざる空の鳥にも日々の糧を與へ、勞めず紡がざる野の百合にもソロモンの榮華にまさる裝ひを與へる所の神は、まして人間を衣食に窮せしめる筈はない。何を食ひ何を着んとて思ひ煩ふことなく、ひたすら神に歸依し神に信賴せよといふのがイエスの敎である。[4]

この敎說を解して、當時のユダヤ地方が氣候や天産の好條件の故に、事實上、衣食に關する顧慮なくして、最小限度の必要を充たし得たのであるといふ歷史地理的推定を持出すのは、例へばゲアン・ルーンの如き眞そ宗敎の眞義に違いと私は思ふ。物的財寶を棄却することの眞義は、これらを人間の自力によつて生産し所有し使用し得ると考へる立場を棄てて、これらを神の賜物と考へる立場に移ることであらう。すべてを棄てた者はすべてを與へられる。自己のものとして恃み誇る代りに、神の賜物として感謝して受取り、神の意志に從つてこれを善用することが、物的財寶に關す

1) Mark. X. 25. Luk. XVIII. 25.　2) Mark. XII. 44.
3) Matth. VI. 18. Luk. XII. 23.　4) Matth. VI. 25—34. Luk. XII. 22—31.

る眞の宗教的靈魂でなければならぬ。

富を棄て衣食への煩ひを棄てる基督者は、また地上の地位、名譽をも棄てねばならぬ。天國の秩序と地上の秩序とは反對である。「幼兒の如く己れを卑くする者こそ、天國に於て大なる者なり。[1]」「人若し顯たらんと思はばすべての人の後となり、すべての人の召使となるべし。[2]」イエス自身が萬人の召使となるために此の世に來たのであるから、その弟子達もまた互に他の召使とならねばならぬ。信仰生活そのものに於てすら、人に見られんがための禮拜祈禱は偽善として斥けられる。「汝等見られんがために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ。」「施しをなす時、右手のなすことを左手に知らすな。」「汝等祈る時、己が部屋に入り、戸を閉ぢて、隱れたるにいます汝等の父に祈れ。」かくの如く一切の外見、僞善をすてて、心から祈る者に對して「隱れたるに見給ふ汝等の父は報い給はん」とイエスは敎へるのである。[3] まことに信仰の本質は、內奥の主觀に存し、最深最奥の良心に存する。外見上、他人の上に立ち、世上の注目を惹くとも、內心の不信仰があるならば、その心は奴隸よりも卑しく、自らの惱悩を禁じ得ないであらう。良心の滿足こそ最高の安樂であり、萬人を怖れ慄らぬ首長の境地である。信仰を以て基督者の自由の本質と見たルーテルの見解は、まさに原始基督敎の神髓を捉へたものと言はねばならぬ。

肉親的關係もまた地上的なるものとして棄却せられる。ガリラヤ湖畔傳道の初め、ヤコブもヨハネも彼等の父を棄ててイエスに從つた。イエスの母と兄弟とが彼を訪ねて來た時、彼は周圍に坐する人々を指して「觀よ、どれが我が母、我が兄弟なり。誰にても神の御意を行ふ者は、これ我が兄弟、我が姉妹、我が母なり。[4]」と言つてゐる。マリヤは肉親的關係に於てはイエスの母であるが、神の

1) Matth. XVIII. 3.　2) Mark. IX. 35.　3) Matth. VI. 14.
4) Mark. III. 31—35. Matth. XII. 46—50.

敎に關しては却てイエスの弟であり、イエスによつて導かれねばならぬ。ダンテが『神曲』の天國篇に述べた如く、マリヤは「處女なる母、汝が子の嗣[1]」と呼ばれねばならぬのである。[2] 家庭的紐帶は神の國を求める者に取つては卽座の斷絕を强ひられる。イエスに從はんとしながら「先づ往きて我が父を葬ることを許し給へ。」と乞ふ者に對して、イエスは「死者をば死者をして葬らしめよ。汝は往きて神の國を言ひ弘めよ。」と宣し、又「先づ家の者に別れを告ぐることを許し給へ。」と乞ふ者に對して「手を鋤につけて後に、後を顧みる者は神の國に適ふ者にあらず。」と誡める。[3] 棄却すべきものと適從すべきものとの選擇は、ブッセが指摘した如く「あれか—これか」であつて、決して兩立を許さないのである。

財產・地位・肉親—これ等すべての棄却の意味する所は、やがて地上的なる一切の棄却である。全世界の國々とその榮光すらも棄てられる。惡魔がイエスを高き山につれて行き、世の諸々の國とその榮華とを示して「汝若し平伏して我を拜せば、これ等を悉く汝に與へん。」と言つた時、イエスは「サタンよ、退け、『主たる汝の神を拜し、唯これのみに仕へ奉るべし』と記されたり。」と答へ、惡魔を退かしめた。[5] 必要なるものは世界ではなくて靈的生命である。「人、全世界を得るとも、己が生命を失はば何の益かあらん。[6]」惡魔の誘惑はイエスの內面的試錬を意味する。民衆の久しき待望に迎へられ救世主として現れ出たイエスは、若し欲するならば、劍を執つて民衆を率ゐ、羅馬官憲と戰つて、地上に王國を建てることも不可能ではなかつたであらう。併し彼の敎はんとしたのは靈の世界であり、彼に課せられた使命は靈的王國の建設である。それは地上的なる一切の棄却を要求する。彼はこの試錬に堪へて惡魔を去らせたのである。故にイエスに從はんとする者もまた一切を棄

1) Vergine Madre, figlia del tuo Figlio.
2) Dante, Divina Commedia, Paradiso, XXXIII.　3) Luk. IX. 59—62.
4) W. Bousset, Jesus.　5) Matth. IV. 8—11.　6) Matth. XVI. 26.

てねばならぬ。「汝等の中、その一切の所有を捨てざる者ならでは、我が弟子となるを得ず。[1]」

かく地上的なる一切を棄却する者は眞の報いを受ける。「まことに汝等に告ぐ。我がため福音のために、或は家、或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑を棄つる者は、確にても今、此の時に、百倍を受けぬはなし。即ち家、兄弟、姉妹、母、子、田畑を迫害と共に受け、また後の世にては永遠の生命を受けぬはなし。[2]」これによれば此の世に於て迫害を受けることすら、信仰への精進を勵まされる一つの報いである。又肉親の兄弟姉妹親子を棄てても、神を眞の父として與へられ、同じき神の子としての全人類を眞の兄弟姉妹として與へられる。棄てた己れの田畑の報いには、全世界が己れのものとして新たに與へられる。しかもこれらは「今、此の時」即ち現世に於て既に新しい心境として報いられる。そして後の世に於ては實に永遠の生命が與へられるのである。これほど大いなる報いが何處にあるであらう。實に地上的なる一切の棄却はつひには自己そのものの棄却であり、そして棄つる者への最大の報いは、イエスのために十字架を負うて自らの生命を棄て、それによつて永遠の生命を得ることである。「人若し我に從ひ來らんと思はば、己を棄て、己が十字架を負ひて、我に從へ。己が生命を救はんと思ふ者はこれを失ひ、我がため又福音のために己が生命を失ふ者はこれを救はん。[3]」基督教徒の殉教の喜悅はそこにある。死して永生を得ることは宗教の本質であるが、イエスの教へる所も畢竟はこの宗教的眞理に他ならぬのである。

三　イエスの教育方法

イエスの教育方法の意義　以上イエスの陶冶理想として述べた所は、イエスが何を教へ

1) Luk. XIV. 33.　2) Mark. X. 29.
3) Mark. VIII. 34. 35. Matth. XVI. 24. Luk. IV. 23.

たか。人を如何なる人にまで導かうとしたかの問題であるが、これらの教説を最も有効に弟子達乃至一般民衆に理會體得せしめるために、イエスは如何なる方法を用ひたか。これが彼の教育方法の問題である。凡そ宗教の始祖はその教化方法に於てすぐれた特色を有するのが常であり、イエスの場合にもこれは著しく目立つてゐる。彼の魅力は寧ろこの方法的特色に宿つてゐたとすら思はれる程である。そして陶冶理想の問題はイエスの教説として、そのままに宗教史上の問題となるのであるが、教育方法は宗教史に於て常に必ずしも必須の内容を成さず、寧ろ教育史に固有の關心事と見らるべきである。この意味に於てイエスの教育方法は、特に重視されねばならない。

著名世代に呼びかけて　先づイエスの着眼點として注意すべきは陶冶性の多き若者達に、より多く働きかけたことである。ガリラヤ湖畔の傳道の開始に當り、漁夫の青年シモンとアンドレイアとに向つて、「我に從ひ來れ、汝等をして人を漁る者とならしめん。[1]」と言つたイエスの言葉について、福音書の註釋者は、「ならしめん[2]」といふ點に注意を促し、これは未成年者を餘ろに煮陶して傳道者たらしめんとする教育的意義を含むものとしてゐる。勿論プッセの說いてゐるやうに、イエスは弟子達を次第に高みに誘ひ行くことをせず、彼等をいきなり「あれか―とれか」の前に置いたことは事實であるが、併しこの二者擇一はイエスに附き

1) Mark. I. 16. Matth. IV. 18. Luk. V. 10.
2) ποιήσω γενέσθαι.

従ふ出發點に於ける決斷であつて、その後の師弟關係は感化薫陶の長い道程を辿つたのであると吾々は解する。何れにせよ、若き世代がより多くイエスに歸依したことは事實であり、革新者イエスが教育の効果を若き世代に期待したことは、その成功の第一條件であつたと解せられねばならない。

權威を有する者の如くに　イエスが說教する態度は、學者達の如くではなく權威を有する者の如く[1]であつたことが民衆を驚嘆せしめた[2]。學者達は、權威によつて[3]教へた。即ち自らは權威を有せず、傳統を笠に着て民衆を威壓せんとしたのである。然るにイエスは、權威を以て教へた。即ち自らの精神から出て、直接に眞理を敎へたが故に、イエス自身が權威となつて民衆の心に深く迫ることができたのである。律法や祭司や說敎に關する職掌をその階級的特權としてゐた學者、パリサイ人等は、大工の子イエスが、驚くべき自信と魅力とを以て學者と論戰し、民衆に說敎し、救ひをさへ宣することについて、いたく憤激したに相違ない。しかもイエスこそは、眞理自體を體現し、その良心に於て神の道を把握してゐる限り、實質上まことに神に召し選ばれたものであり、そこに眞實の權威が存するのである。

斷乎實踐して　敎說に先立つて斷乎實踐するとともイエスの敎育方法の有效なる一面であつた。治病其他の行爲も先づ實踐して、反對派の詰問や弟子達の疑問などの起るとき

1) Ma'th. VII. 28.　2) by authority.　3) with authority.

初めて敎へ說くのである。エルサレムの宮に入つて、兩替屋の机や鳩を賣る者の腰掛を蹴飛ばし彼等を繩の鞭で追ひ出して、然る後に彼等の冒瀆行爲を叱つたことの如きその好例である。吾々はそこに若く逞しきイエスを見る。確乎不拔の自信を見る。驚き怖れつつも、言ふべからざる魅力に制壓せられる相手の人々を見る。說くこと多くして自ら行ふことの少き既成勢力、思ふこと多くして實行の勇氣を缺ける卑屈の民衆―さうした中にあつて、三十代の若盛りのイエスが端的に敢然と、その所信を斷行することの、如何に痛快にして印象的なるかを、吾々は目のあたり想見するのである。

巧みに問答して　イエスの敎育方法の卓越性はその巧妙なる問答にある。先づすべての問答が、長短曲折の如何に拘らず、常に明確にその目的に到達するといふ合目的性が注目せられる。次にイエスの言葉が直觀で端的で直觀的であり、明晰そのものであつたことが注目せられる。傳統的律法や風習など相手の既知事項に出發し、それとの關聯に於て自己の敎說を述べることと、又その說く所が極端なる對比によつて明確さを加へてゐること、更に强き自信の故に端的なる判定、斷乎たる結論を下してゐることなどがその主たる要素である。また問答の相手が、惡魔なるか、弟子なるか、パリサイ人なるか、病み惱める者なるか、倣り恃めるものなるか等々の個別的事情に應じて、或は强く叱するが如く、或は抱き慰むるが如

く、或は揶揄嘲刺するが如く、臨機自在の方法を取つたことが注目せられる。特に相手の虚意を見拔いて鋭くその裏をかく論鋒は、イエスの透徹鋭利を證して餘りある。悪魔が「汝若し神の子ならば、命じてこれ等の石をパンとならしめよ。」と言つたのに對し、イエスは「人はパンのみによつて生くるものにあらず。」と答へ、又宮殿の屋上にあるイエスに「汝若し神の子ならば己が身を下に投げよ。」と言つた悪魔に、「主なる汝の神を試むべからず。」と答へてゐる。[1] エルサレムに於ける次の問答の如き特にイエスの辛辣さを裏書してゐる。「イエスが宮の内を歩み給ふとき、祭司長、學者、長老たち御許に來りて、『何の權威を以て此等の事をなすか、誰が此等の事をなすべき權威を授けしか。』と言ふ。イエス言ひ給ふ。『われ一言汝等に問はん、答へよ、然らば我も何の權威を以て此等の事をなすかを告げん、ヨハネのバプテスマは天よりか人よりか、我に答へよ。』彼等互に論じて言ふ。『若し天よりと言はば、イエス之に對して何故かれを信ぜざりしか、と言はん。然れど人よりと言はんか……』彼等民衆を怖れたり。人みなヨハネを(神より遣はされたる)豫言者と認めたればなり。遂にイエスに答へて『知らず』と言ふ。イエス言ひ給ふ『我も何の權威を以て此等の事をなすか汝等に告げじ。』[2] ヨハネに關するイエスの眞意は、「天よりと、人よりと」とを兩立させて、「天より、但し人を通じて」と考へてゐたのであるが、相手の惡意に應ずるために上の如き辛辣なる態度に出たのである。

1) Matth. IV. 2—7.
2) Matth. XXI. 23—27. Mark. XI. 27—32. Luk. XX. 1—8.

「カイサルのものをカイサルに」といふ有名なる一節も、イエスの問答の鋭利さを知る好資料である。ローマ政權に味方し、ヘロデ王の支配に與してゐたパリサイ人達は、その弟子をイエスに遣はして納稅の可否を尋ねさせた。イエスから國王の支配を否定するやうな言葉尻を捉へて、罪に訴へるためである。これに對して、「カイサルの物はカイサルに、神の物は神に納めよ。」[1] と答へたイエスの眞意は、神の國と地上の國とを區別しつつもその兩立並存の可能性を示すこと、卽ち神の國の信徒であつて同時に地上の王權に忠實に服從する國民であることとの可能性を敎へることに存したのであるが、今は當面の問題として相手の奸計を巧みに逃れるために、かく巧妙なる答を與へたのである。ともかく相手の心を鋭く見拔き、それにふさはしい方法で應對することは、すぐれた敎育者の必須の資格であつて、ヴァン・ルーンはこの意味でイエスを生れながらの偉大なる敎師であつたと斷言してゐる。

民衆と弟子とを區別して　一般民衆に對しては譬喩を用ひて說き、弟子達だけにはその上に譬喩の眞義を說くのがイエスの常であつた。「譬喩なしでは彼等(民衆)に語り給はず。弟子達には、人なき時に凡ての事を釋き給へり。」[2] 元來譬喩は、一面にはその具體性の故に民衆に理解され易いこともあるが、他面には却て謎めいた形を取つて眞理を隱す場合がある。イエスは民衆には漠然たる理解にも拘らず、印象を强くし魅力を感ぜしめるために譬喩を

1) Matth. XX. 21. Mark. XII. 17. Luk. XX. 25.
2) Mark. IV. 34. Matth. XIII. 34.

用ひて語り、弟子達にはその眞義の正確なる理解を與へるために特別の釋義を加へた。イエス自身の釋明によれば、弟子達は天國の奥義を知ることを許されてゐるが、民衆は許されてゐないが故に、かく方法を區別したのである。[1] 卽ちイエスはすべての相手に神の國の眞理を知らしめようとしたのであるが、民衆と選ばれた弟子達との能力の差別によつて、方法を異ならしめたと解せられる。而もこの事は弟子達の地位が一般民衆よりも上位に在ることを證明する。そして弟子達には一般民衆の模範となり先達となるべき責任が負はされてゐる。換言すれば民衆は唯イエスに敎へられるだけで足るのであるが、弟子達はやがてイエスの名に於て民衆を敎へねばならぬ。故にイエスは敎師を養成する意圖を以て弟子達に特別の敎育を施したのであり、そこに敎師の敎師たるイエスの周到なる用意が窺せられるのである。されば、そこ、ブッセの言へる如く、イエスの生涯が終つた時、そこには有爲な、そして準備の成れる弟子達の一團が師の大なる事業を精力的に繼續しようとして立つてゐた。孔子もソークラテースもそして實にイエスも、單に自らが偉大であつただけでなく、すぐれた弟子をつくり得たことによつてこそ、永遠に「人類の敎師」となり得たのである。

1) Matth. XIII. 2. Mark. IV. 2.

第二節　基督敎の敎育制度

一　問答學校及び問答敎師學校

基督敎の普及　イエスの沒後、使徒ペテロ[1](本名シモン、[2]ガリラヤ湖畔の漁夫、イエスに召されて弟子に加はり、ケパ[3](岩の義)と呼ばれた。ペテロはその希臘語譯である)はイェルサレム敎會の中心人物として活動し、羅馬にも傳道して羅馬敎會を建設し、ネロ皇帝の時(六四年頃)殉敎の死を遂げた。次いでパウロ[4](本名サウロス[5])はユダヤ敎徒として基督敎に反對したが突然回心し、熱烈な信者となつて、ユダヤ人以外の所謂異邦人に傳道し、小アジヤ、マケドニヤ、希臘の各地に敎會を起し、後囚はれて羅馬に送られ、ネロ皇帝の時、殉敎の死を遂げた。パウロによつて、地上の一切の團體と異なる所の同信同行の靈的團體としての「敎會」[6]の概念が基督敎的意義に於て固定した。第四世紀に至り、コンスタンティヌス帝は自ら基督敎に歸依してその布敎を公認し、三二五年にニカイヤに宗敎會議を開いて、信仰箇條[7]、經典[8]、監督[9]を確立したので、統一的普遍的敎會[10]卽ちカトリック敎會の基礎が確立した。

やがて羅馬帝國が東西に分裂し(三九五年)東羅馬はコンスタンティノープルの本山を中心とし、西羅馬は羅馬の本山を中心として、基督敎を普及せしめたが、中でも羅馬本山は有名の指導者輩出して勢力を擅得し、その管長は、法皇(パパ、[11]父の意)の稱を獨占するに至つた。その

1) Petros.　2) Simon (Symeion)　3) Kepha.　4) Paulos.　5) Saulos.
6) Ecclesia　7) regula fidei.　8) canon.　9) episcopus.
10) una catholica ecclesia.　11) papa.

後東羅馬に於て希臘皇帝第三世による偶像廃止の事あり、羅馬法皇がこれに反對じて、フランク王の後援を得て皇帝から獨立してより、基督教はコンスタンティノープルを中心とする希臘カトリック教[1]と羅馬を中心とする羅馬カトリック教[2]とに分立した。（十一世紀中頃）これより西歐羅巴に於ては羅馬法皇とフランク系統の國王とが、和戰複雜の關係を保ちつつ、宗教的勢力と世俗的勢力とを保持して行つたのであるが、羅馬教會の勢力は頗る盛で、教會の外に救ひなし[3]の主張が自明の理として承認せられ、基督教的中世期の頂點が現出したのである。

基督教がかくして羅馬帝國内に普及し、つひに中世期の指導的勢力となり得たのは、教祖の犧牲、使徒の傳道、信者の殉教が民心を感動せしめたことに因るのは勿論であるが、同時に異教徒を基督教化するための教育制度が次第に發達したことに一層恒常的なる原因を負うてゐる。

家庭教育　初期の基督教教育は、何れの教育制度に於ても然る如く、家庭に於て行はれた。そして家庭の中心は母であり、母の愛と敬虔とが直接に子女の心情を信仰の雰圍氣に抱擁した。わけても聖母マリヤと基督との關係は、母性愛と信仰との典型として永く仰ぎ模せられたのである。

1) Greek Catholic.　2) Roman Catholic.
3) Extra ecclesiam nulla salus.

問答學校　併しながら異教徒を基督教化するためには、特殊の施設を必要とし、第二世紀頃より東方諸國に問答學校[1]が起つた。カテキュメナートとはカタ[2]（下に）エケオ[3]（響かせる）即ち言葉で教へる義より、問答を以て（それも初期は講述を主とし問答は唯反覆吟味の爲に行はれたに過ぎないのであるが）教授する學校の呼稱となつたのである。そしてその教授をカテケーゼ[4]、教師をカテケート[5]、生徒をカテキュメン[6]と呼んだ。この制度の目的は異教徒に洗禮を受ける豫備教育を施すことに存し、初めは成人を收容したのであるが、やがて兒童を入學せしめることとなり、その修業期間も初めは極く短日月であつたが、最盛時には二年乃至三年となり、その課程も三段階に分けられた。第一段は豫科生（又は聽講生）と言ひ、聖書講義及び説教の席に列し、神・基督・復活等に關する基礎觀念を與へられる。これを修了せる者は基督教徒[7]の證印を得て本科生（又は所禱生）となり、前段の教科を一層詳しく學び、懺悔の生活を修め、禮拜祈禱の式に列する。第三段は選拔生（又は有資格生）と呼ばれ洗禮候補者として更に種々の試煉を經過し、特に聖餐式に列することが出來る。聖餐式の始まる際に、第一第二段階の生徒は、「行けよ、集會は終れり」といふ意味の言葉"Ite, missa est (concio)"を唱へて退散する。聖餐式を「ミサ」と呼ぶのはこれに起因してゐる。以上三段階の修業を經た者が、洗禮を受け、正式の基督教徒として教會の成員に加へられるのである。

1) Katechumenat. (Catechumenal School)　2) κατά.　3) ἐχέω.
4) Katechese.　5) Katechet.　6) Katechumen.　7) christi.

問答教師學校　上述の問答學校は基督教への歸依を希望する民衆一般を對象としたが故にその程度も低かつたのであるが、これとは別に、かかる學校の教師、從つてまた教會の指導者を養成するための問答教師學校[1]がアレクサンドリア、カイサレア、アンティオキア、エデッサ等に發達した。これ等の東方諸市に於ては、教會の指導者たる者は、希臘の學藝に對抗して基督教の精神を辯明し擁護し基礎づける必要に迫られ、後述の如く所謂護教家として教父哲學の一派となつたのであるが、右の問答教師學校の首長は同時にこの護教家であり教父であつた。從つてまたこの種の學校に於ては希臘學藝も主要なる教科内容となり、而もそれ等が基督教の基礎づけや辯護に役立つ限りに於て、又役立つ樣な取扱方に於て、研究し教授せられ、ここに希臘學藝の基督教に對する交渉が始まつたのである。今この問答教師學校の首長として有名な二三人の人々を擧げれば次の如くである。

パンタイヌス[2]はストア派の哲學者で基督教に歸依した人であるが、紀元後一七九年にアレクサンドリアの問答教師學校の學長となり、希臘の哲學及び修辭學を基督教に奉仕せしめて上述の如き文化史的教育的職能に先驅をつけた。

パンタイヌスの後は教父哲學者クレメンス[3]が繼承し（一八九年）この人によつて基督教の學的基礎づけ―基督神學―が始められた。然るに二〇二年に基督教に對する迫害が起り、クレメンスは小亞細亞地方に逃れ、その地で歿した。二〇三年にその弟子オリゲネス[4]が學長となり、迫害の原

1) Katechetenschule. (Catechetical School).　2) Pantaenus.
3) Clemens.　4) Origenes.

典批判及び解釋を始めて新境に貢獻したが、二三一年に彼も亦アレクサンドリアを逃はれて小亞細亞に走り、パレスティナのカイサレアに問答教師學校を設けて、哲學・修辭學・物理學・天文學を始めとして文學・歴史・科學等希臘學藝の殆どすべての部門を内容とする教育を行つた。かくして問答教師學校は埃及・小亞細亞等の東方諸國に先づ起り、それが次第に全歐に波及するに至つたのである。

二　僧庵及び僧庵學校

僧庵の起源及び發達　第六世紀頃から數世紀間に亘り、基督教僧侶の修養所として、又中世に於ける殆ど唯一の文化保存機關として、重要なる史的役割を果したのは僧庵[1]である。これは元來獨り[2]で居る場所即ち隱遁所の語義を有し、早く第一、二世紀頃より埃及・小亞細亞等に於て、所謂隱遁者が物的肉的禁欲による精神の修養鍛錬の樣式として行つてゐたものを、第四世紀頃に至り基督教徒が採用したのである。基督教自身の本來の特色たる世俗的無關心、而して基督の再來と天國の實現とが近きにありとの信仰、基督教徒が俗界より受けたる迫害、ストア派やピタゴラス派の禁欲主義との結合、更に又第三世紀頃より漸く顯はれ初めたる基督教教會の俗化腐敗に對する不滿、これ等諸々の原因は相合して僧庵の興隆を促した。かくて紀元三〇五年に埃及の紅海海岸の沙漠に苦行の生活を試みたアントニー[3]に

1) Monasterium.　2) μονάς.　3) Anthony.

1) Pachomius.　2) Basilius. (329—379)　3) Athanasius. (295—373)
4) St. Benedictus. (480—543)　5) Regula Benedicti.

従つて、弟子パコミウス[1]は三二五年ナイル河畔のタベンナイに最初の僧庵を立て、千四百人の同志が集つた。やがてカイサレアの希臘教父哲學者バシリウス[2]が希臘に修學・旅行するに及んで僧庵生活は希臘に輸入せられ、又アレクサンドリアの監督アタナシウス[3]によつてそれは羅馬にも移された。併しながら僧庵生活の典型的整備は伊太利の聖僧ベネディクトゥス[4]によつて成された。彼はヌルシアに生れ、羅馬の腐敗せる空氣を厭ひ、五二九年ナポリに近きカシノ山に同志と共に僧庵生活を始めた。その生活樣式は所謂「ベネディクトゥスの戒律」[5]に規定せられ、これが爾來僧庵生活の理想と内容とに關する一般準則となつた。

僧庵生活の理想及び内容　ベネディクトゥスの戒律によれば僧庵生活を希望する者は一年間の試煉を經たる後、住所の不動、道德の更改、「從順」の三誓約なさねばならぬ。第一は僧庵を生涯の住家としてそこを去らないことを意味し、第二は從來の世俗的欲求を棄てて、貞潔と貧窮とを理想とすることであり、第三は長上・戒律への絶對服從である。故に通常僧庵生活の理想は、貞潔・貧窮・從順の三つとして指摘せられる。貞潔は凡そ性的關係の絶滅であり、人間の自然的結合たる家族を否定して、宗教的關係による別個の社會を僧庵内に設定せんとするのであつて、かくしてのみ俗世間よりの絶緣を標榜する基督教の趣旨は徹底し得ると考へられたのである。次に貧窮の理想に從つて、僧庵生活者は一切の物的財產の所有權と相

1. 僧庵の筆寫室

2. 僧庵學校の内校と外校

1) caritas.

績權とを放棄する。僧庵はそれ故に一種の共產社會である。神への奉仕は財への奉仕と兩立しないといふ原始基督敎の精神はここに生かされ、後世に至るまで基督敎道德の代表的地位を占めた博愛[1]も本來自己の所有財產を惜みなく他人に施與することの理想に基づくのである。第三に長上の命令、同僚の意志、精細なる戒律に徹底的に服從して何等自己の意欲を貫かぬ所に從順の理想は遂げられる。命ぜられたる所は、假令自己の力に餘る事でも神の助力を信じて、敢てこれに當るのである。そして他方では世俗の制度、拘束の何物にも從はぬが故に、僧庵生活は國家的權力關係からの超絕である。要するに僧庵生活の理想は、當時の世俗的生活並びに世俗化されたる敎會生活に對抗して、原始基督敎の精神を極度に徹底せしめることに存し、上述の三德目はその代表的標榜であり、又この理想は、世間と隔絕せる別天地僧庵に於てのみ、完全に實現し得ると考へられてゐたのである。

上述の三大理想を實現するための生活內容は何であつたか。ベネディクトゥスの戒律は七十三箇條より成り、その中九箇條は僧庵長及び僧侶達の一般的義務に關し、十三箇條は禮拜に關し、二十九箇條は訓練、過失懲罰に關し、十箇條は僧庵の經營に關し、殘りの十二箇條は來客の應待や旅行中の心得など各種の事項に亙れる戒律である。これ等の內容は、一日を七新時時に配分した時間割に從つて嚴格に行はれた。殊に注目すべきは、「閑散は精神の大敵である」との原則に基づき、一日少くとも七時間は勞働に從事したことであつて、これは東方諸國の僧庵の怠惰閑散の生活に比べて、べ

ネディクト・ス規律による西方諸國の僧庵生活の著しき特徴である。そして勞働の種類は、開墾・農業・大工・鍛冶・織物等であつて、これ等の作業は夫々當時の世俗の産業に刺戟と模範とを與へただけでなく、身體的勞働が精神に及ぼす良影響―賀令消極的意味に於てであれ―を認めた點に於て、モンローの言へる如く、作業主義教育の遠き淵源として教育史的意義を有する。右の外更に注目すべきは、勞働の中に讀書及び記錄の蒐集・筆寫が行はれ、それが教育と學藝の保存との上に貢獻したことである。讀書は既にパコミウス及びバシリウスの僧庵に於ても行はれたのであるがベネディクト・スの規律は、毎日二時間乃至五時間を讀書に割くべき事を規定した。併し學藝の重要性が一段と強調されたのは、東ゴート國の學者且つ政治家たるカシオドールス[1]によつてである。彼は希臘羅馬の學藝に通曉せる身を以て五四〇年頃南伊太利のウィヴァリウムにベネディクト・ス派の僧庵を設け、僧侶に聖書及び宗教書の外に異教の學藝をも奬勵した。かくて僧庵生活に於ける讀書、その必要のための書籍の蒐集・筆寫・保存、又後輩たる僧侶に對する教授が普ねく行はれるに至つた。殊に各僧庵は「筆寫室」といふ特別室を有し、聖書及び教父の書を(稀に希臘羅馬の古典をも)筆寫して、文獻の保存に貢獻した。尤もこの筆寫用紙たる羊皮紙の不足に因り、古書を塗り消してその上に筆寫することが行はれ、ために却て古書の消失を招くといふ皮肉な結果すらあつたけれども、ともかく中世期前半の所謂暗黒時代に於て、僧庵は學藝並びに教育の機能を擔當する殆ど唯一の機關となつた。但し書籍の數が少く僧侶の學藝の水準が概して低く、一般には異教學藝に對する偏見敵視もあり、殊に學藝の研究はそれ自身が目的ではなくて精神の開發を防ぐための手段に過ぎなかつたこと等のために、僧庵の學藝は想像され得べき程度よりも遙かに低級不振であつたのである。

1) Cassiodorus. (480—576)

1) Klosterschule. (Monastic School.)　2) pueri oblati.
3) schola interior.　4) externi.　5) schola exterior.
6) septem artes liberales.　7) trivium, artes triviales.
8) quadrivium, artes reales.　9) Trivialschule.　10) scholae ad plenum.

僧庵學校　僧庵は單に成人たる僧侶を收容しただけでなく、將來僧侶たらんとする兒童を、五歳乃至七歳位より收容して十五歳位まで教育し、更に僧侶志望者以外の一般兒童をも收容して二種の教育を施した。ここに於て僧庵にはそれに附屬する僧庵學校[1]が出來た。そして僧侶志望の子弟をば正員(神に獻ぜられたる子供の意)[2]として内校[3]に、一般子弟をば外員[4]として外校[5]に收容した。子弟の數は少きは數人を出でず、多きは百人に達した。何れも僧庵に宿泊し授業料は無料であつたが贈物を贈ることはあつた。

僧庵學校の訓育は極めて嚴格であつて懲罰には斷食や苦業や鞭撻が多く行はれ、起床より就寢までの一學一動が嚴重な規律と監督とによつて律せられた。但し日曜と祭日及び祭日の前日は休日となり、この日には遊戯や饗應や遠足を以て祝はれた。

僧庵學校の教授は初等の教科と高等の教科とに分れてゐた。初等教科としては、讀方書・唱歌・算術・羅甸語が課せられ、高等の教科としては所謂七自由科[6]が課せられた。七自由科は更に三學[7]即ち文法・修辭學・辨證法と、四藝[8]即ち算術・幾何學・音樂・天文學とに分れてゐた。小なる僧庵學校は三學の教授のみに止まり―それを三學學校[9]と呼んだ―四學は大なる僧庵學校のみに行はれた。「完全なる學校[10]」と呼ばれる場合には、七自由科の外に神學も教授せられた。

托鉢僧團　僧庵の外に、基督教の本旨を實踐するための新しい企てとして、托鉢僧團が生れた。伊太利のフランチェスコ[1]によつて創められたフランシスカン[2]及び西班牙のドミニクス[3]によつて創められたドミニカン[4]がその主なものである。これ等の宗團は羅馬法王に認可せられ、世界各地を巡禮し、使徒に倣つて貧困と謙遜と奉仕とを旨とし、原始基督教の精神を世に弘めるのに貢獻した。フランシスカンは平民的で特に貧民救助に力を盡し、ドミニカンは高等教育にも關心を有し、後述の諸大學の中には(例へばボロニヤ、巴里、オックスフォード等)はこの派によつて建てられたものが多い。トマス・アクイナスの如き學者もこの派に屬してゐた。

三　本山學校

本山學校の性質　基督教會の監督[5]の居る本山[6]の即ち各都市の首位的地位にある教會には、僧侶養成並びに一般子弟教養の目的を以て學校が附設せられた。これを監督學校[7]若しくは本山學校[8]と呼んだ。これ等はまた貴族富豪の寄附によつて設けられたものが多かつたので寄附學校[9]とも名づけられた。フランク王國の宗教家でメッツの教會の監督であつたクロードガング[10]はこの種の學校の創立者と言はれてゐる。

1) Francesco. (1181—1226)　2) Franciscans.
3) Dominicus. (1170—1221)　4) Dominicans.　5) Episcopus.
6) Cathedra.　7) Scholae episcopales.　8) Scholae cathedrales.
9) Stiftschule.　10) Chrodegang. (+766)

本山學校の內容　本山學校はその內容に於て僧庵學校と殆ど同一であつた。即ち內外兩校を區別して、僧侶志望者と一般子弟とを收容し、教科目も僧庵學校と同樣であつた。生徒は總數三四十人を超えなかつた。但しその學校管理者は本山の僧の一人で、「學頭」[1]と呼ばれ、後には專に「學者」[2]と呼ばれた。その下に教授の實際に當る「教師」[3]があり、又特に唱歌の教授に當る「唱歌教師」[4]があつた。更に生徒を若干の分團に分け、各分團に古參生徒を配屬せしめて、監督に當らせることも行はれた。基督教義の學的基礎づけとして中世哲學の主體を成した所謂スコラ哲學は、本來この本山學校の教師スコラスティクスによつて研究せられたものである。

1) Magister Scholarm. (Archimagister)　2) Scholasticus.
3) Magister, (Rector)　4) Cantor.

第三節　基督教義の組織及び基礎づけとその教育的意義

一　教父哲學の概觀

教父哲學の意義　既述の如く、基督教が羅馬官憲の迫害と猶太思想並びに希臘思想の反對とに抗してその勢力を扶植するためには、一面に於て教會制度の整頓と信徒教化事業の發達とが必要

であつたと共に、他面にはその教義が學的に組織せられ基礎づけられ、信仰と理知との合致が證明せられねばならなかつた。所謂教父哲學[1]とスコラ哲學[2]とは、かかる必要に應じて起つた一聯の中世哲學である。元來教父とは「教會の父[3]」の義であり、初代基督教會が信仰上の指導者に與へた一般的尊稱であつたが、やがて各都市の首位的教會の長たる監督に與へられ、更にカトリック教會に於ては、信仰の學的基礎づけに貢獻せる人々を特に教父と呼ぶに至つた。

使徒パウロとヨハネ　基督教神學者の最初に擧げらるべきは使徒の一人たるパウロ[4]である。猶太人として生れ猶太教の律法主義によつて育てられ、基督教への迫害を以て出發した彼は、やがて突如の回心によつて熱烈なる基督信者となり、先づ猶太人を教化し、進んで小亞細亞・希臘・羅馬の各地に傳道し、民族と國境とを超えて眞に人類の宗教としての基督教を建設し、單に教會の創設者としてのみならず、基督神學の創始者として不朽の功績を遺した。彼によれば、人類はアダムの墮落と共に神に背き原罪を負うた。然るに神は人類を憐み、贖罪のために基督を送つた。故に人類の救濟は律法によるにあらずして、神の恩寵による。人類は復活せる基督を信ずるにより、神の恩寵に浴して永遠の淨福を得るのである。新約聖書中の『使徒行傳[5]』は彼の事蹟を錄してゐる。

同じく猶太使徒の中で基督神學の創始に貢獻したのはヨハネ[6]である。彼は神の子基督を以てロゴス即ち神の完全なる實現と考へ、それは光と眞理と生命との源泉であつて、惡魔の支配する暗黑と虚偽とに打克つもの、それ故に基督を信ずる者は、救はれて神に歸することが出來ると說いた。彼の思想はその二元的世界觀及びロゴス說に於て、アレクサンドリアの猶太人哲學者フィロ[7]並びに後述の護教派の教說を前提として居り、ためにそれは果して歷史的ヨハネの思想であるか

1) Patristik. (patristic philosohy)
2) Scholastik. (scholastic philosophy)　3) patres ecclesiae.
4) Paulos, (3 B.C.—67 A.D.)　5) Prox.　6) Johannes. (+100)
7) Philo. (2 B.C.—A.D.)

否かが疑はしいけれども、ともかく基督教は早く第一世紀に於て上述の學的基礎づけを受けたのである。ヨハネ傳、ヨハネ第一第二第三書、ヨハネ啟示錄[1]は彼の事蹟を知るべき史料である。

護教派とグノスティック派　基督教義を羅馬官權の迫害と異教哲學の攻擊とに對して辯護することを任とした護教派[2]も亦初期の基督教神學史に重要なる地位を有する。その代表者はユスティーヌス[3]である。彼によれば、眞理はすべてロゴスの啓示であり、ロゴスは人類のはじめよりあり、希臘の哲學者達に於ても啓示せられたのであるが、但しそれは部分的であり不明瞭であつた。然るに基督に於てロゴスは完全に啓示せられ、基督はロゴスの人格化である。故に基督教は完成せる眞理であり、それのみが眞實の最高の哲學である。かく說くことによつて、希臘哲學と基督教とは共にロゴスの顯現として一聯の結合を與へられ、而も基督教は希臘哲學の完成といふ地位に置かれて、異教思想に對する基督教の立場は高く擁護せられたのである。

かかる傾向を更に進展せしめたものが所謂グノスティック派[4]である。彼等の共通の目標は基督教の信仰を單なる信仰[5]に止めずして知識[6]たらしめんとするにあつた。但しここに知識とは理論的知識ではなくて神秘的直觀的に把握せられる知識である。彼等は舊約聖書の創造神たるエホバを以て單なる造物主[7]とし、最高神をばこれより區別した。即ち惡なる物質の主サタンと、善惡二元の世界の創造者デーミウールゴスとを覆滅して人類を惡より救ふ者は、それ等の上に位する最高眞實の神であり、基督はその最高神の子である。善惡の爭鬪を以て貫かれたる人類の歷史は、基督の出現により、善の勝利によつて、終局に達した。希臘の多神教や猶太の律法教が基督教によつて征服せられたのはこれを意味する。ここに基督神學は一種の歷史哲學的形態に於て組織せられた

1) Apokalypsis.　2) Apologeten.　3) Justinns. (100—156)
4) Gnostiker.　5) πίστις.　6) γνῶσις.　7) δημιουγός.

のである。

上述の如きグノスティック派の思想は、當時漸く組織を固めて來た教會―特に所謂使徒相傳の司教を戴き「普遍的なるもの」[1]を標榜して發達したカトリック教會―の教說と矛盾し、護教派の一派によつて異端として排擊せられた。その護教派一派の主要代表者は教父イレナイオス[2]並びにその弟子ヒッポリトス[3]及びテルトゥリアーヌス[4]である。就中テルトゥリアーヌスの如きは、辯じて希臘思想を以て信仰を說明せんとする學に反對し、人間自然の意志や理性の腐敗を論じ、哲學を異端の母と罵り、基督教が理性に背けるは知つてその眞理なる所以であると主張した。「不合理なるが故に我信ず」[5]とは彼の標語であり、神の子の磔殺は恥づべきことなるが故に彼はそれを聖と思はず、神の子の死せるは不合理なるが故に彼はそれを信じ、神の子が埋められて蘇れるは不可能事なるが故にそれは確實なる事であるとの逆說的主張を彼は敢てした。要するにグノスティック派の勃興は、造物主の貶黜、神と、物質との對立、知識の過重等に於て基督教本來の面目に背きその歷史的基礎を危くするものであつたが故に、護教派一派はこの主知的强敵との奮鬪によつて、單純なる道德的宗教、他處も信仰に立脚せる宗教としての基督教を擁護し「正統教義」としての教說と、その把持者としてのカトリック教會とを安固ならしめんとしたのである。

グノスティック派が基督教を希臘哲學化せんとして排斥せられたのに對し、アレクサンドリア問答學校の學風たりしクレメンス及びオリゲネスは、既に述べた如く、教會の信仰を基礎として基督教の哲學を組織し、一種の護教的役割を果した。就中主要なるはオリゲネスであつて、彼は教會の所傳(信仰・規則)及び教會の制定せる聖書を前提とし、而も聖書をば、歷史的事實の記錄としてよりも

1) τὸ καθόλου.　2) Irenaios. (140—200)　3) Hippolytos. (+235)
4) Tertullianus. (100—230)　5) Credo quia absurdum.

寧ろ哲學的眞理の寶庫とし、所謂寓意的解釋の立場に於てその眞意義の闡明に努力した。彼によれば、第一に父なる神は絕對なる靈にして不變單一なる者であり、第二に基督卽ちロゴスは父なる神の意志により生じ、それに從屬する所の第二の神であつて、世界を創造せる者である。第三に聖靈はロゴスの子であつて、神とロゴスとの關係はロゴスと聖靈との關係に等しい。而して第四に被造者たる信徒の靈は神の眞社に與り得べき者であるが、その與へられたる自由の誤用によつて罪惡に陷り神を離れてゐる。併し未だ全く神性を失つた者ではないから、自由の善用と神の恩寵とによつて悉く神に復歸することを得べく、この一切の靈の神に復歸することが卽ち世界歷史の究極の到達地である。

ニカイア會議以後の發展　以上の如き基督教神學の發展は、更にニカイア宗教會議(三二五年)を始めとする大會議の召集によつて、益々その步武を進めた。卽ちニカイア會議に於てアタナシウス[1]は、子なる神(基督)は父なる神と全く同質であつて、兩者の關係は被造者と創造者との關係ではなく、寧ろ光線が太陽より發する如く、同質者が內面的必然性によつてであつて、(父なる神の意志によつてではなく)生じたものである。後コンスタンティノープルの會議(四五一年)に於ては、更に聖靈をも加へて、神、基督及び聖靈の「三位一體」の教義は成立した。更にエフェソス(四三年、四四九年)及びカルケドン(四五一年)の諸會議を經て、基督は一身に於て神と人との兩性を合一せりといふ「神人」の說が決定するに至つた。

併し教父哲學者として最大の教說を成就したのは、アウグスティーヌス[2]である。北アフリカのヌミディアに異教徒パトリキウスを父とし、基督教徒モンニカを母として生れ、青年時代の放浪試驗

1) Athanasius. (295—373)　2) Augustinus. (354—430).

を經て、三八七年頃基督教に歸依し、三九一年以來ヒッポ教會に職を奉じ、教父哲學の成熟に貢獻した。彼によれば原人アダムは罪惡を犯さざるの自由を有してゐたけれども、自由の誤用によつて、その子孫たる人類は永遠に罪惡を犯さざるを得ざる性を享け、自由を失つて奴隸狀態に陷つた。これが卽ち人間性に宿命的に根ざせる原罪である。かくの如く人間は罪惡の奴隸なるが故に自らは救濟に與せず又救濟を求める權利をも有しない。救濟は全く神の任意による恩寵の賜である。而してこの救濟の事業は基督の贖罪によつて行はれ、その事業を繼續するものは、基督の代表者たる教會である。故に今や教會の外に救濟の途なく、教會のみが赦罪の權力を有するのである。アウグスティヌスはかかる教說によつて教會の信仰を基礎づけ、カトリック教會そのものを磐石の安きに居らしめ、教父中の最大なる者として仰がれたのである。『神國論』[1]はカトリック的見地に立つ世界史論で、歷史哲學の素描をなし、『懺悔錄』[2]は前半生の自傳を叙して內的生活をよく現し、神學上の主著としては『三位一體論』[3]『ラウレンティウスへの手書』[4]『基督教義論』[5]がある。

二　スコラ哲學の概觀

スコラ哲學の意義　前項の教父哲學は、基督教義の學的基礎づけであるよりも、寧ろ基督教義そのものの學的組織であり、哲學であるよりも神學である。かくして略ゝ完成せられた基督神學を所與の眞理として前提し、それの哲學的基礎づけを事とせるものが卽ちスコラ哲學である。その職分は信仰と理性との合致を證明する事に存し、教會の信仰に合理的基礎を提供するにある。例へば「神は人となりたり」[6]とは教會の神學の教へる所であつて疑の餘地なき眞理であり、唯何故に神

1) De Civitate Dei.　2) Confessiones.　3) De Trinitate.
4) Enchiridion ad Laurentium.　5) De Doctrina Christiana.
6) Deus homo.

は人となりしか[1]——アンセルムスの著書の名——といふことのみがスコラ哲學の問ふ所である。かくしてスコラ哲學は、哲學には相違なきも、哲學本來の面目たる自由獨立の學的勞作ではなくて、寧ろ神學に奉仕するもの、所謂「神學の奴婢[2]」に過ぎなかつた。而してかかる哲學は、教會附屬のスコラ(學校)に學を誇ぜし「教會の教師」卽ち既述のスコラスティクス(學者)によつて成されたが故に、スコラ哲學の名を得たのである。

スコラ哲學の發生　スコラ哲學は第九世紀より第十二世紀に至る間を創立時代とし、その代表者は、カンタベリーの僧正アンセルムス[3]である。彼によれば、信仰は認識に先立つて存し、理解力なき者は信仰のみにて滿足すべきであるが、理解力ある者は進んで信仰より認識に到達せねばならない。「余は理解せんがために信ず[4]」といふ彼の語はこれを意味する。而して哲學は不信者すら首肯し得るやうに宗教の眞理を證することを任務とする。彼はこの任務を遂行して神の存在と教濟とを論證した。卽ち第一に彼はプラトーンのイデア論を採用し、あらゆる事物の普遍的述語たる「あり」といふことは、絕對的存在者への關與——存在そのものゝイデアの分有——を意味するが故に、絕對的存在者といふイデアは當然要求されねばならぬ。これが卽ち神である。而して神は一切の存在中の最高完全なる存在者であるが故にそれは實在しなければならぬ。實在せざるものは完全性を缺如するからである。かくして彼は所謂存在論的に神の存在を論證した。第二に彼の教濟論によれば、一切の被造物は創造者たる神の光榮を顯はさんがために造られ、而して天使と人間とは一切の被造物中最高なる理性的存在者なるに、自由を誤用し罪惡に陷り神の光榮を損傷した。人類が神に對して負へる無限の罪過は、人類の絕滅といふ正當の刑罰によつてのみ贖はれる

1) Cur Deus homo.　2) Ancilla theologiae.
3) Anselmus. (1033—1109)　4) Credo ut intelligam.

のであるが、絶滅は創造の目的(人類の福祉)に反するが故に、寧ろ無限の功德によつて無限の罪過を贖はねばならぬ。然るに無限の功德は神のみ能くする所であり、而も人の罪過は人がこれを贖ふことを要する。茲に於て神にして同時に人たる者、即ち「神人」のみが贖罪の任を負ふことが出來る。基督の絢歌は實に罪なき神人が人類に代つて贖罪の責を果したものである。故に人は基督によつて始めて救濟を得る。これがアンセルムスの救濟論の骨子である。

アンセルムスが上述の如くプラトーンのイデア實在論によつてスコラ哲學を基礎づけてより、カトリック教會は、この實在論[1]によつてその根柢を固めた。即ち「普遍者は個物に先立ちて存する實在なり[2]」といふ命題を以て、普遍者たる教會は、その成員たる個々の信徒の上に存する實在であるとした。又神と基督と聖靈とは共通の本質たる普遍者に合一するものであり、かかる普遍者は實在するといふことによつて、三位一體說を基礎づけ一神教の根據を固めたのである。

かかる實在論に對して「普遍者は個物の後に存する名目に過ぎず[3]」といふ名目論[4]を創唱したロスケリーヌス[5]はソアッソンの會議に於て異端として排斥せられた。

然るにアベラルド[6]はプラトーン實在論と名目論との中間的地位を占め「普遍者は個物の中に存する實在なり[7]」と主張した。これはアリストテレース的實在論の立場であるが、彼はアリストテレースを讃るとなくして獨立に之を唱へたのである。

スコラ哲學の全盛　アベラルド[8]を過渡期として、スコラ哲學は創業時代より全盛時代十三世紀に進んだ。それはアリストテレースの實在論の採用を以て特色づけられる。アリストテレースの著作は初めアラビヤの學者、特に東方に於けるアヴィヴェンナ[9]と西方に於けるアヴェロエス[9]によつて研

1) Realism.　2) Uriversalia sunt realia ante res.
3) Univesalia sunt nomina post res.　4) Nominalism.
5) Roscellinus. (1050—1123)　6) Abaelardus. (1079—1142)
7) Universalia sunt realia in rebus.　8) Avicenna. (978—1036)
9) Averroes. (1126—1198)

究せられ、それが獨太人の手を經て西歐に傳へられた。而も當初は異端として斥けられ、物理學書は一二一〇年に、形而上學書は一二一五年に教會によつて禁書とせられた。併しやがて自然的眞理と宗教的眞理との分離を防止して兩者を結合することがスコラ哲學に取つて必要とせられるや、アリストテレースはまさにその用に供立つものとして歡迎せられるに至つた。この運動を導いてスコラ哲學の全盛を將來し、「天使の如き教師[1]」として尊敬せられたのはトーマス・アクィナス[2]である。彼はアリストテレースに於ける質料と形相との關係を採用し、自然界は最下級より最上級まで質料と形相との關係によつて開展し、その極致は人間であり、而して人間生活の中では教會によつて與へられる恩寵經の生活(即ちサクラメント)が最上であるとした。かくてトーマスに於ては、自然界と恩寵界、國家と教會、世俗の德(希臘の四德)と宗教上の德(信・愛・望)とは、夫々質料と形相、手段と目的、下位と上位との關係に考へられた。理性と信仰とも亦この關係にあり、信仰は理性の上に位し理性を完成せしめるものとした。トーマスはかかる整然たる秩序の世界をば可能なる世界中の最善なるものとし、それ故に神が世界を創造する動作は善の觀念によつて規定されてゐると說いた。換言すれば神は智力の善と認める所を必ず意志するものであつて、人間に於ても亦その意力は智力によつて決定せられる。これが即ちトーマスの決定論[3]である。

この決定論を精細に批評し能く反駁して「精說なる教師[4]」の尊稱を得た者はドゥンス・スコトゥス[5]である。彼はトーマスの所說は世界に於ける偶然と惡とを否定して一切を必然的善に歸せしめ、萬有神教[6]を導き出すこと、又それは神の自由意志を否定し、神の獨立性を零ふものであることを指摘した。そして世界に於ける偶然及び惡の存在の事實よりしてトーマスの說を駁し、又神の絶對的自由を主

1) Doctor angelicus.　2) Thomas Aquinas. (1225—1274)
3) Determinism.　4) Doctor subtilis.　5) Duns Scotus. (1274—1308)
6) Pantheism.

張し、論じて意志は智力の上に位するものであり、善はそれ自らが善なるにあらずして神がそれを意欲せるが故に善であると說いた。而してかく意志を重んずる立場はおのづから個體の尊重に歸結した。蓋し智力はすべてに共通普遍なるに對して、意志は個別的差異の原因であるからである。スコトゥスによれば個體は普遍性と個性との結合せるものであり、普遍は個體に於てのみ實在する。これは實にアリストテレースの實在論の立場に外ならぬのである。そしてこの立場は一歩を進むれば名目論に到り得べきものであり、茲にスコラ哲學衰頽の種子が包藏せられてゐる。

スコラ哲學の衰頽　スコトゥスの弟子ウィリアム・オッカム[1]は「普遍者が個物の中に存在する」といふアリストテレース的スコトゥス的實在論は普遍的一者が多くの個物に存在するといふ不合理を導くとして之を反駁し、普遍者は實在ではなくして單に若干の個物を間接に代表する符號に過ぎずと主張した。換言すれば個一に個物のみが實在であり、個二に個別的表象も個物を直接に代表するといふ意味に於て實在であり、個三に個別的表象の若干を概念化せる普遍的表象は個物を間接に代表するが故に實在ではない。かくしてオッカムは普遍者を以て單なる名目に過ぎずとする名目論に陥り、從つて、普遍者の認識と求むる神學の不可能を論結し、宗教上の事は理性を以て證明すべきにあらず、須く教會の教條に從つて信仰すべきであると主張した。信仰と理性とは茲に分離せざるを得なくなり、スコラ哲學の本來の意圖は放棄せられたわけである。オッカムによれば教會と國家との關係も亦信仰と理性との關係に等しく、兩者は全くその權力範圍を異にする。茲に世俗の政權は國家に一任し、教會は唯靈魂に關する事のみを司らねばならぬ。オッカムのかかる見解は教會と信仰とを破壞せんとするものではなく、却つて教會がその本分を忘れて世俗化し墮落し行く傾向を救はんがために教會の分離を唱へ、又信仰が不完全なる人間的認識との握手によつて却つて危險を誘ふことを恐れ、信仰をその獨自の地盤に安固ならしめんとしたのである。かくて教會と信仰との保護のためにオッカムはスコラ哲學の破壞を將來し、尚もそこに教會より獨立せる近世哲學の種子を撒き、認識の否定に於て後に起るべき懷疑論の準備をなし、又感官的個物表象を實在とすることによつてやがて後の生國(英國)に發生すべき經驗論の先驅をなしたのである。

1) W. Occam. (1280—1347)

三　教父哲學及びスコラ哲學の教育的意義

教育の內容に及ぼせる影響　教父哲學を前身としスコラ哲學を本體として、基督教神學の組織とその哲學的基礎づけとが行はれた事は、中世の教育に果して如何なる影響を及ぼしたであらうか。吾々は先づそれが中世教育の內容に新しき要素と深さとを與へたことを認めねばならぬ。下級上級の問答學校より發達學校、本山學校に至る迄の基督教教育機關が教科の主要內容としてゐた基督教義は、その程度の高低はともあれ、何れも單なる信仰としてではなく學的形態に整頓され根據づけられたものとして教へられたのである。又後述の如く、やがて勃興する西歐の大學に神學が主要教科としての地位を確保したのも、上述の如き學的努力の成果を示すものである。かくて例へば初期スコラ哲學者の代表的著作たるペトルス・ロムバルドゥス[1]の『意見集[2]』は中世を通じて教義上の教科書とせられ、又トーマス・アクィナスの『神學汎論[3]』は遂時スコラ哲學の最も組織的なる著作であつて、近世に至るまでカトリック教の教科書となつて來た。而して希臘哲學が基督教神學の奴婢として、それに役立つ限りの部分と形態とに於て採用せられた事は、中世教育の內容に對する

1) Petrus Lombardus. (1199—1100)　2) Sententiae.
3) Summa Theologicae.

希臘哲學の參加並びにその變容として教育史的にも意義あることである。更にかかる神學の隆盛教科たる所謂七自由科の中で、特に論理的思考の修練に役立つ辨證法が文法に代つて重要性を得て來たのも、中世普通教育の内容上の一變化と見なければならぬ。

教育の方法に及ぼせる影響　上述の如き内容上の變化は同時に教育方法の變化をも齎來した。基督教神學の方法を一貫するものは、嚴密なる論理的思考である。そしてかかる論理に支へられて、プラトーンやアリストテレースの形而上學・自然哲學等を、基督教義の上に適用することである。換言して學の研究方法は、その學を内容とする教科の教育方法を規定するが故に、中世神學の方法は同時に中世教育の方法であつた。そこでは教科内容の分類・整序の方法並びにそれ等を學習せしめるための講義・問答・討論等の方法に於て、希臘以來發展し來れる論理の諸形式が嚴密に適用せられたのである。而してこの方法がその本質に於て抽象的思辨であり、經驗的事實に立脚せる科學的方法でないことは勿論である。かくてオッカムのウィリアムの學説がトーマス説の實在論とその「古き方法」[1]とを批評して名目論を樹立するために用ひた所謂「現代的方法」[2]は、信仰と知識との區別を結果して、やがて近世の經驗科學的方法の發生を遠く促したと解し得るけれども、中世期を通じての研究並びに教育は專ら論理的思辨を方法上の特色としてゐたのである。スコラ哲學が「須臾哲學」と譏せられるものもこの事實を暗示するものであらう。

1) Via antiqua.　2) Via moderna.

第二章　世俗的教育

第一節　カール大帝を中心とするゲルマン族の教化事業

一　カール大帝及びルードウィッヒ敬虔帝の事蹟

カール大帝の事蹟　基督教に教化せられつつも現實的には頽勢止め難く遂に滅亡したフランク王國民に代つて、中世文化に素朴新鮮なる活力を與へ、やがて近世文化の原動力となつたのはゲルマン民族である。北歐の森の中に養へる雄勃たる意氣を全歐に發散せる彼等は、基督教に導かれ又それと和戰幾度かの交渉を重ねつつも、彼等獨自の社會組織と文化とを徐々に築いて行つた。而して彼等の建てた諸邦國の中で教育史上先づ注目すべきはフランク王國である。

宮相マルチルの回教徒撃退の大功と、その子ピピンのロムバルディア平定、法王領獻上の偉績とを承けて、更に基督教擁護の大業を成し、羅馬法王より帝冠を受けて(八〇〇年)全基督教

1) Karl der Grosse. (Charlemagne, r. 768—814)
2) Alcuin. (735—804)

國に君臨せるカール大帝[1]即ちシャールマンは、七七三年以來その征戰の途次羅・伊太利に赴き羅馬を訪れ、希臘羅馬の文化に接觸して、自らが單なる征服者としてでなく、文敎の保護者として、民の上に立たんとの志を抱いた。七八一年に英國ヨークの監督學校長アルクィン[2]は羅馬より英國へ還る途中パウィアに於て大帝に接するの機會を得た。大帝はこの高貴博學の人を得て自國の敎化の師となさんことを決意し、これをアルクィンに乞うた。アルクィンは英國に歸つて大僧正にこの事の許可を受け、翌七八二年にフランク王國に多くの門弟を伴つて來た。その中には希臘語に通達せるパウルス・ディアコヌス、文法家ペトルス・フォン・ピサがあり、又西班牙からも詩人テオドルフが招かれた。これ等の人々により、舊來存在した宮廷學校は面目を一新して勃興し、大帝自ら王族及び貴族子弟と共にここに學んだ。又宮廷學校の外に學者達の研究團體も出來て學術の論議研究が盛に行はれた。當時の主要敎科目は、神學の外に、羅甸語・希臘語・文法・修辭學・辨證法・算術・天文學等である。ここに大帝がゲルマン民族をば、希臘羅馬以來の世俗的學藝によつて敎化せんとせる大抱負が窺はれ、この點に於てまた大王の事蹟は最初の文藝復興であり、最古の人文主義であると言ふことも出來る。

併しながら大帝はゲルマン民族の敎化をば、當時の唯一の文化的機關たる敎會及び僧庵を通して之を行はんとした所に中世的制約を免れなかつた。大帝は七八七年に國內の僧

1) Pfarrschule. (Parish school.)
2) Ludwing der Fromme. (r. 814—840)

正及び牧師に對する回章を發し、當時讀書を殆ど全く知らざる狀態にありし彼等に修學を勸奬した。然るにこれは餘り奏效しなかつたので、七八九年に首都アーヘンの宗敎會議を介して法令を布告し、すべての僧庵學校及び本山學校に於ては、兒童に(將來僧侶たらんことを希望すると否とに拘らず)讀・美・歌・文・字・唱・歌・敎會の休日の計算・文法を敎授すべきことを命じた。そして、王の使臣たる官吏は諸地方の僧庵及び敎會を巡察してこの法令の實施を監督したのである。その後も屢々布告を發したが最後に大帝は各敎區が夫々學校を設立して敎區內の子弟に宗敎敎育並びに世俗の普通敎育を施すべきことを布告し、特に羅甸語の外に獨逸語をも敎授すべきことを命じた。これが所謂敎區學校[1]である。要するに大帝の事蹟は國家の權力によつて敎育を勸奬する事に關する近代的企圖の先驅であり、而もそれが先づ基督敎の敎育機關を介して行はれた所に中世的色彩を示してゐるのである。

ルードウィヒ敬虔帝の事蹟　カール大帝の歿後その子ルードウィヒ敬虔帝[2]が大帝國に君臨した。帝は文武兩道にすぐれてゐたが、特に早くから羅馬・希臘の學藝を愛好し、世俗の學に關心を抱いてゐた。但し僧庵生活の世俗化には反對し、八一七年のアーヘンの國會に命じて、爾後僧庵學校は僧侶志望者のみを敎育すべきことを規定した。蓋しそれ以外の子弟が入ることは、僧侶たるべき者に早くから眞摯敬虔の生活を閑離する上に妨害となると考へたからである。そして同時に本山學校も亦僧侶にある子弟のみを敎育すべきことが布告せられた。併しこの反動的布告は忽ち多く

の故障を生じ、八二二年のアッティグニィの國會に於ては再び僧侶の無學が痛嘆せられてその對策が議せられ、爾來僧庵學校及び本山學校に既述の如き內校と外校とが設けられることとなつた。更に八二九年の巴里の宗教會議の勸議に基き、同年のウォルムスの國會に於ては、神學の外に特に自由科[1]即ち公衆科を教ふべき公衆學校[2]の必要が要求せられ、爾來僧庵學校は事實上內校、外校及び公衆學校の三者を兼ねた教化機關となつたのである。

二　アルクィン及びラバーヌスの事蹟

アルクィンの事蹟　カール大帝に十餘年間奉仕したアルクィンは七九四年にツールのサン・マルクン僧庵の長に任ぜられた。それは莫大なる財產と二萬人の奴隸とを擁するフランク王國第一の僧庵で、そこの僧庵學校と共に當時の文化及び教育の中心となつた。但しアルクィンの思想は次第に保守的傾向を取り、自らが少壯時代に學修せる古典學藝をば子弟に對しては禁止し、專ら基督教學藝の研讀と嚴格なる宗教的修養とを要求した。尤も普通教科としての七自由科は進んで勸奬し、彼自ら文法、修辭學、辨證法、算術及び七自由科に就いて、問答形式の教科書を著した。而もこれ等は彼に於ては、宗教的眞理の頂點に上るための基底に過ぎないのである。他方アルクィンは僧庵に書籍の乏しきを嘆き、英國に人を遣して書籍の蒐集と筆寫とに努めしめ、ツールの僧庵に大なる文庫を造り、又他の僧庵にも之を模倣せし

1) studia publica.　2) scholae publicae.

めた。かくしてアルクィンは八〇四年に歿するまで、晩年を全くフランク王國のために獻げ、中世に於ける基督教的並びに世俗的教化事業に絶大の功績を遺したのである。

ラバーヌスの事蹟　アルクィンの弟子中特に有名なるはラバーヌス・マウルス[1]である。ルードウィヒ敬虔帝の晩年より大帝國は分封の爭を經て結局東西のフランク及び伊太利に分れたのであるが、ラバーヌスはその東フランク即ち後の獨逸のフルダの僧庵長となり、多數有爲の門弟を出し、宛もさきのフランク王國に於けるアルクィンの如き勢力と感化とを國內に振ひ、「ゲルマニア第一の教師[2]」と讃へられた。彼の思想はアルクィンよりも更に廣く進歩的であつて、古典學藝をも神學と共に尊重した。その著『僧侶教育論[3]』は七自由科を始め百般の內容を含み、當時に於ける教育の全野を最も包括的に指示せるものである。

三　カール禿頭帝とエリゲナの事蹟並びにその他の教化事業

カール禿頭帝とエリゲナの事蹟　ルードウィヒ敬虔帝の第三子カール禿頭帝[4]は西フランクに分封せられたが、幼時より學藝を修め、長じて益學者を召集して交り、特に深く哲學を愛し、その宮廷をして學藝の一大園囿たらしめた。

カール禿頭帝の宮廷學校の教師中特に有名なるはジョン・スコート・ス・エリゲナ[5]である。彼は愛爾蘭に生れ、鄉土に於ける修學の後、佛蘭西及び東方諸國に遍歷し、知名の都市、僧庵、學者の殆どすべてを訪問し

1) Hrabanus Maurus. (776—856)　2) Primus praeceptor Germaniae.
3) De Clericorum Institutione.　4) Karl der Kahle, (r. 843—877)
5) John Scotus Erigena. (810—880)

て見聞を廣め、教父哲學の外に希臘羅馬の學藝を豐富に修得し、第九世紀に於ける最大の學者となつた。八四五年頃カール禿頭帝に召されて宮廷學校の長となり、アルクィンやラバーヌスよりも更に自由にして進歩的なる態度を以て希臘哲學を採用し、それを用ひて神學上の論爭を試み、その點に於てスコラ哲學初期の一代表者とも見らるべき地位を占めた。

その他の教化事業　右の外イングランドに於てはアルフレッド王が國民教化に大なる關心を寄せ、大陸から學者を招いて自ら羅甸語を學び古典學藝を修めた。そして又教父哲學や歴史の書籍の英譯を命じて、英國民に宗教的並びに世俗的教養を與へ史的觀念を喚起せんことを企てた。

伊太利に於てはフランクやイングランドに比すべき王室の教化事業は見られなかつた。僧庵の主要なるものはモンテカシノ及びファルファであつたが、九世紀の終頃にはサラセンの侵入又は内亂のために荒廢に歸した。これに反し世俗的教養の水準は伊太利に於ては北歐地方よりも遙かに高く、大學の勃興や後の文藝復興運動の源泉がそこに用意せられてゐたのである。

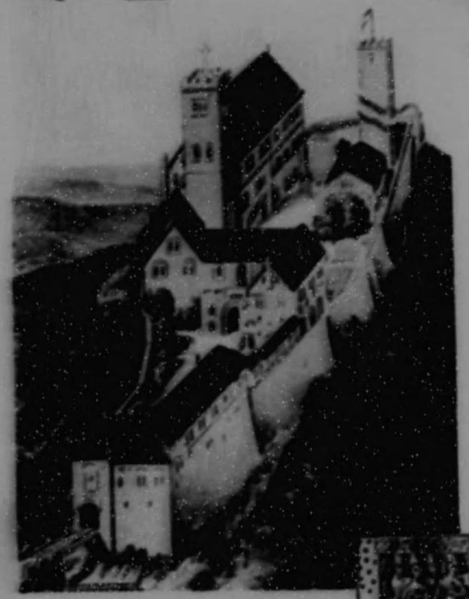
第二節　騎士の教育

一　封建制度と騎士教育

封建制度の起源及び發達　ゲルマン民族の歐洲侵略に始まつた中世史は、爭亂攻防の戰史を中心とするものであり、從つてそこでは相互の自衛のためにも他民族の外寇を防ぐため

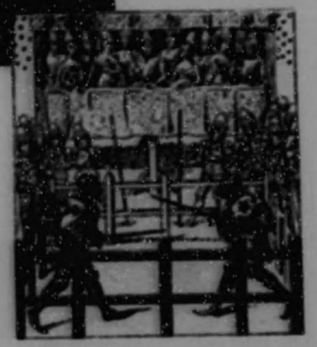
4. 元服

2. 騎士



1. 城郭

3. 騎士



5. 試合

にも、平時から兵馬を養つて有事の日に備へる必要があつた。この事を最も組織的に行つたのがフランクの宮相マルチルである。即ち彼はサラセン族が南歐に侵入するや、その北上を難遮するため、王領及び寺領を割き封土として部下に與へ部下をして王室及び教會への奉仕を誓はしめた。これが封建制度の起源である。(八世紀) 而してフランク王國が東西に分裂するや、もとその地方官であつた諸侯伯は自立して次第に世襲の支配者となり、封土を私有し、更にその所領を部下に與へて主從の關係を結んだ。この制度は十世紀に至つて完成し、十三世紀頃までに極盛に達し、中世歐洲の現實的勢力として、一面には基督教に奉仕しつつ、他面には社會の秩序維持に貢獻した。

騎士教育の監督　封建制度に於ける支配階級たる武士は騎兵を主勢力としたが故に、武士は同時に騎士階級[1]であつた。而して武士をして上述の如き制度の趣旨に副はしめるためには、彼等の間に特定の生活理想と生活内容とを有する武士道を發達せしめ、且つそれを修得せしめるための特定の慣例即ち騎士教育の制度を成立せしめるに至つた。十三世紀の後半十字軍の悲れる頃を境として、武士の勢力が衰へ騎士教育も次第に頽勢に傾き、放縱暴虐なる野武士が横行するに至つたけれども、ここには武士の最盛期に於ける典型的騎士教育に就いてその要點を略述したいと思ふ。

1) ordo equestris, kniight.

二　騎士教育の段階、内容及び理想

教育教育　騎士教育の第一期(六歳まで)は母及び侍女の手により家庭に於て行はれる。強壮なる身體と快活、従順、敬虔なる精神とを以て、自由に歩き廻り遊び暮らし、切き心をば現世と來世との希望即ち騎士と神との理想によつて充たすことがその要旨である。故に宗教教育を主とし、又長上への従順を重んじながら、尚も明朗なる兒童期を送らしめることが意圖せられた。

侍童としての教育　第二期七歳より十三歳まで)は侍童[1]として、近親の武家又は主君の殿中に送られ、男主人には紋章や旅行に伴はれ、女主人にはその起居に侍して上流社會の風習や貴婦人に對する禮儀等を學ぶ。學習は奉仕と不可分に考へられ、そのためには兩親の家よりも他家の方が適所と信ぜられたのである。ここでも宗教教育は重要視せられ、敬虔・親切・従順・謙遜等の諸德が養はれる。

徒弟としての教育　第三期(十四歳より二十歳まで)は主として男主人に侍し武士のための直接の教育を受ける。その教育の内容は、かの七自由科に對する七藝ともいふべきもの即ち乘馬・水泳・射術・劍術・狩獵・將棋・作詩である。この外、琴や笛の彈奏、英雄の事蹟を讃へる唱歌、騎士の用語たるフランス語等をも學んだ。而してこの時期は狩獵にも戰争にも實戰にも常に盾を捧持して主人の側に侍することから、盾持[2]又は盾身と呼ばれた。

元服の儀式　かくして二十一歳に達すると愈騎士の籍に編入せられるために元服の式が行はれる。それは戰争の前又は大勝利の後若しくは大祭日に擧げられたが、盾持はこの式の前に斷食・

1) page.　2) targeteer. squire.

祈禱を行ひ、沐浴し、先づ白衣を着けて心情の潔白を表示し、次に赤衣を着けて信仰のためには血を注ぐことを誓せざる熱意を象徴し、更に黑衣を着けて常に死を怖れぬことを表現する。式の前夜教會に入り祈禱を捧げ、聖餐儀式して之を聽許せられ、聖餐を受け、然る後に衆人列座の式場に伴れ出され、そこで騎士の本誓に關して問はれ教へられ誓はせられる。その内容は、勇敢で大膽で忠實であり、貧者を保護し、弱者を助け、憐れみを乞へる敵を救し、捕はれたるものを寛大に扱ひ、常に反逆と不正とから身を遠ざけ、安息日には斷食し平日には聖餐に列し、あらゆる人に向つて信仰を告白し施護し、信從を愛し尊敬し援助することである。この誓の済んだ後に騎士と貴婦人とが彼に黄金の拍車を授け、甲冑を着けさせ、小手をはめ、盾の紋を穿かせ、劍を帶びさせる。そこで領主は、跪ける盾持の肩若しくは首に劍を以て三擊を加へ、神と騎士團の守護者ミカエル及び殉教者ゲオルギオスとの名に於て、彼を騎士の列に加へる旨を宣し、やがて立上れる彼に同胞としての接吻を與へる。その時鎧は鳴り喇叭は響き、新しき騎士は盾と槍と兜とを與へられ、軍馬に跨り、群衆歓呼の中を城に向つて立去るのである。

騎士教育の理想とその史的意義　以上の如き教育の段階及び内容によつて觀はれる如く、騎士教育の理想は、信仰を施護し禮儀扶助の現實的正義を支持し、教會に取つても國家に取つても、有爲の士たるべき者を養成することに存した。そこでは單に果敢なる闘士のみならず、當時に於ける紳士ともいはるべき理想人が求められてゐた。それ故に騎士はやがて男子の理想であり典型であつて、騎士道の名の下に愛はれたる諸德は個人の道德生活の主要契機となつて來たのである。

二　騎士教育の段階、内容及び理想

教育教育　騎士教育の第一期(六歳まで)は母及び侍女の手により家庭に於て行はれる。強壮なる身體と快活、従順、敬虔なる精神とを以て、「自由に歩き廻り遊び暮らし、幼き心をば現世と來世との希望即ち騎士と神との理想によつて充たすこと」がその要旨である。故に宗教教育を主とし、又長上への従順を重んじながら、尚も明朗なる兒童期を終らしめることが意圖せられた。

侍童としての教育　第二期七歳より十三歳まで)は侍童[1]として、近親の武家又は主君の殿中に送られ、男主人にはその起居に侍して上流社會の風習や貴婦人に對する禮法等を學ぶ。學習は奉仕と不可分に考へられ、そのためには兩親の家よりも他家の方が適所と信ぜられたのである。ここでも宗教教育は重要視せられ、敬虔・親切・従順・温順等の諸德が愛はれる。

徒弟[2]としての教育　第三期(十四歳より二十歳まで)は主として男主人に侍し武士のための直接の教育を受ける。その教育の内容は、かの七自由科に對する七藝ともいふべきもの即ち乘馬・水泳・射術・劍術・詩歌・弄技・作詩である。この外、琴や笛の奏奏、英雄の事蹟を讃へる唱歌、騎士の用語たるフランス語等をも學んだ。而してこの時期は殆ど後にも徒職にも實職にも常に盾を捧持して主人の側に侍することから、盾持[3]又は盾身と呼ばれた。

光榮の儀式　かくして二十一歳に達すると愈騎士の團に編入せられるために元服の式が行はれる。それは戰爭の前又は大勝利の後若しくは大祭日に擧げられたが、盾持はこの式の前に斷食、

1) page.　2) targeteer.　squire.

新禱を行ひ、懺悔し、先づ白衣を着けて心情の潔白を表示し、次に赤衣を着けて信仰のためには血を注ぐことを辭せざる熱意を表し、更に黑衣を着けて常に死を怖れぬことを表現する。式の前夜教會に入り新禱を捧げ、聖劍懸佩して之を聖許せられ、聖餐を受け、然る後に衆人列座の式場に伴れ出され、そこで騎士の本分に關して問はれ敎へられ警はせられる。その内容は、勇敢で大膽で忠實であり、貧者を保護し、弱者を助け、憐れみを乞へる敵を赦し、誘はれたるものを寛大に扱ひ、常に反逆と不正とから身を遠ざけ、安息日には斷食し平日には聖餐に列し、あらゆる人に向つて信仰を告白し抽象し、信徒を愛し尊敬し援助することである。この誓の済んだ後に騎士と貴婦人とが後に貴金の拍車を授け、甲冑を着けさせ、小手をはめ、鎧の鞍を穿かせ、劍を帶びさせる。そこで領主は、露ける盾持の肩若しくは首に劍を以て三撃を加へ、神と騎士團の守護者ミカエル及び殉教者ゲオルギオスとの名に於て、彼を騎士の列に加へる旨を宣し、やがて立上れる彼に同胞としての接吻を與へる。その時鐘は鳴り喇叭は響き、新しき騎士は盾と劍と槍とを與へられ、軍馬に跨り、群衆歡呼の中を城に向つて立去るのである。

騎士教育の理想とその史的意義　以上の如き教育の段階及び内容によつて現はれる如く、騎士教育の理想は、信仰を強調し、武勇を尊ぶ封建的現實的正義を支持し、教會に取つても國家に取つても、有爲の士たるべき者を養成することに存した。そこでは單に果敢なる闘士のみならず、當時に於ける紳士ともいはるべき理想人が求められてゐた。それ故に騎士はやがて男子の理想であり典型であつて、騎士道の名の下に愛はれたる道德は實に永く紳士道として尊重せられ、今日に到るまで歐洲人の道德生活の主要要素となつて來たのである。

女子の教育　因に貴家の婦女の受けたる教育は、紡績・裁縫・家事の外に、初歩の讀書並びに語學・對話・唱歌・管絃樂等であり、又繪畫や作詩も重んぜられた。そして各教科目に應じて家庭教師が聘せられ、婦人の深窓に於てその教授が續まれた。一方騎士道は基督教の婦女尊敬思想と結合して貴婦人に奉仕することを主要なる一項目としてゐたが故に、婦人はそれに應ずるだけの品位・性行・見識を必要とせられ、眞の騎士道と眞の婦德とは相俟つて當時の理想を形成してゐたのである。

第三節　大學教育の勃興

一　大學の起源

回教國の大學　中世後期の世俗的教育の發達は、先づ上流知識階級のための大學の勃興として現れた。而して歐洲の諸大學の勃興に對して直接の前身とはならなかつたが、それに間接の刺戟を與へたものは、サラセン人の大學である。アラビアの民族たるサラセン人は第七世紀の初頃までは遊牧と掠奪とを事とする半開の民であつたが、マホメット[1]の出現によつて一大宗教的勢力となり、その後繼者たる歷代のカリフが、教祖の遺志を受け布教を中心として諸方を攻略し、歐亞兩大陸に跨る大帝國を建設した。第八・九世紀の頃はサラセン文化の極盛期で、自然科學や數學の如きは遙かに歐洲諸國を凌駕し、建築や裝飾も獨特の樣

1) Mahomet. (571—632)

式を誇り、希臘・羅馬の古典學藝すら歐洲人よりも先づサラセン人によつて攻究せられる實情であつた。スコラ哲學の隆盛を導けるアリストテレース研究の先驅者としてさきに擧げたアヴィヴェンナ及びアヴェロエスの如きはサラセン學者の代表者である。かくして第十一世紀の頃にはコルドヴァ・グラナダ・トレド・トレクサンドリア・カイロ等に回教徒大學が存し、數學・自然科學・醫學・哲學・法學等の研究・教授が行はれてゐた。これ等の大學とその業績とは、サラセン人の歐洲發展並びに歐洲人の十字軍參加によつて歐洲諸國に傳へられ、大なる刺戟・影響を與へたのである。

歐洲の大學の起源　歐洲の大學は僧庵學校若しくは本山學校を母胎とし、東方サラセン文化の刺戟によつて、十三世紀以後に漸く勃興するに至つた。而してそれ等はもと學者と學生との自由なる會合に起源を有し、國民の別なく一般にその研究團體に參加し得るの謂を以て「一般研究所」[1]と呼び、その團體を「教授及び學生の團體」[2]と呼んでゐたが、それが後世綜合大學の呼稱となり、又學生の「合宿所」[3]が後世單科大學の呼稱となつた。かくて大學は初め私的研究團であつたが、その勢力が次第に重きをなすに至ると、寺院及び國王は大學を自己の勢力範圍に入れるために、之に特權を與へて公認した。その結果やがて大學は法王又は國王の認可を俟つて始めてその權能を得ることを慣例とするに至つた。

1) studium publicum, studium generale.
2) universitas magistrorum et scholarium.　3) collegium.

古く有名なる大學として、第一に擧げらるべきは北伊太利のボロニア大學である。一般に北伊太利の都市は羅馬の遺風を存し羅馬法の研究を必要とし、既に第八世紀頃よりラヴェンナやボロニアには法學校があつた。又寺院に關する法律も次第に整頓研究せられ、一一四二年にはボロニア僧侶グラティアヌスによつて寺院法集成たる所謂『グラティアヌス法』が刊行せられ、その研究が普く行はれるに至つた。かかる情勢の下にボロニアの法律學者イルネリウス[1]は私塾風の研究所を起し弟子を集めて羅馬法及び寺院法を教授した。その研究所を「一般研究所」と呼びその學徒の集りを「團體」と呼んだ。そして一一五八年に皇帝フレデリック一世はこれを大學として公認し、十三世紀の中頃には教皇も之を認可した。當時約一萬の學生が居り、アルプスを境としてその出身地を分ち、「山の此方の團體」と「山の彼方の團體」とに分れて集團が出來てゐた。

次に南伊太利のサレルノ地方は氣候温和にして温泉もあり療養地として知られ、醫學の研究が早くより起つてゐた。サラセン醫學の影響や希臘醫學の復活もそれに力を添へてゐたであらう。第十一世紀の終頃にはコンスタンティヌス[2]を代表とする醫學の中心地となつてゐた。彼は東方に於てアラビア醫學を學び、この地に來たものと思はれる。かくてこの醫學校が一二三一年に大學として公認せられた。尚ボロニア大學より分れてパドヴア大學が起り、サレルノ大學よりナポリ大學が出來、その他伊太利に種々の大學が勃興するに至つた。

北歐に於ける最古の大學は巴里大學である。それは歐洲諸大學の範型となり、中世の巴里は寇も古代に於けるアテーナイや羅馬と同樣の地位にあつた。ノートルダムの教會に附屬せる小山學校はアベラール[3]の努力によつて數千の學生を集むるに至つたのであるが、それに他の寺院の附屬學校

1) Irnerius. (1055—1130)　2) Constantinus Africanus.
3) Abelard, (1079—1142)

も併合されて巴里大學となり、一一八〇年に皇帝ルイ七世によつて認可せられ、後十八年を經て法王にも認可せられた。その由來上、巴里大學は神學を以て特に有名である。

又十三世紀中頃にソルボンヌ[1]といふ僧が巴里市内に神學研究生のための合宿所を建り、これを「ソルボンヌの合宿所」[2]と名づけた。當時道路惡しくして雨天の日には教師が自ら合宿所に出かけて講義を行つた。これが今日のソルボンヌ大學の起源である。佛國にはこれより各地にコレギウムとしての大學が勃興した。

その他英國に於ては十二世紀後半にオックスフォード大學、十三世紀の初にケムブリッヂ大學が、伊れも宗教に關係して起り、獨逸でも十四世紀にプラーグ、ウイーン、ハイデン、ベルヒケルル、エルフルト、十五世紀にウュルツブルグ、ライプチヒ、ローシュトック等の大學が起つた。これ等は主として巴里大學に倣つたものである。

二　大學の組織及び內容

大學の組織　大學は「一般研究所」の名の如く、各國よりの學徒を收容したが故に、國籍別の團體たる「ナチオン」(出身團)[3]が單位となり、植利の授與やその行使もこの單位に即して行はれ、又合宿所も元來は各ナチオンの宿舍であつた。併し後にはこの單位は次第に崩れて「分科」[4]が單位となるに至つた。

各分科の教授は互選によつて分科大學長[5]を選出し、分科大學長は更に總長[6]を選擧した。

1) Robert de Sorbonne.　2) Collegium Sorbonnicum.
3) nation.　4) facultas.　5) Decane.　6) Rector.

この外法王より選ばれたる監督が大學監督官[1]となつてゐることもあつた。尤も當初は學生も教授も共に選擧權を有してゐたが、次第に複雜となるに及び右の如く教授側のみが選擧することとなつた。

大學の特權　大學の教授及び學生は兵役・納稅その他の義務を免除せられ、又經濟的にもその都市に於て優待せられる特權を有してゐた。特に重大なる特權は大學內部の裁判及び刑罰の權利であつて、これは元來ボロニア大學に於て、法律研究を專門とする大學は法律の運用に關して誤謬のある筈はないとの前提の下に、皇帝から附與せられた特權であるが、後に各國の大學にも行はれるに至つたものである。これ等の特權のために大學關係者は往々その都市の市民の反感を買ふこともあつたが、この場合に大學は「授業休止」を行ひ、又は移轉を行つて、市民を脅かすといふ武器を有してゐた。

大學の分科　前述の如く各大學はその歷史に關係して特色ある學科を有してゐたが、次第に他の學科をも加へ、その完全なる組織に於ては、神學科・法科・醫科並びにそれ等への豫備課程としての文科[2]の四分科を併置することになつた。文科は七自由科を內容とし、特に論理學と辨證法とを重んじ、又アリストテレース研究をも加へることが多かつた。神學科に於ては既述の如くペトルス・ロムバルド。スの『意見書』及びトーマス・アクィナスの『神學汎論』が最

1) Kanzler.　2) focultas artium.

も多く行はれ、法科は國法として羅馬法及び現行法を、寺院法として既述の『グラティアヌス法』を主として教授し、醫科は希臘・サラセン・猶太・サレルノ等の諸學者の醫書を講讀させたりした。

大學の教授法　印刷術も發明せられず、筆寫書籍の數も少かつた當時に於て、大學の授業が講義の筆記であつたのは已むを得ない。逐字的筆記に終始する授業に於て學生が代人を出して筆記させ、時には教授の側からも代人を出して講述させるといふ皮肉な事實さへも行はれた。且つその講義は概して冗慢に流れ、ウィーン大學の神學教授ハーゼルベッハの如きは舊約聖書のイザヤ書の一章を講ずるに二十二年間も掛つたと傳へられてゐる。講義の外に討論として形式論理學の三段論法を用ひてする辯論も行はれ、それが後世大學の演習の前身となつた。

大學の學位　學位を授けることも大學の特權の一つであつて、學位の性質は教師たるの資格を證明するにあつた。マギステル[1](もと職業組合の親方の意)、ドクトル[2](教授者の意)、リケンティア[3](教授の特許の意)は、何れも教授たる資格を示すもので、略、同意義に用ひられた。バッカラウレウス[4](初心者の意)は前三者よりも下級の學位であつた。これ等の學位を得る年限は大學により、分科により、時代により、一樣でなかつたが、概してその豫備課程たる文科を二三

1) Magister.　2) Doctor.　3) Licentia.　4) Baccalaureus.

年で終り、それより專門の分科に入つて二三年でバッカラウレウスを得、更に二三年にして最高の三學位の何れかを得るのが通例であつた。そして學位の授與は公開の席上で嚴肅な儀式を以て行はれた。

第四節　市民教育の發生

一　都市の發達と市民の教育

都市の發達　中世の都市は初めゲルマン族に蹂躙せられて衰微し、商工階級は農民と共に領主に隷屬したが、やがて社會秩序の回復と共に次第に商工業が復興し富力が增大するや、彼等は領主に獻金して自治權を得、又私兵を養つて自衛策を講じ、都市は一種の獨立共和國の如き趣を呈して來た。更に十字軍の影響として僧侶武士階級が衰頽し商工階級が益々擡頭するに及び、各都市は外に相互の聯盟を締結し(例へば北伊太利のロムバルディア同盟、獨逸のハンザ同盟の如く)商權を獨占し兵力を蓄へて諸侯に對立し、內には組合を組織して商工業の統制と主從關係の團結とを確保し、益々その存在根據を固めて行つた。

市民教育の發生　かかる情勢に於ては市民階級[1]は全く一個の新興勢力となり、彼等は自

1) Bourgeoisie.

らの生活の必要上それに固有なる教育を要望し、玆に各種の市民學校を發生せしめた。蓋し市民教育の發生は、市民自體が教育の必要を感じ且つこれを受け得べき餘裕を有することを條件とするのであるが、今やまさにこの條件は具はり、而も世俗を離れた宗教教育や、上流特權階級のための騎士教育や、餘りに高度の大學教育などが庶民の要望に副はざるに至つて、ここに市民に固有なる教育機關を發生せしめたのである。

二　市民學校の種類と內容

上流市民學校　市民の中にも亦おのづから上流・下層の別がある。比較的上流の者卽ち市會議員有資格者のために起つた教育機關が所謂議員學校[1]である。十三世紀頃獨逸のリューベック・ブレスラウ、ハムブルグ等に之が起り、後世の羅甸學校[2]の前身となつた。次いで英國にも上流市民階級のための所謂公衆學校[3]がウィンチェスター(十四世紀)イートン(十五世紀)ウェストミンスター、ハロー、ラグビー(以上十六世紀)チャターハウス(十七世紀)に起つた。これ等は何れも現代に至るまで比較的上流の子弟の中等教育機關として傳統を引いてゐる。

下層市民學校　次に下層市民階級に對しては、英國に於て組合所屬の子弟に普通教育を施した所の組合學校[4]、獨逸に於て商業用の讀書算術を敎へた獨逸語學校[5]又は習字學校[6]等が

1) Scholae senatoriae. (Ratschule.)　2) Lateinschule.
3) Public school.　4) Guild school.　5) Deutsche Schule.
6) Schreibschule.

あり、又既述の如く各國に於て基督教牧師が夫々の教區の兒童のために設けた教區學校[1]もその內容は主として一般下層庶民の子弟に普通教育を施す世俗的機關であつた。これ等各種の教育機關が後世の小學校の前身となつたのである。

結語　中世教育の全體的特質

中世教育史の全體的特質は、基督教の教化である。基督教が歐洲人に與へた最深の影響は、古代希臘文化を貫く聰明なる知性に對立して、氣高き道德性である。歐洲人は中世期を經過することによつて、その心情の奧深き所に、愛と貞潔と忍苦と犧牲とその他數々の堅固なる道義を植付けられ、而もこれをば永遠と絕對者とに對する限りなき信仰によつて支ふるに至つた。道德と信仰、信仰に基く道德—これこそは中世教育史の遺せる第一の功績であつて、教會も僧庵も騎士社會も、凡そ中世社會の根幹を形成せる勢力はこれを基調とし、教父哲學及びスコラ哲學もこの基調に立つてゐたのである。

第二に中世人の生活—從つてその教育—を支配せる著しき特徵は團體主義であり且つ權威主義であつた。制度化されたる基督教の配下に屬する教會僧庵騎士社會は固より、世俗的生活形態たる大學や組合に於ても、個人は何等かの團體に從屬し、その團體を規制する權威に服從することによつて、各自の生活と教養とを與へられた。個人に個人としての價値と自由とを認めることを知らざる團體本位權威主義は、かくして僧俗上下を通じて中世の社會と教育とを特色づけたる主要徵表である。

第三に併し中世期はそれ自らの裡に自己崩壞の動因を醞釀せしめてゐた。教會勢力の極まる所にその腐敗は生じて、原始基督教の素朴淸新なる氣分と深き主觀への徹底とが要望せられ、そこに遠く宗教改革への素因が蓄へられた。神學の奴婢スコラ哲學が衰頹に傾く所に近代の學的精神は萠芽を藏し、大學に與へられたる研究熱と自治的機構とはやがて學藝の自由研鑽の地盤を用意した。而して新興市民階級が物質的現世的勢力を蓄へて教化への新鮮なる要望を揭げたとき、そこに近代的大衆教育の機運は動いてゐた。中世期を蔽へる宗教的團體的權威的主勢力は、かくしてそれ自らの裡に、やがて來るべき現實主義個人主義自由主義の潛勢力を養つて來たのである。而してこの潛勢力は希臘羅馬の古典文化に共鳴の對象を見出し、それの復興によつて明日の世界を創始せんとしてゐる。この多望なる前夜に於て—近世の文化と教育とに黎明を告ぐべき文藝復興運動を目前に控へつつ—吾々は中世教育史の幕を閉ぢたいと思ふ。

1) Pfarrschule.

72

昭和十六年九月五日印刷
昭和十六年九月十日發行（非賣品）

著作者　石山徐平
發行者　日高義七
印刷者　石村勤
印刷所　大日本印刷株式會社

不許複製

發行所　國風書房
東京市神田區淡河柴三ノ一
電話神田一〇五八・一〇五九
振替東京二八〇九